

第Ⅳ章 遺 物

1 瓦 磚

A 軒 瓦

軒 丸 瓦
Ⅰ A・Ⅰ B・
Ⅱ・Ⅲ

吉備池廃寺の発掘調査では、軒丸瓦が4種類、軒平瓦が3種類出土した。これまでの『年報』や『紀要』では、大脇潔による型式設定にならい、吉備池廃寺創建軒丸瓦を「Ⅰ A・Ⅰ B」、創建軒平瓦を「Ⅰ b₁・Ⅰ b₂」¹⁾として報告してきた。今回の正式報告にあたっても、基本的にはこれまでの型式分類を踏襲する。²⁾軒丸瓦については、吉備池廃寺の創建軒丸瓦をⅠ A・Ⅰ B（Ⅰ型式A種・Ⅰ型式B種）とし、これに続く藤原宮期から奈良時代の軒丸瓦をⅡ型式、平安時代の軒丸瓦をⅢ型式とした。

一方、軒平瓦については、多少変更をくわえる。これまでの軒平瓦Ⅰ b₁・Ⅰ b₂という型式名は、斑鳩寺213型式B種を「Ⅰ a」として認識し、押し型を押捺する前に施文がないか、重弧文を施文するかの違いを、「b₁・b₂」で表現するものだった。しかし、実際には、斑鳩寺例を「Ⅰ a」と記述することはまったくなかった。それにくわえ、「第Ⅴ章4 出土瓦をめぐる諸問題」で詳しく述べるように、吉備池廃寺の軒平瓦の文様型はたしかに斑鳩寺からの転用だが、型それ自体に彫り加えをおこなった形跡はない。よって、本来、瓦範の彫り直しを表現する a・b のアルファベットの小文字表記は、このケースにはなじまないことになる。

また、瓦範で施文する手法以前の軒平瓦の型式分類は、『山田寺発掘調査報告』で重弧文軒平瓦を対象としておこなったように、³⁾文様の特徴と施文手法を中心として瓦の製作技法をも加味した分類がもっとも理解しやすいと思う。

軒 平 瓦
Ⅰ A・Ⅰ B・Ⅲ

そこで、本報告では、吉備池廃寺創建軒平瓦を「Ⅰ型式」とし、これまでのⅠ b₁をⅠ A（Ⅰ型式A種）、Ⅰ b₂をⅠ B（Ⅰ型式B種）として報告する。また、軒丸瓦にあわせて、藤原宮期から奈良時代の軒平瓦をⅡ型式、平安時代の軒平瓦をⅢ型式としたが、Ⅱ型式に該当する瓦当部の資料が出土しなかったので、本報告では軒平瓦Ⅱ型式を欠番とした。

i 軒丸瓦 (Fig. 56~59, PL. 33~36)

軒丸瓦Ⅰ型式 山田寺式の重圈文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。Ⅰ A・Ⅰ Bの2種類の瓦範があり、ともにきわめてよく似た文様である。これまでの調査において、Ⅰ A 42点、Ⅰ B 23点、種別不明25点の合計90点が出土した。

Ⅰ AとⅠ Bの
共通点

軒丸瓦Ⅰ A・Ⅰ Bとも、蓮弁は肉厚で、弁端の立ち上がりが小さいものの、強く反転する。一方、子葉は薄肉で細く、先端に丸みをもつ。蓮弁を取り囲む輪郭線は弁端で尖り、平面的にも反転を表現する。これは蓮弁の立体的な反転表現と対応している。弁央には、子葉基部から弁端にかけて稜線がはいる。

内区と外縁の間には1条の太い圈線がめぐり、蓮弁の輪郭線はこの圈線と接する。間弁は平面楔形で、タテに比べ、先端のヨコ幅が広い。

中房はごく緩やかな半球形をなし、1+8の蓮子を置く。外周の蓮子はそれぞれ間弁の対角線上に配置される。直立する外縁には、3条の重圈文が細-太-細の順でめぐり、その外側はゆるい傾斜面となっている。瓦当径は19~20cm。

軒丸瓦 I A・I Bには、上記のような共通した瓦当文様の特徴がある。遺存状況のよい木之本⁴⁾ 廃寺(橿原市木之本町)の資料を参照しつつ、両者の違いを列記しておく(PL.33~35)。

IAとIBの
相 違 点

- ① 軒丸瓦 I Aは軒丸瓦 I Bに比べ、子葉や圈線の表現が全体に細い。
- ② 蓮弁の盛り上がりは、軒丸瓦 I Bがより大きい。
- ③ 軒丸瓦 I Aは中房の直径がやや小さい。I Aが4.0cm前後、I Bが4.2~4.5cmほど。
- I Bの中房面には同心円状の凹凸がある。
- ④ 軒丸瓦 I Bは、軒丸瓦 I Aに比べ、中房の蓮子配置がより整然としている。
- ⑤ 外縁上の重圈文は、軒丸瓦 I Bが軒丸瓦 I Aよりもかなり太い。

次に、軒丸瓦 I A・I Bについて、おのおのの接手法や裏面調整など、製作技法を中心に記述していこう。

軒丸瓦 I A (Fig. 56・57, PL.33~37) 1 (Fig. 56, PL.33上・34-1) は、吉備池廃寺出土例の中で最も残りがよい。外縁幅は1.3cmとやや狭く、3条ある重圈文のうち、外側の圈線までしか表出されていない。瓦当裏面は、深くヘラケズリした丸瓦筒部先端の形に対応させて、上端を斜めに削り落としている(PL.36-4)。丸瓦接合時には、凹面に接合粘土を付加する前に、瓦当裏面の粘土を丸瓦凹面にナデつけて、丸瓦を仮固定する(以下、これを「支持ナデつけ」と呼ぶ)。表面は全体に摩滅しており、裏面調整などは不明。瓦当裏面は、中央がやや高く膨らむ。直径20.0cm、内区径15.5cm、中房径4.0cm、瓦当厚3.0cm。硬質の焼成で、灰色をしている。

「支持ナデ
つ け」

後述する創建丸瓦 1 類Aと、釘穴をとどめる丸瓦部とを合成し、軒丸瓦 I Aの復元をおこなった(Fig.56-1)。全長約50cmと、同時期の出土瓦の中でも最大の規格となる。釘穴は、一辺1.0cmの方形で、焼成前に凸面から凹面に向けて穿孔しており、玉縁端部から約18.0cm、全長の約1/3のところの位置する(PL.37-1・2)。このほかに、一辺1.3cmの方形の釘穴をあけるものもある(PL.37-3)。

2 (Fig. 56, PL.34-2) は、外縁の外側は充分に表出されているが、外縁内面への粘土の充填が不十分であったため、1と同様の外縁幅となる。瓦当裏面の丸瓦接合面には、丸瓦の先端に加えられたタテ方向のキザミが転写されて残る(PL.36-8)。丸瓦接合前に、裏面全体に回転ナデをおこない(PL.34-2)、中央が少し高くなる。支持ナデつけはおこなわない。瓦範をはずした後、瓦当上半の外縁内面をナデつける(PL.36-9)。復元瓦当径20.1cm、瓦当厚は2.8cm。硬質の焼成で、暗灰色をしている。

丸瓦先端の
キ ザ ミ

瓦当文様の大略を残す資料は以上の2点しかないが、丸瓦の接手法などがわかる軒丸瓦 I Aの資料をもう2点図示した。

5 (Fig.57) は、凹面側を深く削って鋭くなった丸瓦の先端が、外縁の上面近くに達している。丸瓦先端は深くヘラケズリするが、キザミは加えない。支持ナデつけをおこなってから、接合粘土を付加する(PL.36-5)。外縁内面には、棒状の工具でナデつけた痕跡が残る。

6 (Fig. 57) は、瓦当側面に瓦範の範端の痕跡が残る。範端の位置は、外縁上面端部から側面に向かって4mmのところ、わずかな段差が認められる (PL. 36-1)。外縁幅は1.6cm。丸瓦先端凹面側を深くヘラケズリし、キザミを加えずに接合する。内面接合粘土をあてる前に、支持ナデつけをおこなう。凸面側には接合粘土がほとんどあてられていない。

軒丸瓦 I B (Fig. 56・57, PL. 33~36) 吉備池廃寺からは良好な資料が出土しなかった。

3 (Fig. 56, PL. 34-4) は、内区の半分弱ほどが残る資料である。復元内区径は16cm、中房径4.5cm。瓦当厚は2.0cmと薄い。やや軟質の焼成で焼きしまらず、全体的に少し大きい。黄灰色をしている。

4 (Fig. 56, PL. 33下・34-3) は木之本廃寺出土資料。参考資料として提示する。瓦当径20.6cm、内区径15.6cm。中房は径4.2cmで、上面に同心円状の凹凸がある。外縁幅は1.5cm、瓦当厚は3.1cm。表面の摩滅が著しく、瓦当裏面の調整は不明であるが、裏面中央を高く仕上げている。硬質の焼成で灰色をしている。胎土に含まれる長石の量が著しく多い。

7 (Fig. 57) は、瓦当下半部にあたるおおよそ1弁分を残す資料である。瓦当裏面には丸瓦接合前におこなった回転ナデの痕跡が残り、瓦当裏面の周縁下半を丸くおさめる (PL. 36-13)。側面は、円弧に沿った回転ナデ調整を2回に分けておこなっている。また、側面には部分的に木目圧痕をとどめるが (PL. 36-14)、乾燥時に付着した偶発的な圧痕と思われる。硬質の焼成で、暗灰色をしている。

8 (Fig. 57) は、丸瓦先端凹面側を深くヘラケズリして先を鋭くし (以下、このヘラケズリ面を「カット面」⁵⁾と仮称する)、キザミを入れずに瓦当裏面上端へかぶせるようにして接合する。丸瓦先端は外縁の文様面近くまで到達し、凸面側には接合粘土をほとんど付加しない。丸瓦接合時に支持ナデつけをおこなっているが、瓦当が比較的薄く作られていたのとカット面の長さが長かったため、カット面が瓦当裏面にとびだしてしまい、そこに支持ナデつけがあたっている (PL. 37-4)。

9 (Fig. 57) は、最も薄いところで瓦当厚が1cmに満たない、超薄手品である。瓦当裏面にはユビオサエの痕跡をとどめる。外縁内面にはくぼみ状のシワがあり、そこを境に粘土が剥離したようにみえるが、よく観察すると剥離面は内側の幅0.5cmほどで、残りの1cmは破面である (PL. 36-2)。後述するように、この資料をもって、外縁部分には粘土紐を範詰めしていたと考えることはできない。

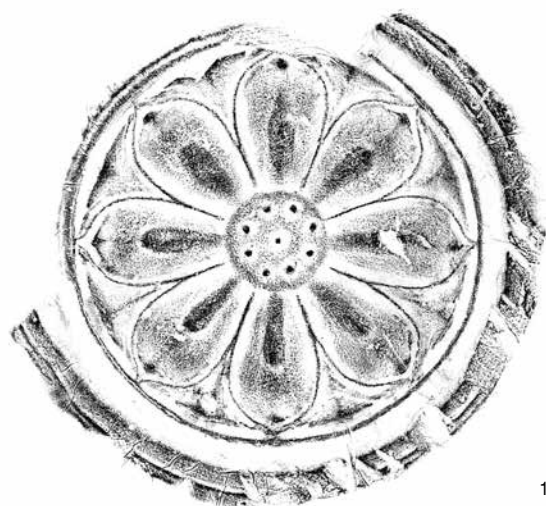
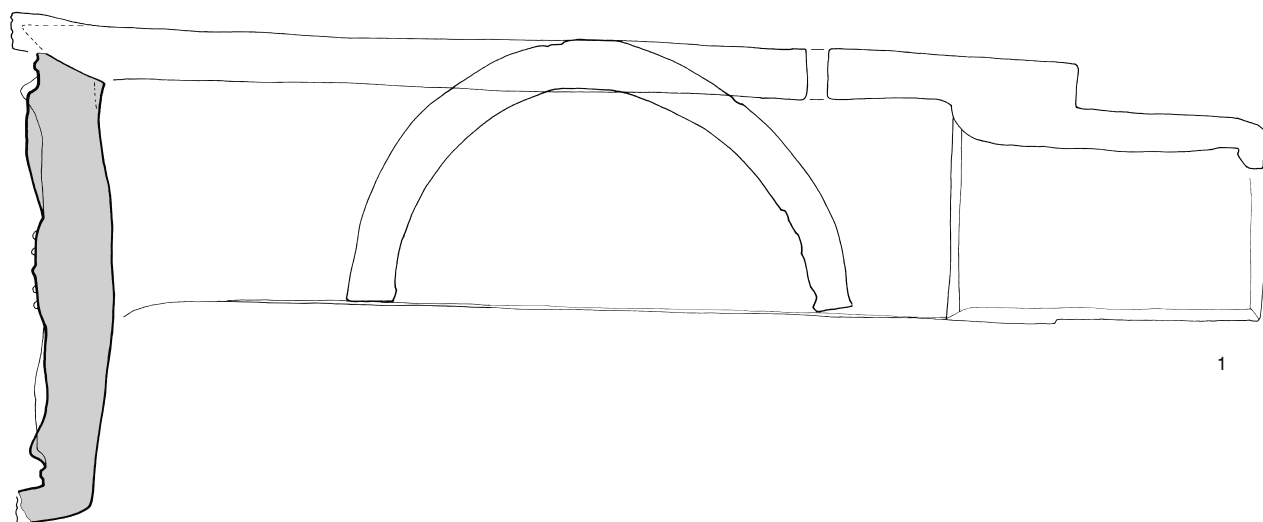
10 (Fig. 57, PL. 36-15) は、細弁蓮華文風に見えるが、瓦範が二重に押圧されたものである。いったん瓦範に詰めた粘土を、時計回りの方向に約20°ずらして詰め直している。丸瓦接合時に支持ナデつけは加えない。瓦当裏面全体は念入りにユビオサエをおこなう。瓦当厚2.0cm。どうやら、この瓦も吉備池廃寺の軒先を飾っていたようである。

最後に、軒丸瓦 I A・I Bの製作技法についてまとめておく。

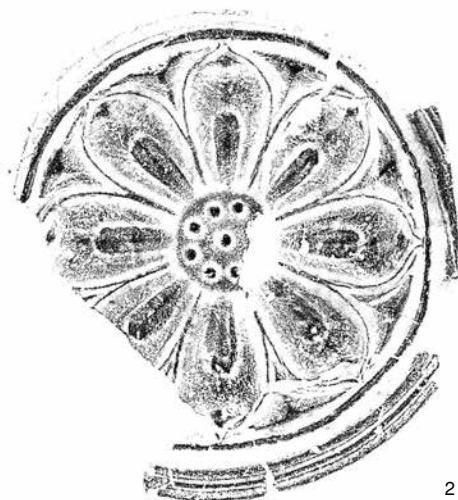
範端が側面
にかぶる

軒丸瓦 I Aの瓦範は、範端が瓦当側面にわずかにかぶるタイプである。軒丸瓦 I Bも、海会寺⁵⁾ (大阪府泉南市) 出土同範資料の状況から、同じ形態であったことが判明している。

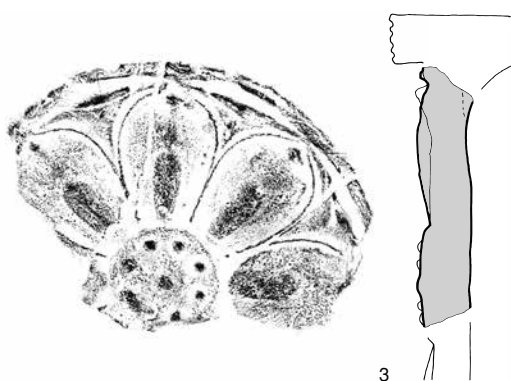
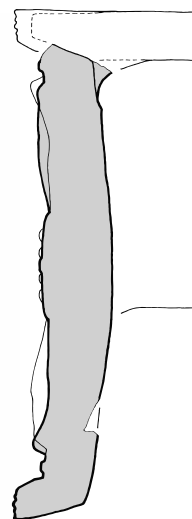
瓦当成形時、瓦範へは板状の粘土を一度に詰め込んだと考えられる。出土資料のなかには、外縁内面に粘土紐を積み上げたようなくぼみ状のシワもみられる (PL. 36-2) ので、外縁部分だけに先に粘土を詰めた⁶⁾とみなす意見がある。しかし、前述のように、その部分で剥離したこと



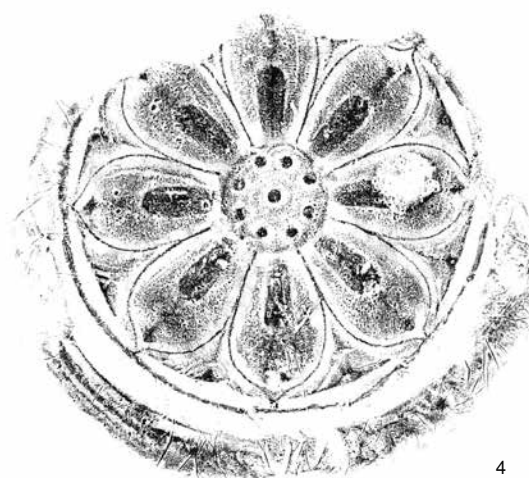
1



2



3



4

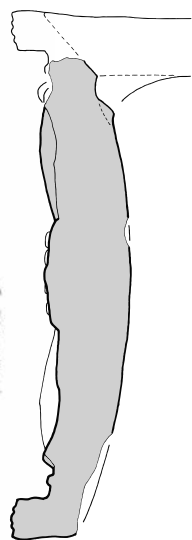


Fig. 56 軒瓦 I 型式 (1) 1:3

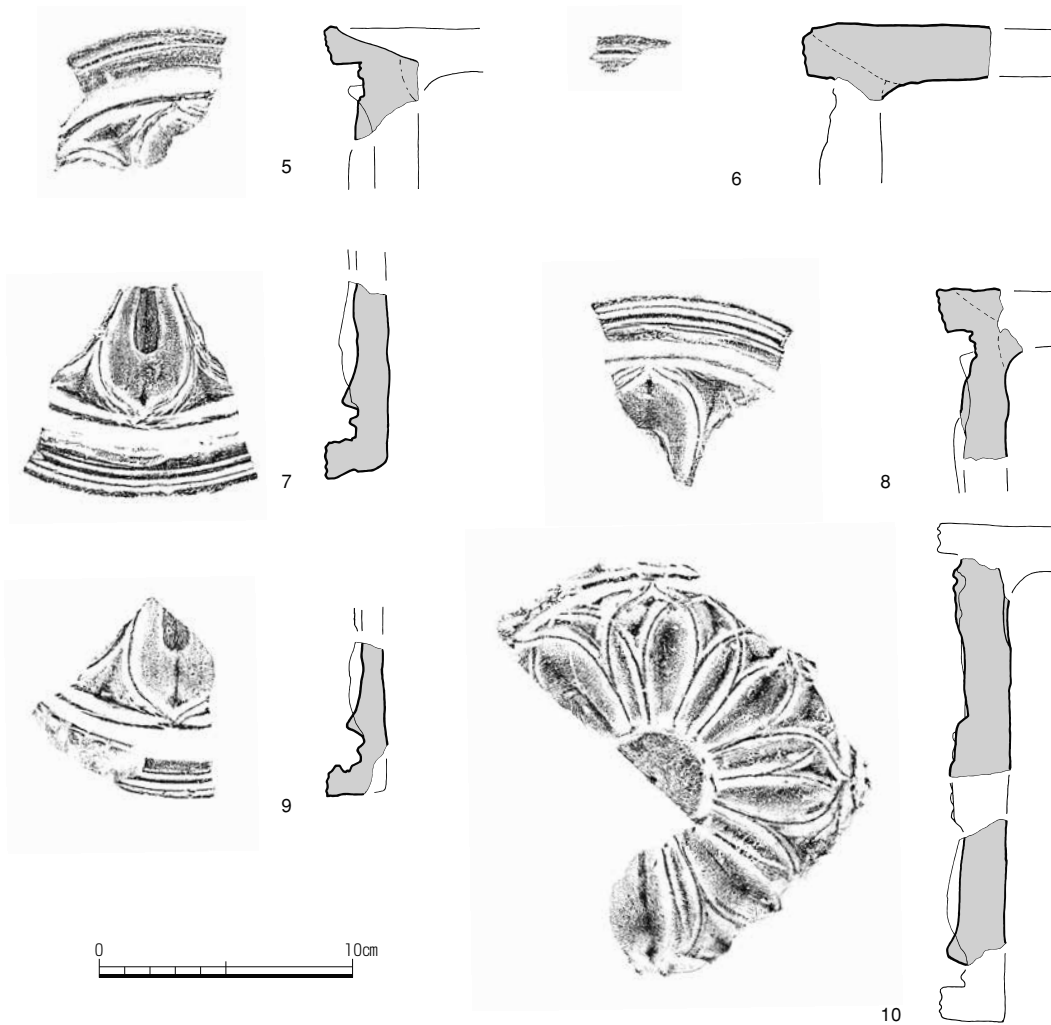


Fig. 57 軒丸瓦 I 型式 (2) 1:3

を明確に示す資料はない。そのうえ、外縁部分に粘土紐を充填したとすれば、瓦範の形態から判断して、粘土紐を詰めたときに周囲からユビオサエをするはずだから、粘土は外縁の内面に密着すると予想できる。また、多少はみ出した粘土が内区におよんで、内区の周縁部に粘土のシワが発生することも考えられよう。ところが、外縁内面が瓦範どおりに表出されていない資料がままみうけられる一方、内区の周縁部に粘土の継ぎ目風のシワを観察できる資料はない。したがって、板状の粘土を使って瓦当成形をおこなったと考えるのが妥当だろう。

板状の粘土
で瓦当形成

軒丸瓦 I A・I Bとも、玉縁丸瓦（後述の丸瓦 1 類）を接合する。接合にあたっては、丸瓦筒部先端の凹面側を深く斜めにヘラケズリして接合する（PL.36-3, 37-4）。また、このカット面にキザミを加えてから接合するものがあり、キザミは、タテ方向（PL.37-5）のほかに、タテと斜めのキザミを入れる例（PL.37-7・8）や、方向の違う斜めのキザミを X 字状に入れる例（PL.37-6・9）がある。丸瓦凹面の円弧に沿ったヨコ方向のキザミの例はない。

瓦当裏面上端は、丸瓦の先端加工に対応するように、斜めに削り落している。そこに丸瓦をかぶせ、凹凸両面に少量の接合粘土を付加する。丸瓦を立てたとき、支持ナデつけをおこなっ

て固定するものもある。凹面側からの接合粘土の量が少なくなるのは、支持ナデつけをおこなうことによって、ある程度、丸瓦が固定できるからであろう。丸瓦凹面側のカット面の長さは2.3～3.6cm、丸瓦の厚さは1.7～2.8cmの範囲におさまる (Fig. 58)。丸瓦先端のキザミはカット面の長さには関係なく、丸瓦厚の薄いものに加えられる傾向にある。

丸瓦接合後の瓦当裏面調整は、不定方向のナデ調整 (PL. 34-1) が大半であるが、なかには、丸瓦接合前におこった回転ナデの痕跡をとどめるものもある。後者は瓦当裏面中央が盛り上がる。瓦当裏面下半の周縁は、あまり角張らず、丸くおさめるものが多い。

瓦当厚はⅠA・ⅠBともに3cm前後が一般的で、2cm前後の薄手品はⅠBで4点確認できる。また、1点ではあるが、ⅠAにも瓦当厚の薄いものがある。

胎土は緻密で、長石、石英、クサリ礫の砂粒が含まれる。硬質焼成で暗灰色や灰色に仕上がるもの、やや軟質焼成で橙褐色や黄灰色に仕上がるものなどがある。

軒丸瓦Ⅱ型式 (Fig. 59-11, PL. 37-10・11) Ⅱ型式は、藤原宮所用の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、6274型式Ac種である。6274型式はA・Bの2種があり、A種は瓦範の彫り直しによって、Aa・Ab・Acの3段階に分かれる。Ac種は、中心蓮子と一重目の蓮子5個を星形につなぐ。日高山瓦窯 (檜原市上飛騨町) の製品である。弁端から外縁にかけての破片が1点出土した。

藤原宮所用
6274Ac

粘土紐巻きつけ技法による丸瓦の筒部凹面先端を浅くヘラケズリし、外区内縁に対応する位置に接合する。凹面の接合粘土の量は少なく、強くユビオサエして固定する。凸面側は、接合粘土を付加したのち、丁寧なタテヘラケズリをおこなう。凸面調整後、凹面の調整時あるいは乾燥時についたと思われる圧痕が、凸面瓦当面寄りに残る (PL. 37-11)。この圧痕は、藤原宮出土の6274Acにも共通する。灰褐色の硬質の焼成で、胎土に含まれる砂粒は少ない。20mあまり隔てた第111次調査北区と桜井市第6次調査第2トレンチから破片各1点出土し、両者が接合した。

軒丸瓦Ⅲ型式 (Fig. 59-12～14, PL. 37-12～14) 平安時代の素文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。4点出土した。蓮弁は、細い輪郭線の中に、先の丸い棒状の子葉を2本おく。弁央にも細い凸線が入る。隣り合う蓮弁の弁端をつなぐ弧線があり、これが間弁なのであろう。低く直立した中房に蓮子を配するけれども、蓮子の数や配置は明らかでない。外縁は低く直立する。内区に接して珠文帯がめぐる。

平安時代

14 (PL. 37-14) は瓦当面を欠損するが、瓦当裏面は良好に残存している。裏面の中央がくぼんでおり、そこに布の圧痕 (密度5本/cm) が残る。布を絞ったような痕跡は認められない。裏面下半の周縁はヘラケズリをおこなう。12と14には、いずれも瓦当裏面に明確な丸瓦接合痕跡が認められない。一本造り技法によって製作されたものである。砂粒の少ない胎土で、橙褐色をしている。12のみ第89次調査の塔基壇西側から出土、ほかは第105次調査中央区出土。

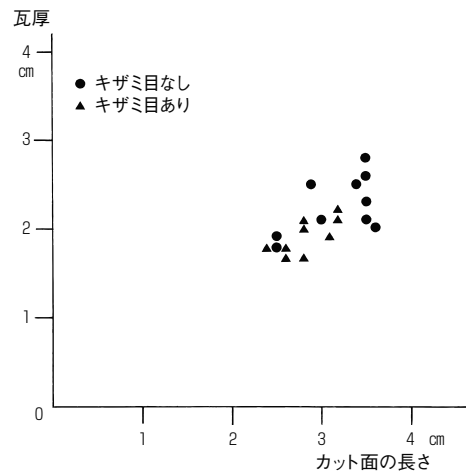


Fig. 58 瓦厚とカット面長の相関

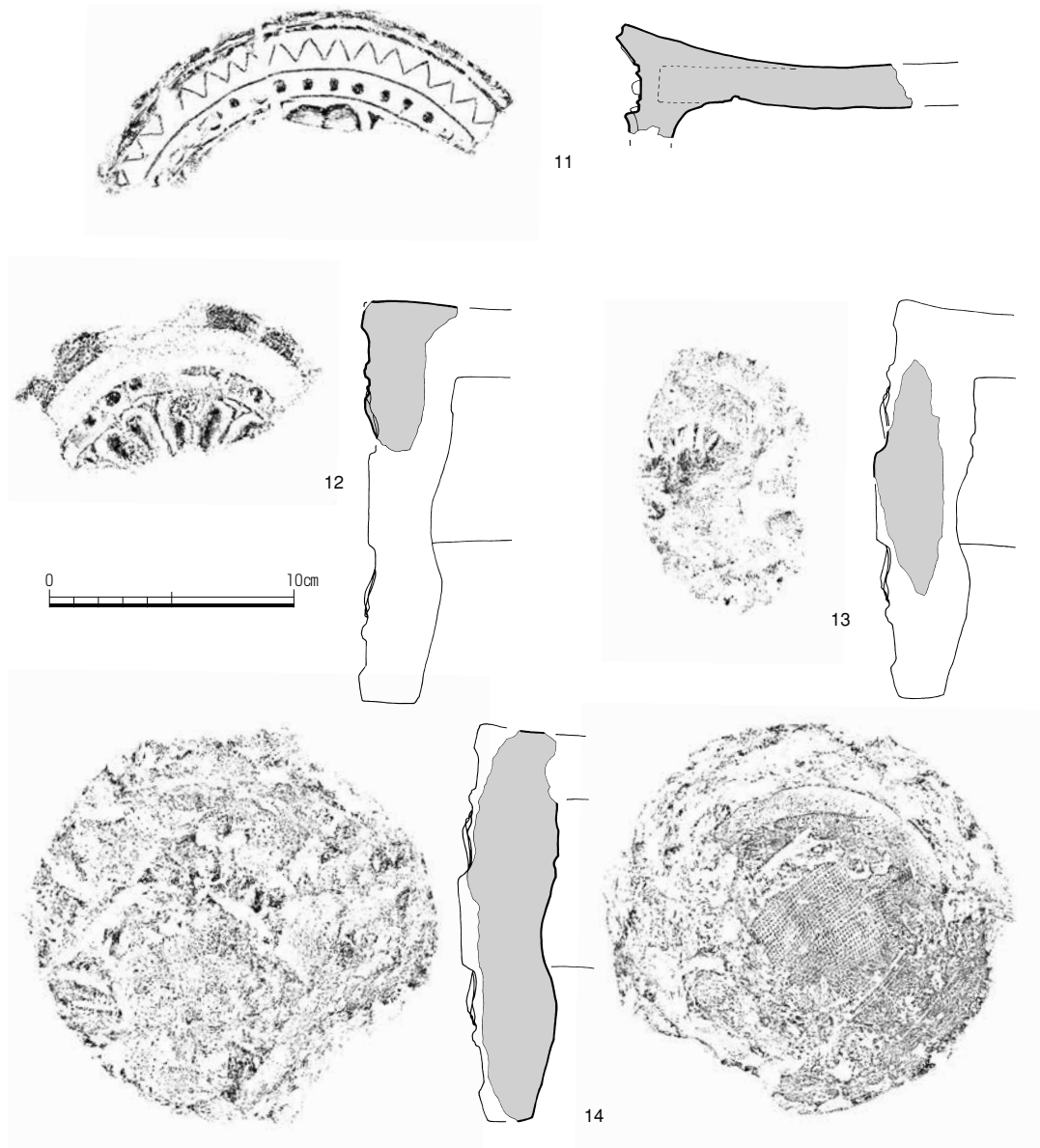


Fig. 59 軒丸瓦Ⅱ型式とⅢ型式 1:3

ii 軒平瓦 (Fig. 60~62, PL. 33・38・39)

吉備池廃寺から出土した軒平瓦には、創建の型押し忍冬唐草文軒平瓦（Ⅰ型式）と、平安時代の花菱風宝相華文軒平瓦（Ⅲ型式）があり、ほかに奈良時代と推定できる平瓦部片がある。

軒平瓦Ⅰ型式 軒平瓦Ⅰ型式は、型押しの忍冬唐草文軒平瓦である。文様1単位を彫り込んだ型（押し型）には、忍冬唐草文の単位文様が彫ってある。文様は、時計回りに一周する蔓から5葉の全パルメットが派生し、蔓の左右2カ所に2個一対の結節を表現したものである。この押し型は、斑鳩寺所用の213型式B種⁷⁾と同じ型で、吉備池廃寺出土例はそれよりも傷が進行している。また、斑鳩寺ではこの押し型を上下反転させながら施文するが、吉備池廃寺は忍冬唐草文をすべて下向きに施文する。

斑鳩寺と
同じ押し型

吉備池廃寺には、忍冬唐草文だけを施文するⅠA（これまでⅠb₁としたもの）と、重弧文施文後に押圧するⅠB（これまでⅠb₂としたもの）がある。発掘調査では、軒平瓦ⅠAが12点、軒平瓦ⅠBが1点、合計13点が出土した。

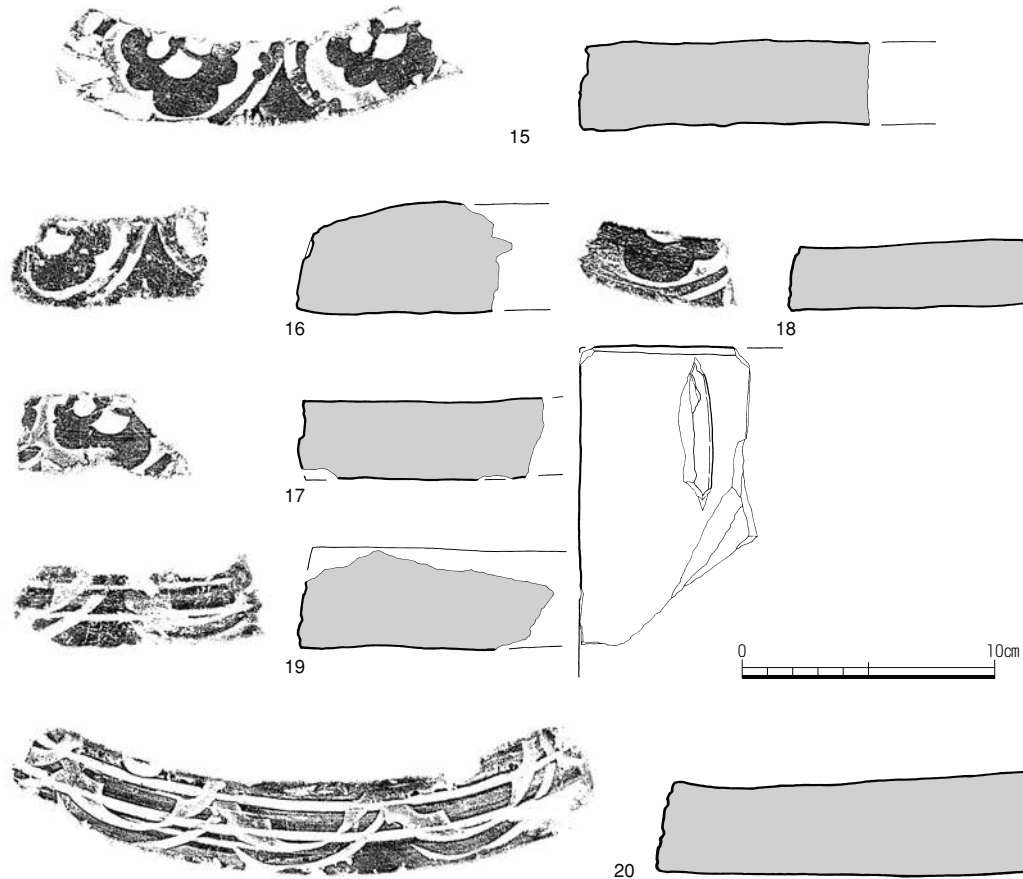


Fig. 60 軒平瓦 I 型式 1:3

軒平瓦 I A (Fig. 60, PL.33上・38) 15 (PL.38-5) は、2単位分の破片。創建平瓦（後述する平瓦1類）よりも分厚く作った瓦に、押し型を隣り合うように押捺して施文する。吉備池廃寺出土資料では、単位文様はほとんど常に、右側（以下、左右は、瓦当面を見た状態という）の単位文様が左側のそれを潰している⁸⁾。したがって、施文は、瓦当面を上にして逆時計回りに押捺を繰り返している、と判断してよい。凹面は、板状工具を用いた入念なタテナデで調整し、瓦当面寄りをさらにヨコナデする。ごくかすかに布圧痕が残っている。凸面もタテナデ調整が主体である。瓦当面に近い凸面には、部分的に無文叩きの圧痕をとどめる (PL.38-5)。これは、桶を上下反転させた後、押し型施文前に瓦当厚を調整するためにおこなった補足叩きである。暗灰色で硬質の焼成である。

逆時計回りに押捺

補足叩き

16 (PL.38-1) は、1単位強の破片。施文前に、板状工具を用いた回転ナデによって瓦当面を平滑にしている。このため、瓦当面には円弧に沿ったナデの痕跡が残る。押し型の施文は逆時計回りにおこなう。瓦当厚は3cmほどだが、平瓦部は4.3cmもあって分厚い。粘土板合わせ目S型がある。

17 (PL.38-2) は、凹凸面ともタテナデ調整し、さらに瓦当面近くの凹面にはヨコナデ調整を加える。瓦当厚は3.0cmとやや薄い。

18 (PL.38-3) は、左側面を残す破片である。側面の凸面側を幅1cmほど面取りする。瓦当厚は薄く、2.2~2.4cmしかない。単位文様の左側は表出が浅い。凸面には須恵器高杯の脚端部が溶着する (PL.38-12)。

須恵器溶着

軒平瓦 I B (Fig. 60, PL. 33下・38) 軒平瓦 I Bは、瓦当面に三重弧文を施文したのちに、忍冬唐草文を施文する型式。吉備池廃寺からは、1点が出土したにすぎない。

重弧文施文
後に型押し

その資料 (19, PL. 38-6) は、表面の摩滅が著しいものの、重弧文の凹線が押し型の押捺によって潰れているので、施文順序 (重弧文→型押し) が判明する。残存部分では、忍冬唐草文の単位文様同士は重複していない。推定瓦当厚 4 cm。

当て具を用
いた内叩き

吉備池廃寺出土資料に軒平瓦 I B の良好な資料がないので、木之本廃寺出土資料を参考に掲げる (20, PL. 38-7)。瓦当幅で 23cm を残し、単位文様 3 単位と少しが入る破片。右側面が残っていて、瓦の分割と側面調整によって単位文様が切れている。瓦当厚は 3.0~4.0cm。狭端に向かって厚さがほとんど変わらない直線顎である。凸面と凹面の調整は、軒平瓦 I A と同じ。さらに、凹面の瓦当面との縁に、当て具を用いた内叩きをおこなう。これは、押し型施文時に凹面縁にくぼみが生じたため、調整したものであろう。右側面は、凹面側縁寄りを軽く面取りする。粘土板合わせ目 S 型をとどめる。硬質の焼成で、灰色をしている。胎土には長石や石英、クサリ礫が含まれているが、雲母の微粒子も顕著である。

軒平瓦狭端部 創建の平瓦に比べて著しく分厚い平瓦狭端片を、軒平瓦狭端部とみなした。

21 (Fig. 61) は、厚さ 3 cm ある狭端右隅の破片。凹面は板状工具によるタテナデ調整のあと、狭端縁のみヨコナデし、その後、側縁を面取りする。凸面も、板状工具を用いた丁寧なナデ調整をおこなう。狭端は、凸面側に曲がるように変形する (PL. 38-14)。粘土円筒を反転した際に、自重によって潰れたものであろう。硬質の焼成で、暗灰色をしている。

22 (Fig. 61) は、厚さ 5.1cm あり、これまで確認されている軒平瓦の瓦当厚を越える厚さをもつ。凸面は摩滅しており不明だが、凹面は板状工具によるタテナデの後、狭端縁をヨコナデする。やや軟質の焼成で、灰白色をしている。

23 (Fig. 61) は、厚さ 3.5cm。調整は、凹凸両面とも板状工具によるタテナデ調整で、狭端縁のみヨコナデをくわえる。割れ面には、粘土板の合わせ目風の剥離面を確認できるが、ブロック状の粘土が各所で剥離したような感じで、粘土板合わせ目の方向は明確でない。硬質の焼成で、青灰色をしている。

24 (Fig. 61) は、狭端左隅の破片。厚さ 3.5cm。凹面側縁寄りをナデつけているが、面取りはおこなわない。調整は、凹凸両面とも板状工具によるタテナデ調整。狭端部は、凹凸両面の調整後に回転ナデをおこなっており、狭端面にごく浅い重弧文風の沈線をとどめる (PL. 38-13)。硬質の焼成で、青灰色をしている。

粘土板桶巻
き 作 り

軒平瓦 I 型式の製作技法 平瓦部の成形は、いずれも粘土板桶巻き作りによる。粘土板合わせ目は S 型と Z 型の両者が確認できた (PL. 39-1・2)。胎土・焼成・色調などは、後述する平瓦 1 類と酷似するが、粘土板の厚いものを巻きつけている点で、軒平瓦と平瓦を区別できる。厚さは 3.0~4.5cm くらいが普通であるが、なかには狭端部で 5 cm を越える例もあった。

吉備池廃寺の瓦は、ほかの寺にくらべて寸法が桁外れに大きい。軒平瓦の場合も、粘土板があまりにも厚かったせいか、巻きつける前に粘土板に亀裂が入ってしまった例が多くみられる (PL. 39-2)。うまく桶に巻きつけるのには、かなり苦労したようである。

凹面と凸面の調整手法は、板状工具を用いたタテナデによって全体を調整し、狭端部はさらにヨコナデをおこなう。凸面は、板ナデによって移動した砂粒の痕跡をとどめるものと、それ

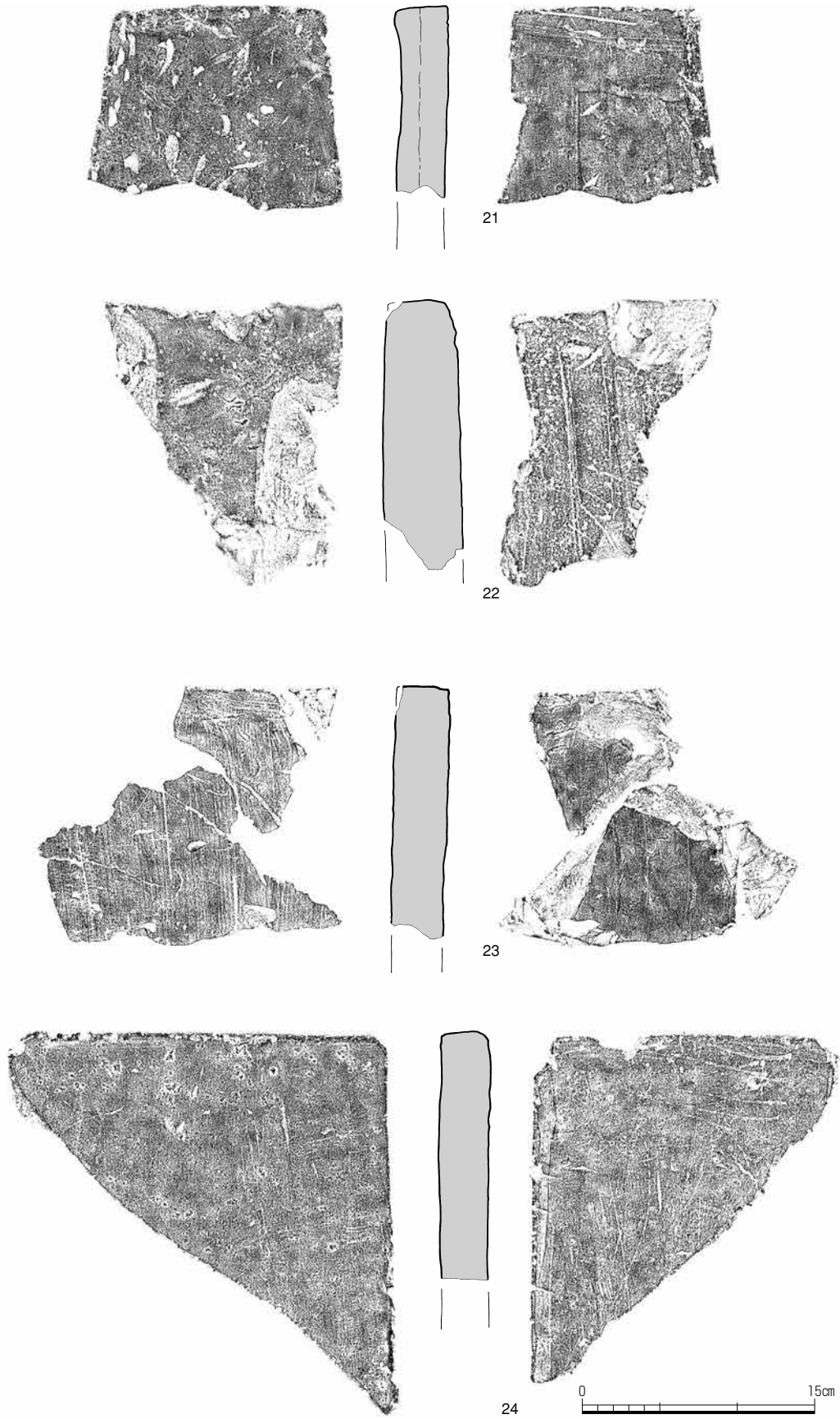


Fig. 61 軒平瓦 I 型式の狭端部 1:4

主要な調整
は 施 文 前

を入念なナデ調整によって消去してしまうものがある。叩き目はほとんど確認できない。凹面にも布や側板の圧痕はほとんど残らない。施文手法から判断しても、これら主だった調整は瓦当文様施文以前、桶からはずした粘土円筒の状態でおこなわれた、と理解できる。

軒平瓦 I 型式の施文手法 軒平瓦 I A・I Bとも、忍冬唐草文は押し型を使って施文する。この押し型は半円に近い平面形で、長辺が約 9 cm、短辺が約 6 cm。両端を切り欠いている。型の大きさに対し、軒平瓦の瓦当面厚は2.2~4.0cmと小さいため、実際に表出される文様は、最大でも上下が型の 2/3 しかない。

瓦当の左右どちらかの端が残る資料をみると、いずれも端の単位文様は部分的にしか瓦当面にあらわれない。しかも、凹面側には、凹面調整後に施文したことを示す粘土のふくらみが認められる場合がある (PL. 38-8・9) のに、側面側にはそうしたふくらみはない。端の単位文様は、例外なく側面調整によって切り取られたように見える。また、軒平瓦 I Bの重弧文も、木之本廃寺出土資料でみるかぎり、側面調整に先立って施文されている。さらに、山田寺の分割後施文の重弧文軒平瓦 (山田寺四重弧文軒平瓦 C II) のように、重弧文が左右両端で垂れ下がることもない。これらのことから、軒平瓦 I 型式は粘土円筒の状態で施文された、と考えられてきたのだが、さらにその点を補強する材料を確認したので、述べておこう。

施文の始点
と 終 点

まずはじめに、重弧文の施文状況を木之本廃寺出土資料 (Fig. 60-20, PL. 38-11) で再度詳しく観察すると、残存する瓦当面の中央あたりから左方向に、重弧文の凹線とは別に、幅 1 mmほどの平行した 2 本の沈線が残っている。沈線間の距離は1.3cm。一方、重弧文の凹線は幅が 2 ~ 3 mmあり、それぞれの沈線から少し上にずれて、沈線を消すように重複する。凹線間の距離は沈線間と同じく1.3cmで、両者は一連のものと判断してよい。つまり、前者は重弧文を施文した際の挽き型の始点、後者は始点から時計回りに一周したものと考えることができる。本来、後者は始点とずれることなくつながるはずであったが、桶巻き段階での瓦当厚のばらつきが影響したのか、挽き型が円周の軌道から若干ずれてしまったため、始点を越えて施文をおこない、軌跡を修正して収束させた結果があらわれているのだろう。

同様の痕跡は、忍冬唐草文でも確認できる。これも木之本廃寺出土例だが、左側縁をとどめる資料の中に、その部分で押し型の重複箇所が左右両側に認められる例がある (PL. 38-10)。これまでの観察成果から、押し型は逆時計回りに押捺していったことがわかっている。とすれば、両端にその重複が認められるのは、この単位文様が押し型施文の始点であって、そこから逆時計回りに施文して一周し、最後の型押しが始点の左端と重複した、と考えるのがもっとも理解しやすい。ちなみに、逆時計回りに押捺すると、右側に重心が偏りがちになり、一見、文様の重複が逆転して見えることもあるが、始点となる唐草の右側 2 葉に次の押し型の型端が、また右側の結節に次の押し型の左 1 葉がそれぞれ重複する。桶を一周回った最後の押捺は、始点となる唐草の左側の結節から上方にのびて反転する蔓草の付け根に重複している。

分割前施文

以上、重弧文の施文、押し型の押捺のいずれも、円周に沿ってめぐるかたちでおこなわれた痕跡を見出すことができ、両者とも分割前の施文であることが確定した。

なお、後述する平瓦 1 類の広端幅が約36cmと推定され、軒平瓦もほぼ同じ瓦当幅とみてよいので、瓦当面には 5 ~ 6 個の押し型が施文されていたと考えられる。また、瓦当面の全面に、重弧文施文時についた回転調整の痕跡が認められるため、櫛歯状の突出をもった板状の工具を

重弧文の施文具として用いたものと想定される。ただし、瓦当面に接する凹面および凸面には、施文具が被っていたことをうかがわせる痕跡は認められないので、瓦当厚を規定しながら施文するようなものではなかったらしい。

軒平瓦Ⅰ型式は、粘土円筒の状態で凹凸面と狭端部を調整したのち、粘土円筒を反転させて瓦当面を調整し、施文する。瓦当面と凹面のなす角度が鈍角になり、軒平瓦狭端部が凸面側に潰れる例があった。これらは、截頭円錐形に成形した粘土円筒を上下反転してから施文したことを示すものである。また、忍冬唐草文は逆時計回りに施文され、重弧文は時計回りに施文された。両者の方向が逆転するのは、一見矛盾するようだが、一般的に、右ききの人間が瓦当面を上に向け、かつ凸面を手前にして挽き型で重弧文を施文しようとした場合、時計回りに挽き型を動かしたほうが力が加わりやすい。一方、押し型を施文するさいには、逆時計回りに施文していくと、自分の手が次の押捺箇所をさえぎることがない。したがって、上に記した施文方法が最も理にかなっていたと推測する。

施文方向と
その理由

軒平瓦Ⅲ型式 (Fig. 62-25, PL. 39-3・4) 花菱風宝相華文軒平瓦。左右の端の破片が1点ずつ出土した。これを反転復元すると、1/2の単位文様3個の両端に1/4の単位文様が加わる構成になる。凹面には粗い布圧痕(5本/cm)が残り、模骨痕はない。凸面はヘラケズリ調整で、瓦当沿いはヨコ方向、それ以外はタテ方向に調整する。顎面に粘土を貼り足した曲線顎である。軒丸瓦Ⅲ型式と胎土・焼成・色調が共通し、これと組み合う。

その他の軒平瓦 瓦当部分は残っていないが、軒平瓦の平瓦部とわかる破片が1点ある (Fig. 62-26, PL. 39-5)。凸面にヨコ縄叩き目をとどめる。縄叩きは側面調整後におこなわれ、狭端縁から広端縁に向かって叩く。叩き目は若干左上がりとなる。凹面には布目痕をとどめるが、模骨痕はないので、奈良時代の一枚作り軒平瓦であろう。厚さ2.4cm。

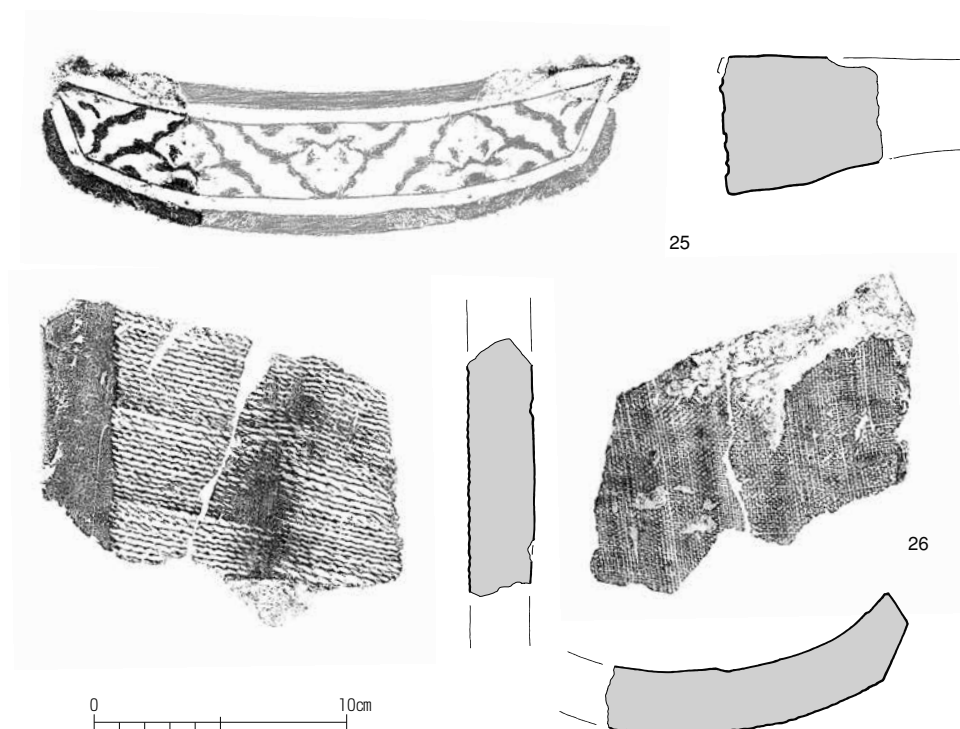


Fig. 62 軒平瓦Ⅲ型式と軒平瓦の平瓦部 1:3

iii 隅軒平瓦

軒平瓦ⅠAには、左側面を鋭角に削り落とした隅軒平瓦が1点ある (Fig. 63, PL. 38-4)。瓦当面と側面とがなす角度は、約50°に復元できる。瓦当厚は、残存部で3.5~3.8cmあって、隅に向かって若干薄くなる。

瓦当面から約5cm、側面から約4cmのところに、直径1.5cmの円孔をあける。この孔は、焼成前に凹面から凸面に向けて穿孔されるが、鉛直方向ではなく、

円 孔

凸面側でやや瓦当面に向かう。第105次調査西区の自然流路SD293から出土した。

軒平瓦は通例、10cm以上は茅負から先へ出ている。隅軒平瓦となるとさらに先へ出ていることが予想されるので、この孔が野地板に固定するための釘穴だとは考えにくい。対になるもう一つの隅軒平瓦と固定するためか、あるいは何か吊り下げるためのものだろうか。

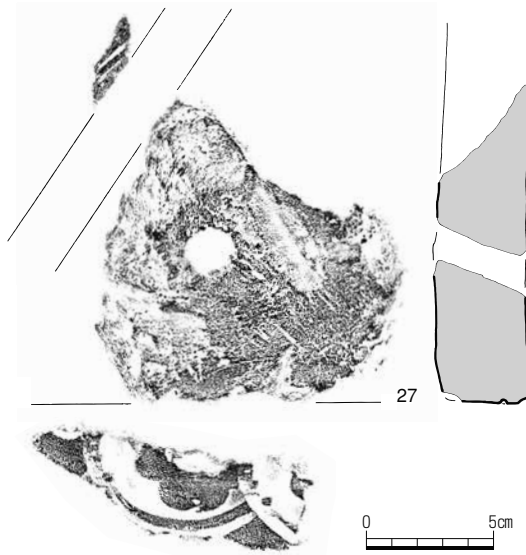


Fig. 63 隅軒平瓦 1:3

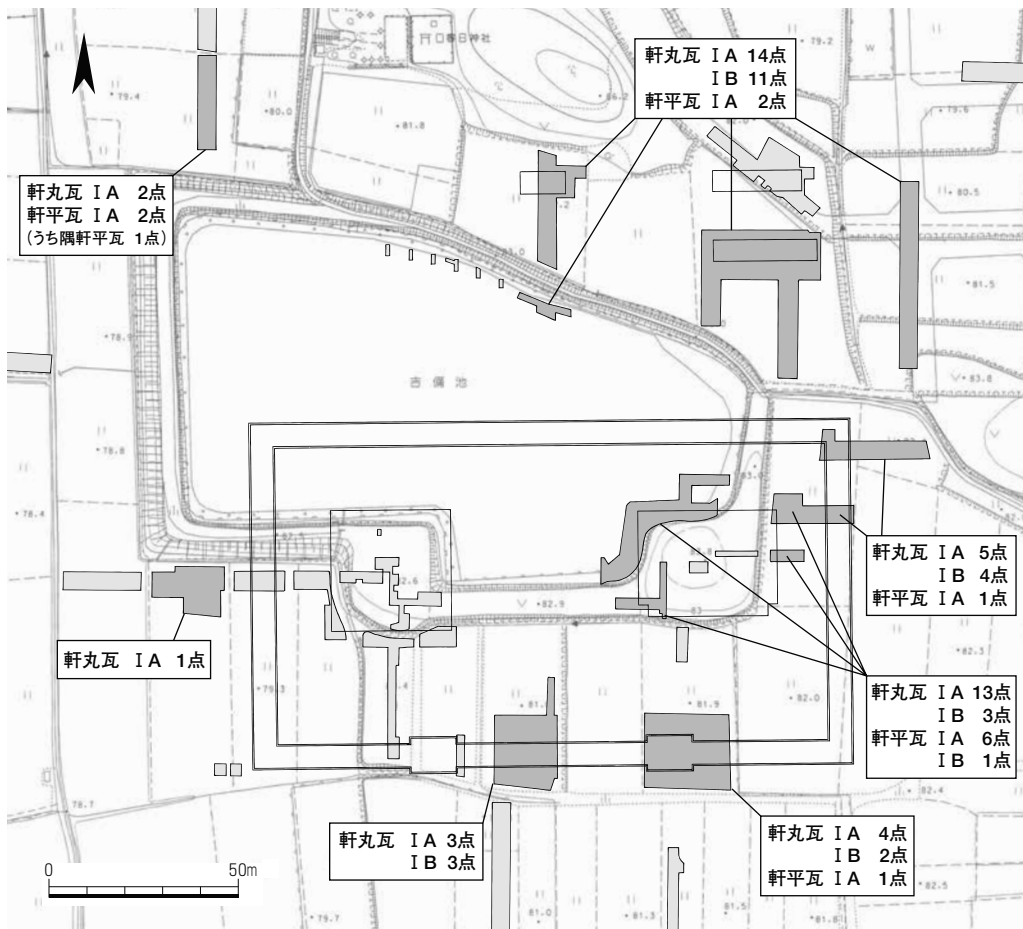


Fig. 64 創建軒瓦の型式別分布 1:2000

iv 小 結

以上、吉備池廃寺から出土した軒瓦を、Ⅰ型式：創建期、Ⅱ型式：藤原宮期から奈良時代、Ⅲ型式：平安時代、に分類して説明した。吉備池廃寺は、軒丸瓦・軒平瓦ともⅠ型式A・Bで軒先を飾っていたが、そのなかに瓦範の範傷が進行したものや、製作技法に大きな隔たりのある資料は確認できなかった。Ⅱ型式は、所用先は全く不明だが、出土量や分布からみて、葺き替え用の軒瓦ではない。Ⅲ型式は、大半が伽藍北方の第105次調査中央区から集中して出土した。後述する鬼瓦の存在からも、時を隔てて建立された別の堂宇に使用されたのであろう。

以前、佐川正敏は、塔の調査（第89次調査）を終えた段階で、軒丸瓦ⅠA・ⅠBと軒平瓦ⅠA・ⅠBの瓦当文様にみられるわずかな違いを型式学的変化とみなし、古代寺院における金堂→塔という一般的な造営順序と対応させて、金堂には軒丸瓦ⅠBと軒平瓦ⅠA、塔には軒丸瓦ⅠAと軒平瓦ⅠBが葺かれたとの仮説を提示した。¹⁰⁾ 堂塔の造営と瓦生産が、計画的な関連性を備えていることを念頭においた想定である。これらの組合せについて再検討しておく。

軒瓦の分布状況 堂塔ごとに軒瓦出土点数を比較すると、次のようになる（Fig. 64）。

金堂周辺は、軒丸瓦ⅠA 13点・ⅠB 3点、軒平瓦ⅠA 6点・ⅠB 1点。塔周辺なし。中門周辺は、軒丸瓦ⅠA 4点・ⅠB 2点、軒平瓦ⅠA 1点。南面回廊周辺は、軒丸瓦ⅠA 3点・ⅠB 3点。西面回廊周辺は軒丸瓦ⅠA 1点。東面回廊周辺は、軒丸瓦ⅠA 5点・ⅠB 4点、軒平瓦ⅠA 1点。僧房周辺（桜井市第6次調査を含む）は、軒丸瓦ⅠA 14点・ⅠB 11点、軒平瓦ⅠA 2点。第105次調査西区は、軒丸瓦ⅠA 2点、軒平瓦ⅠA 2点（うち1点は隅軒平瓦）。

以上、軒瓦の出土量自体が少ないこともあり、堂塔ごとの所用軒瓦の型式を確定するのは難しい。また、廃絶後の瓦の二次的な移動による影響も否定できないだろう。ただし、瓦葺ではない僧房付近からも、後述する丸瓦や平瓦とともに、軒瓦が一定量出土しているという事実は、その近傍に瓦葺建物が存在したことを示唆するものと考えてよい。

僧房付近に
瓦葺建物

軒瓦の組合せ 軒丸瓦ⅠAとⅠBについては、佐川が指摘した瓦当文様の違い以外の部分、つまり瓦工人の技術が直接表現される製作技法の面でも、型式間の違いは認められなかった。

そこで、吉備池廃寺全体での出土量を比較して軒瓦の組合せを考えると、軒丸瓦ⅠAには軒平瓦ⅠA、軒丸瓦ⅠBには軒平瓦ⅠBが組むこととなる。一方、木之本廃寺での出土点数は、軒丸瓦ⅠA 11点・ⅠB 14点、軒平瓦ⅠA 25点・ⅠB 4点となり、組合せは逆転してしまう。¹¹⁾ 遺跡の性格の違いもあり、出土状況が異なるのは当然なのだろうか。それにしても、二つの寺跡とも、軒平瓦ⅠBの出土量はきわめて少ない。よって、発掘調査の成果をもとに軒瓦の組合せや所用堂塔を考定することは、現段階においても困難である。

重弧文軒平瓦の発生 軒平瓦ⅠBに施文される重弧文は、山田寺の四重弧文軒平瓦や四天王寺（大阪市）の三重弧文軒平瓦の創作に多大なる影響を与えたとみて間違いない。重弧文や軒丸瓦外縁の重圏文は、仏像光背などにみられる重圏文などの意匠をもとに発生したとの見方が有力である。¹²⁾ 吉備池廃寺における重弧文の発生も同様に理解するのが自然だろう。

他方、軒平瓦ⅠBほど明確な文様とはなっていないが、軒平瓦ⅠAの瓦当面や軒平瓦の狭端面には、回転調整をおこなった際にできた重弧文状の沈線を、今回、いくつか確認することができた。重弧文が瓦の文様として発生・定着する前提として、重弧文施文具が調整具から変化していった可能性も一つの考え方として述べておきたい。¹³⁾

調整具から
施文具へ

B 道具瓦など

道具瓦には、面戸瓦、熨斗瓦、鬼瓦がある。ヘラ描き瓦や磚などもここでとりあげる。

i 道具瓦 (Fig. 65・66, PL. 39)

面戸瓦 28 (Fig. 65, PL. 39-6) は、成形した丸瓦の玉縁隅をヘラケズリして、角を丸く落とした瓦。1点のみの出土で全体を把握しきれないが、平面逆台形の切り面戸瓦に復元可能である。玉縁の端面が残るので、両側に袖が伸びない形式である。凸面には面戸瓦の平面形を下書きしたような痕跡は確認できない。玉縁段部の状況からみて、創建期の丸瓦1類Aを加工している。硬質の焼成で暗灰色である。第111次調査北区出土。

ただし、丸瓦1類Aと平瓦1類（ともに吉備池廃寺創建瓦）にこの面戸瓦を組み合わせると、この復元では、側面のカーブがうまく合わない。隅棟に用いた登り面戸瓦、あるいは隅棟の出隅側に葺くために使用された丸瓦の可能性も提示しておく。

割り面戸瓦 なお、木之本廃寺からは、丸瓦1類と同じ丸瓦を素材とした割り面戸瓦が出土している。上辺幅38.5cm、下辺幅15.0cmあり、これを丸瓦1類Aと平瓦1類に組み合わせたところ、ぴったりと納まった (PL. 39-10)。ちなみに、山田寺回廊で使用された割り面戸瓦は、上辺幅24.5cm、下辺幅11.0cm (PL. 39-11) なので、木之本廃寺出土資料はその1.5倍の規格である。

切り熨斗瓦 **熨斗瓦** 創建期の平瓦1類を素材とした切り熨斗瓦が2点出土した。

36 (Fig. 66) は、残存部の幅16cm前後であるが、一方が幅狭くなっている。凹面は板状工具を用いたタテナデ、凸面は丁寧なナデ調整をおこなう。狭い方を上にして凸面側からみたとき、左側面はヘラケズリし、右側面には分割截面が残る。右側縁寄りの凸面の風化が著しい。粘土板合わせ目Z型を残す。硬質の焼成で灰褐色をしている。厚さは1.8cm。第111次調査南区の土坑SK326出土。

37 (Fig. 66) は、残存部最大幅21.0cm、厚さは2.2cmある。平瓦広端が残っている。ここでの幅は18.0cm。広端を下にして凸面側からみたとき、左側が本来の平瓦側縁である。左側面には平瓦分割時の側面調整をそのまま残し、そこに接した凹面には紐による分割界線も残る。一方、右側の側縁は、熨斗瓦用に分割したさい、広端縁寄りを大きく削って平面形を調節している。凹面は板状工具を用いたタテナデをおこない、広端縁を3～4cm幅で面取りする。凸面も板状工具を用いた丁寧なタテナデを主体とし、部分的に無文叩き板による補足叩きの圧痕をとどめる。硬質の焼成で灰褐色をしている。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

鬼瓦 29 (Fig. 65) は、鬼面文鬼瓦の左眼の部分。全体には楕円形の平面形であるが、瞳は正円に近く、内側下方に寄る。全体に風化しているものの、風化の度合いが少ない下瞼の輪郭線から瞳にかけての部分には、粘土を削りだしたような痕跡が認められないので、范型を用いて製作した鬼瓦と考える。

30 (Fig. 65, PL. 39-7) は、平面アーチ形をした鬼瓦頂部裏面の破片。粘土板の合わせ目で剥離しており、文様はまったく残らない。裏面はヨコヘラケズリ調整。裏面と側面の角度は鈍角をなす。

鬼瓦片2点は、第105次調査中央区から出土した。両者は、平安時代のⅢ型式軒瓦と胎土・焼成・色調が共通し、これらと組み合わせる。

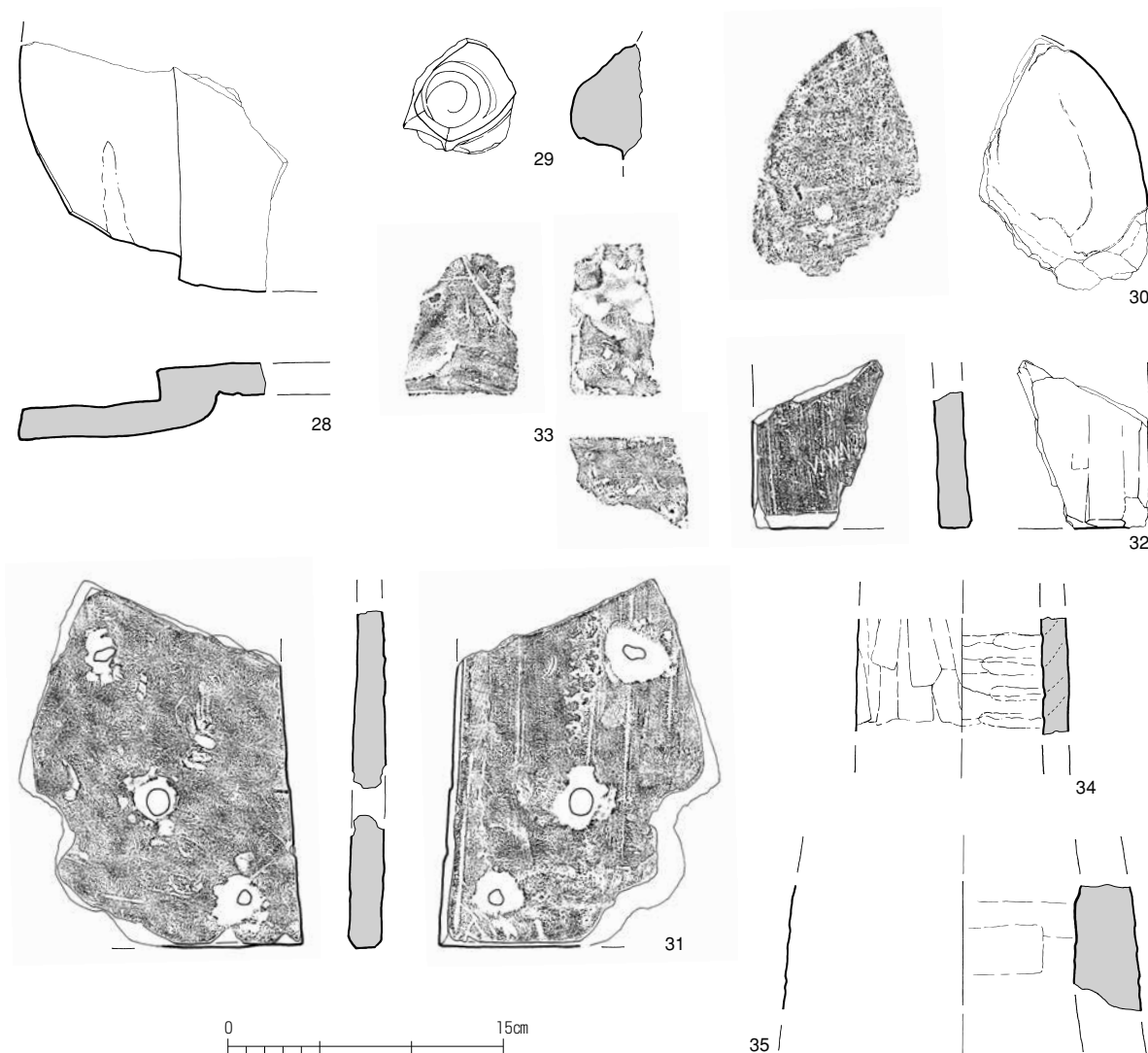


Fig. 65 面戸瓦・鬼瓦・磚・土管など 1:4

ii その他の瓦磚 (Fig. 65, PL. 39)

ヘラ描き瓦 32は、凸面広端隅に波状のヘラ描きをした平瓦片である。凸面を調整したのち、先の細いもので描いているが、装飾を意図したのではなく、戯画的なものであろう。硬質の焼成で、青灰色をしている。厚さは1.7cm。平瓦は、創建期の平瓦1類である。第105次調査中央区出土。

用途不明平瓦 31 (PL.39-8) は、創建期の平瓦1類に、焼成後に穿孔したものである。広端隅の残存部の3カ所に穿孔がある。孔は対角線上にはほぼ等間隔で並ぶが、一直線にはなっていない。凹凸両面から、鑿状の工具で突くようにして孔をあけている。第105次調査東区の東面回廊西雨落溝の石組抜取溝SD305から出土した。

平瓦1類には、ほかに、同様の穿孔をおこなおうとしたが、途中でやめた例がある (Fig. 79-17, PL.43-7)。ともに用途は不明。

土 管 34は、円筒形の土管である。幅2.5cm前後の粘土紐を積み上げて成形し、内面はヨコナデ、外面は丁寧にタテヘラケズリする。内面には、粘土紐の継ぎ目が残っている。厚さ1.2cm。胎土には長石や石英の細砂粒を多く含む。硬質の焼成で、青灰色をしている。外径11.5cmに復

穿 孔

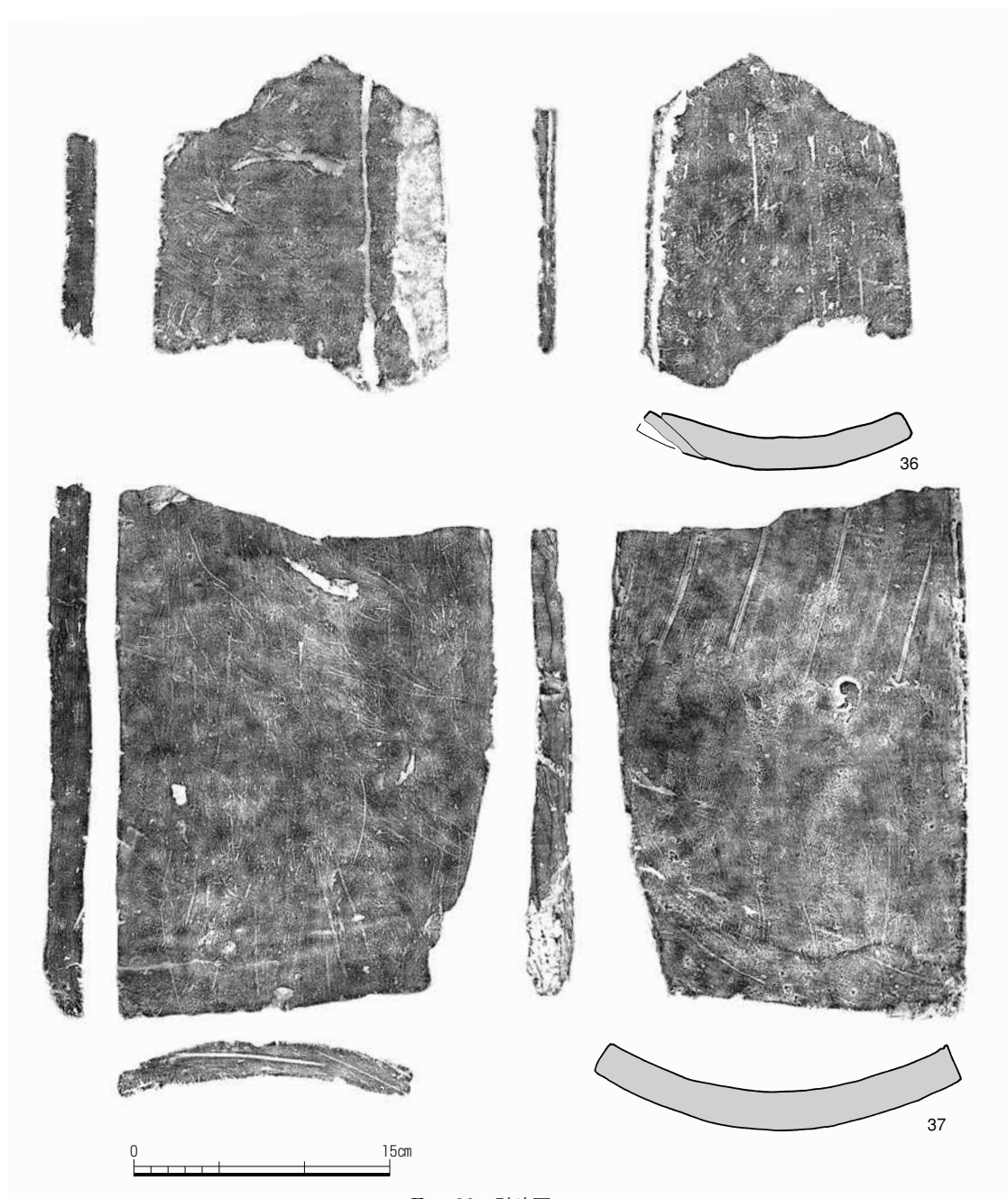


Fig. 66 熨斗瓦 1:4

元できる。第105次調査中央区出土。

35は、厚さ3.0～3.6cm。外面・内面ともにヨコヘラケズリする。胎土には長石や石英の砂粒を多く含み、大粒のものが目立つ。硬質の焼成で青灰色をしている。残存部の外径は、最大で19.6cmに復元できる。狭端側に鋸状の凸帯が付く土管になるかどうかはわからない。第81-14次調査区の金堂基壇西側から出土した。

磚 33 (PL.39-9) は、4面をとどめるが、全体を復元するには至らない。表面はヘラケズリをおこなうが、粘土の充填が少なかった部分にはユビオサエ痕が残る。硬質の焼成で灰褐色をしている。厚さは8.5cmである。第111次調査北区出土。また、第81-14次調査区からも、磚の小破片が1点出土した。

C 丸 瓦

吉備池廃寺からは、破片数総計3,310点、総重量576.1kgの丸瓦が出土した。これまで、各調査次数の概要報告の中では、出土丸瓦はすべて玉縁丸瓦に限られること（後述するように、行基丸瓦とおぼしき破片はごく微量ある）や、おおむね厚さ1.7cmを境として「厚手品」と「薄手品」とに分類できること、などを指摘した。本報告では、吉備池廃寺から出土した丸瓦を、1類から4類に分類し、さらに各々を成形技法や調整手法で細分した。

i 丸瓦1類 (Fig. 67~70, PL. 40・41)

『年報』や『紀要』で「厚手品」と呼んだ大型の粘土板巻きつけ作り玉縁丸瓦。凹面の玉縁段部の形状に2種があり、これを指標にA・B 2種に細分する。丸瓦1類Aは段部凹面が断面でほぼ直角に屈折し、丸瓦1類Bは段部凹面が緩やかに屈曲する。筒部の側面調整などは両者大差がないため、筒部だけの断片 (Fig. 70) ではA・Bを区別できない。

1類は大型

丸瓦1類A (Fig. 67・68, PL. 40・41) 凹面の段部がほぼ直角に屈折する大型の玉縁丸瓦。

完形品が1点ある (Fig. 67-1, PL. 40-1)。全長50.0cm、筒部長42.3cm、玉縁長7.7cm、筒部広端幅22.0cm、筒部段部幅19.5cm、玉縁端部幅14.2cm、筒部厚さ1.8~2.0cm、玉縁部厚さ1.5~1.8cm、重さ5.3kg。

凸面は玉縁部をヨコに、筒部をタテに、それぞれ丁寧にナデ調整し、叩き目を全く残さない。逆に、凹面は調整をおこなわないので、布圧痕や糸切り痕、分割界線 (PL. 41-3) が残る。分割凸帯は紐。玉縁部と筒部とでは分割界線が連続しないので、両者別々に紐をかけるか、段部で紐が模骨の中をくぐっているものとする。凹面の段部には、凸型台の当たった痕跡がある (PL. 41-3)。

分割凸帯は紐

側面は、分割破面と分割断面をともにヘラケズリ調整する¹⁴⁾c手法。筒部のヘラケズリは広端に向かい、玉縁部のそれは狭端に向かう。筒部はさらに、凹面側に狭い面取りのヘラケズリを加える。玉縁部端面と筒部広端面も、ともに凹面側のみ面取りする。胎土に石英・長石・クサリ礫を含む。硬い焼きで暗青灰色をする。第111次調査北区出土。

2 (Fig. 67, PL. 40-2) は、玉縁部が完存する。凹面の段部から玉縁部先端までが15cmあって、1より長い。凸面は筒部がタテナデ調整、玉縁部はヨコナデ調整する。側面は、c手法のヘラケズリ調整。凹面段部の布圧痕は、凸型台にあたって一部消える。段部のやや広端寄りの凸面を中心として、調整後に補足の叩きをおこなっているため、その時に潰れたのだろう。砂粒の多い胎土で硬質の焼き。玉縁長8.7cm、玉縁幅15.2cm、筒部幅19.0cm。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

3 (Fig. 67, PL. 40-5) は、玉縁段部に貼り足した粘土が剥離している。凹面には、布袋の綴じ合わせ目S型の圧痕が残る¹⁵⁾。摩滅しているため、判然としない部分もあるが、綴じ合わせ目はほつれ気味になっており、この綴じ合わせ目の圧痕に接して、玉縁段部からはじまると思われる襷縫い (ダーツ) の圧痕も認められる。こちらは、重ね代の基部を、左上がりのまつり縫いで留め付けている。玉縁の先端では、さらに襷を折り重ねており、この部分だけは左右 (円周方向) にまつり縫いする。縫い目は2段がみえる (PL. 41-6)。玉縁長8.4cm。第111次調査北区出土。

布袋の詳細

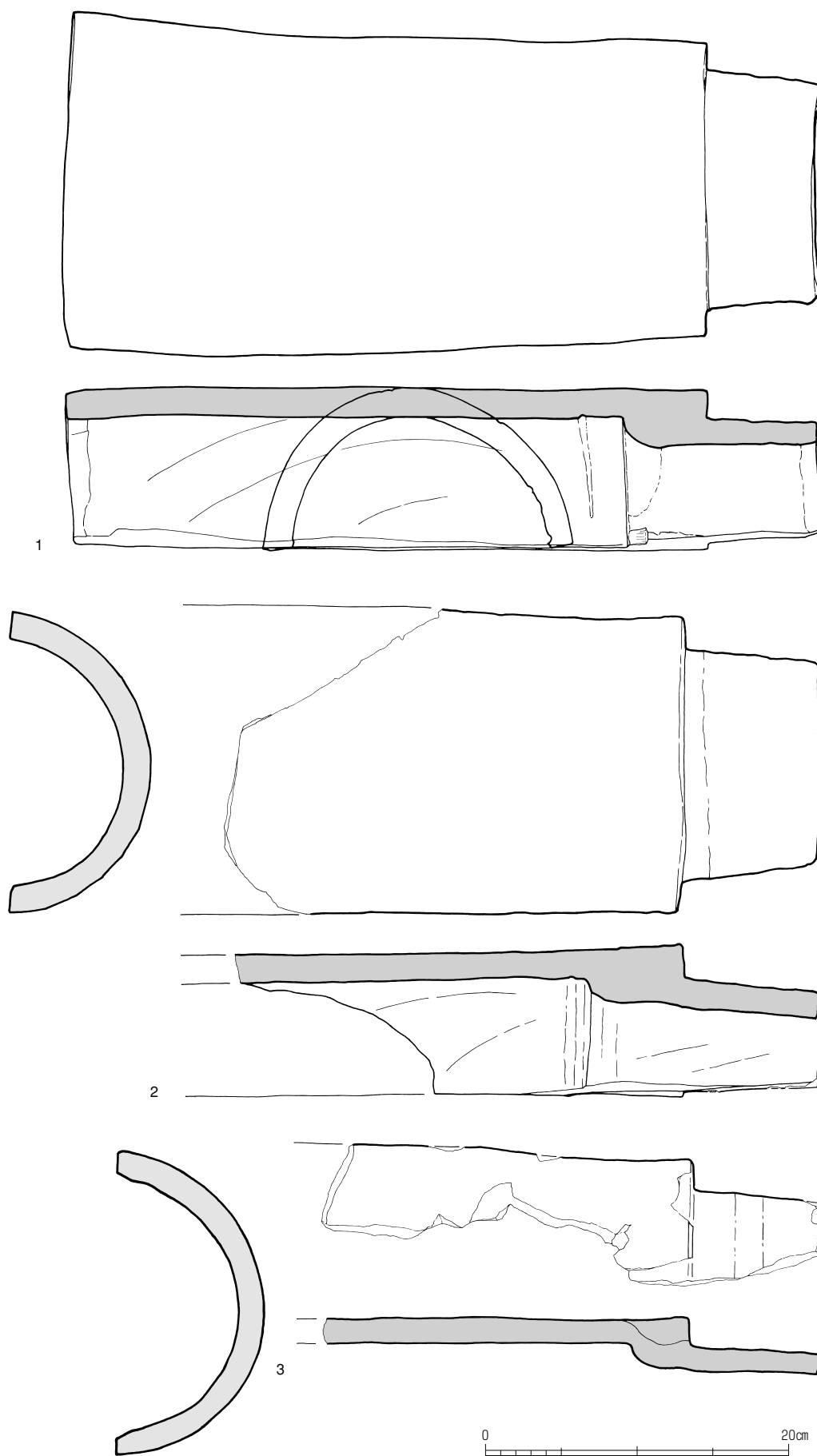


Fig. 67 丸瓦実測図 (1) 1:4

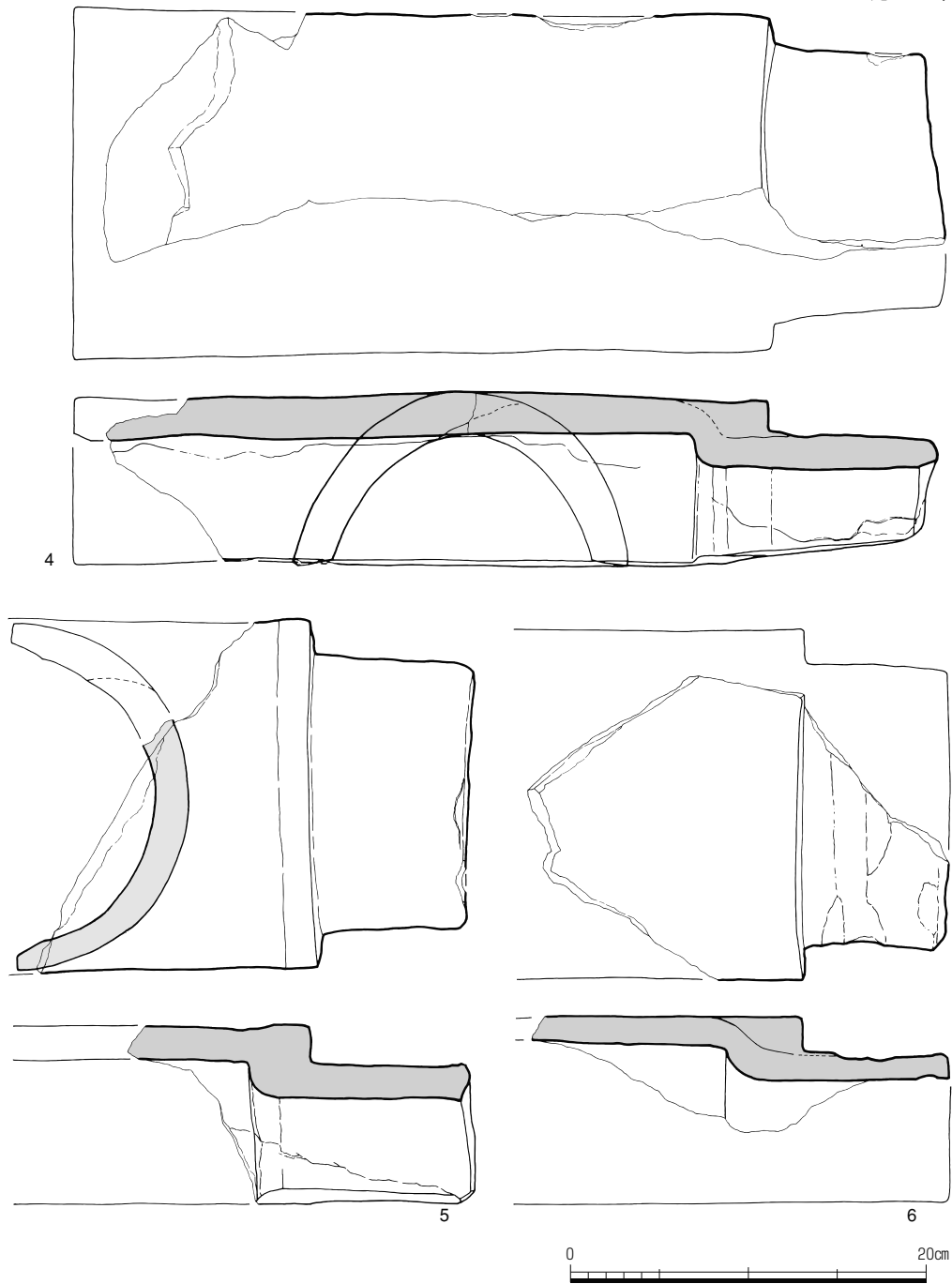


Fig. 68 丸瓦実測図(2) 1:4

4 (Fig. 68) は、全体のおよそ 1/2 を残す資料。凸面は摩滅して調整手法等は不明。凹面には、筒部から玉縁部に続く粘土板合わせ目 S 型がある (PL. 41-5)。第111次調査北区の僧房北雨落溝 SD341 出土。

5 (Fig. 68, PL. 40-3) も、玉縁部内面に粘土板合わせ目 S 型が残る。第111次調査北区の僧房北雨落溝 SD341 出土。4・5 とも玉縁長は 8.4cm あり、凹面縁の面取りが幅広い。これらを含めて、丸瓦 1 類 A 玉縁部の資料 35 点中、粘土板合わせ目を確認した 6 点すべてが S 型で、Z 型はない。

6 (Fig. 68, PL. 40-4) は、玉縁部内面に分割截線が残っている (PL. 41-4)。切り間違っただろう。玉縁長は 7.6cm。第111次調査北区の僧房南雨落溝 SD342 出土。

粘土板合わせ目 S 型

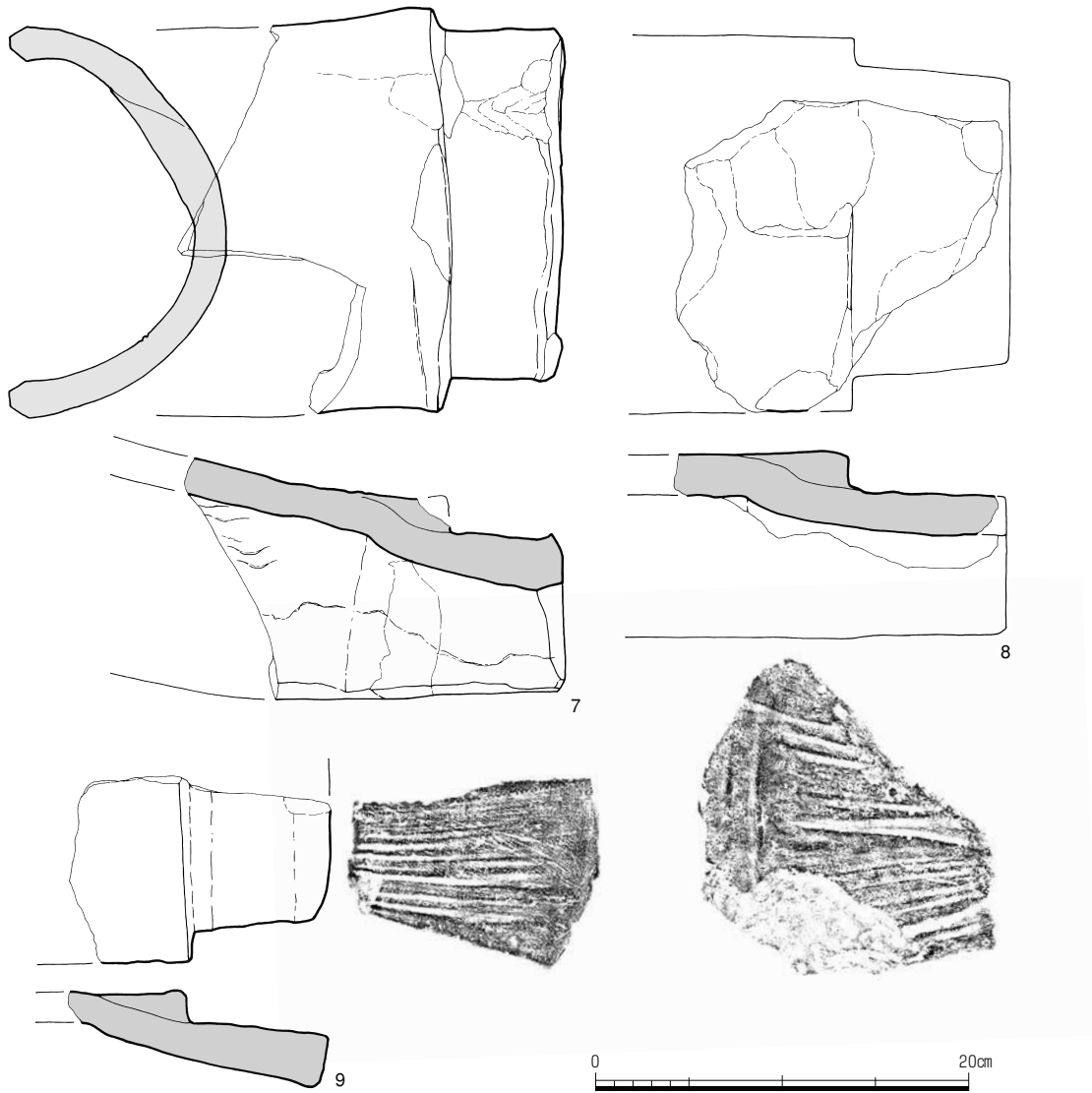


Fig. 69 丸瓦実測図 (3) 1:4

段差が緩い
1 類 B

丸瓦 1 類B (Fig. 69, PL. 40・41) 凹面の玉縁部から筒部への段差が緩やかな玉縁丸瓦。

7 (PL. 40-6) は、凸面を丁寧にナデ調整して叩き目を残さない。側面は、凹凸両面側にやや幅広の面取りをおこない、玉縁部の端も凹面側を面取りする。凹面は調整せず、布圧痕と糸切り痕が残るほか、玉縁部から筒部に連続する粘土板合わせ目S型と、布袋の綴じ合わせ目の痕跡や当て具の圧痕がある。綴じ合わせ目はぐし縫いで留めてあるが、重ね代の縁辺を留めた縫い目の痕跡がない。あるいは、襷縫いの痕跡かもしれない。粘土板合わせ目S型と判明する1類Bはこの1点のみ。玉縁部凸面のやや粗いユビナデ調整は、この粘土板合わせ目の隙間を調整したのだろう。焼き損じのためか、変形が著しい。玉縁長6.6cm、玉縁幅18.8cm、段部での筒部幅21.8cm。第111次調査北区包含層出土。

8 (PL. 41-1) と9は、凹凸面とも摩滅するが、玉縁部凹面に布袋のしわが何条もみえるのが特徴。玉縁の段部に貼り足した粘土が剥落している。側面は、凹面側にのみ面取りをおこなう。玉縁長約8cm。1類Bの玉縁部は1類Aより分厚い。8は第105次調査東区、9は第111次調査南区の土坑SK327出土。丸瓦1類Bは、1類Aに比して出土量が格段に少ない。

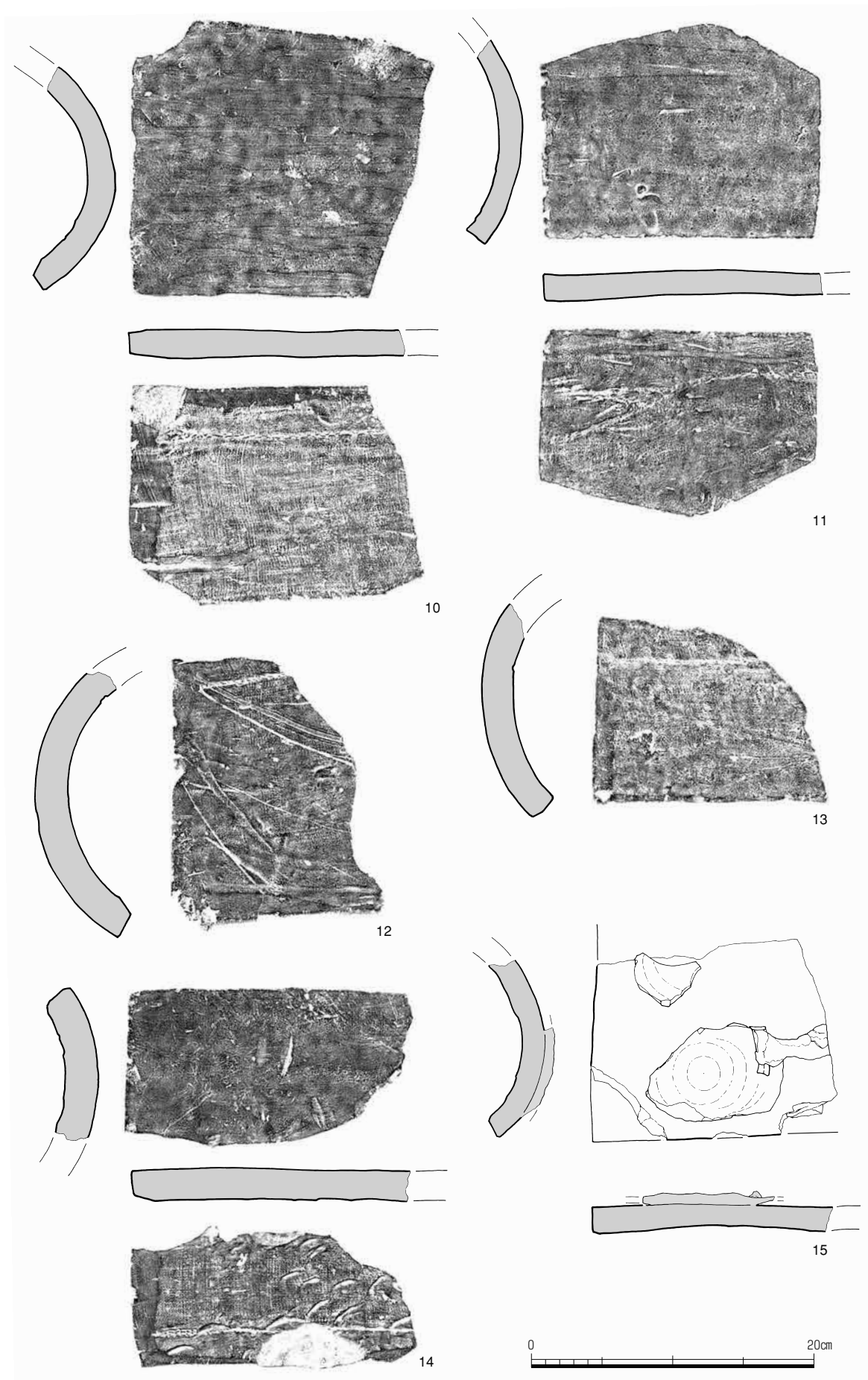


Fig. 70 丸瓦実測図 (4) 1:4

このほか、A・B不明の丸瓦1類の筒部で、特徴的な資料を列記する (Fig. 70, PL. 41)。

丸瓦の布袋

10 (PL. 41-8) には、ぐし縫いの布袋綴じ合わせ痕跡と、粘土板合わせ目S型がある。綴じ目の時計回り方向 (向かって右側) には浅い段差がみえるので、この部分が重ね代だろう。重ね代の縁には縫い目がなく、付加手法のない「綴じ合わせGZo」の布袋。粘土板合わせ目を軽くユビナデ調整している。凸面はタテ方向にヘラナデ調整。暗青灰色をした硬質の瓦。第105次調査東区SD306出土。

11の凹面広端部には、三角形に布圧痕のみえない部分があるので、布袋の綴じ合わせ目が位置することは間違いなが、ナデ調整のため、綴じ目の縫い方など詳細は不明。凸面はタテナデ調整。側面に分割破面が残る。暗灰色で硬質の瓦。第111次調査北区出土。

12 (PL. 41-7) には、綴じ目をまつり縫いした綴じ合わせ目の痕跡 (綴じ合わせMIZx) はあるが、縫い目の痕跡はみえない。第111次調査南区の土坑SK327出土。13の綴じ目圧痕は、12と同一と判断してよい。13は第111次調査南区のSD180出土。12・13とも軟質の瓦。

14 (PL. 41-9) は、凹面の側辺近くにある布袋綴じ目痕跡 (ぐし縫い) を、端面が円形をした工具で押さえる。凸面がかなり摩耗し、叩きの痕跡がはっきりしないので、当て具の痕跡なのか、綴じ目のくぼみを押さえただけなのか不明。第105次調査東区包含層出土。

須恵器溶着丸瓦

15 (PL. 41-10) は、凸面に須恵器杯Gが溶着した資料。杯Gは身2個体と蓋1個体がある。杯G身は底部が瓦に密着し、身の1点に杯G蓋のかえり部分の断片が付着して残っている。身の縁辺の多くは打ち欠かされている。なお、瓦の凹面には、14と同様の当て具痕跡が多数ある。金堂基壇西側での表採品だが、吉備池廃寺創建瓦の生産が瓦陶兼業窯でおこなわれていたことを示唆する資料として、参考に掲げておく。¹⁶⁾

2 類 は
縄 叩 き

ii 丸瓦2類 (Fig. 71, PL. 41)

丸瓦2類は、凸面にタテ縄叩き目を残す玉縁丸瓦。『年報』や『紀要』で「薄手品」とよんだ丸瓦がこれにあたる。平瓦にも「厚手品」(平瓦1類)と「薄手品」(平瓦2類)とがあるが、丸瓦2類は、平瓦の「薄手品」(平瓦2類)ではなく、タテ縄叩きの桶巻き作り平瓦 (平瓦3類) あるいは一枚作り平瓦 (平瓦4類) とセットになる。製作技法によって、A～Dに細分する。吉備池廃寺廃滅以降の丸瓦で、いずれも1点ないし数点を確認できたにすぎない。

丸瓦2類A 粘土板巻きつけ作りのタテ縄叩き玉縁丸瓦。段部の破片が1点ある (16)。凸面は縄叩きの後、ヨコナデ調整。凹面には布圧痕と糸切り痕が残り、側辺近くに布袋の綴じ合わせ痕跡 (ぐし縫い) がみえる (PL. 41-11)。綴じ合わせ目の時計回り方向には重ね代がないので、布袋は「綴じ合わせGS」。段部で布圧痕が潰れるのは、凸形台の圧痕だろう。側面調整は、分割破面と断面をヘラケズリするc₁手法。胎土には石英、長石、雲母を含む。硬質の焼きで暗青灰色。筒部復元径18.4cm。第111次調査北区出土。

丸瓦2類B 粘土紐巻きつけ作りのタテ縄叩き玉縁丸瓦。段部から玉縁部にかけての破片が1点ある (17, PL. 41-2)。凸面をヨコナデ調整するが、筒部には縄叩き目がかすかに残る。凹面は布圧痕が残り、玉縁部凹面には、布袋をまつり縫いでつぎはぎした痕跡がある (PL. 41-12)。また、粘土紐の積み重ねを示す粘土の隙間もある。側面調整はc₁手法で、凹面側の縁を面取りする。胎土は石英、長石、雲母を含み、やや粗い。硬質の焼きで暗青灰色。玉縁長5.0cm、第105次調査中央区包含層出土。

布袋をつぎはぎ

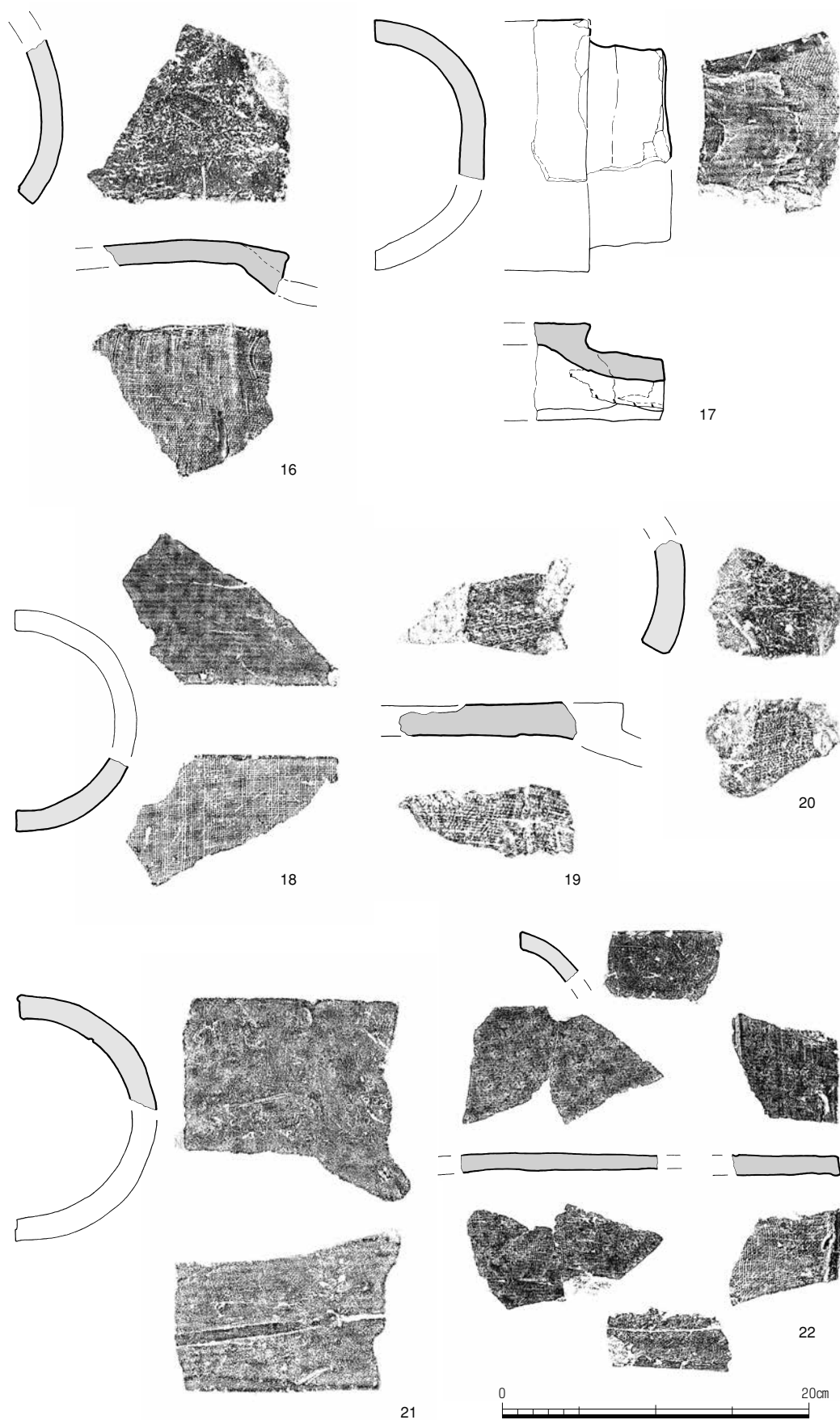


Fig. 71 丸瓦実測図 (5) 1:4

丸瓦 2 類C 2 類Aと同じく、粘土板巻きつけ作りのタテ縄叩き玉縁丸瓦と推定できるが、側面調整と焼きで区別した。筒部の破片が1点(18, PL.41-13)と段部の小破片が1点ある。凸面はタテ縄叩きののち、ヨコナデ調整。凹面には布圧痕と糸切り痕がある。側面はヘラケズリののち、ナデ調整。面取りはない。石英、長石、雲母などを含むやや粗い胎土で、淡灰褐色のしっかりした焼き。筒部復元径約15.5cm、厚さ1.4cm。第111次調査北区出土。

布圧痕粗い
赤褐色瓦

丸瓦 2 類D 凸面にタテ縄叩きを残す玉縁丸瓦(19・20)。筒部の厚さは約2cmあって分厚い。凹面の布圧痕は、織り目の密度が5本/cmとごく粗い。布袋は、筒部と玉縁部とを別にして縫い合わせる¹⁷⁾。砂粒をふくむやや粗い胎土で、赤褐色に発色する軟質の丸瓦。第105次調査中央区から6点の出土を確認した。

iii 丸瓦 3 類 (Fig. 71, PL. 41)

叩き目不明で、丸瓦 1 類よりも小振りの玉縁丸瓦筒部と推定される破片がある(21)。凸面はヨコナデ調整して成形時の叩き目を残さないが、側面近くには、調整後についた無文叩き板の圧痕がある。凹面は調整しない。布圧痕と布袋の綴じ目がある(PL.41-14)。布袋の綴じ目は、広端側を縫い合わせない「布B」¹⁸⁾。側面は、分割破面だけをヘラケズリ調整するb手法。胎土には、石英、長石、クサリ礫の細粒を含む。比較的硬質の焼きで、明灰色をしている。第111次調査南区のSD180から出土した1点だけを確認した。側面調整や布袋の特徴からみて、飛鳥時代初期の「星組」瓦工人に特徴的な玉縁丸瓦の可能性はある。

3 類は飛鳥
時代初期

iv 丸瓦 4 類 (Fig. 71)

行基丸瓦

同一個体の行基丸瓦と推定できる破片が、第81-14次調査区から3点出土した(22)。狭端部と側辺の破片が各1点ある。凸面はタテナデ調整し、狭端部はヨコナデ調整する。叩きの種類は不明。狭端面はナデ調整し、凹面側の縁を面取りする。側面は、分割破面だけをヘラケズリ調整し(b手法)、凹凸面側に面取りのヘラケズリを加える。石英・長石の細粒を含むが緻密な胎土をもち、比較的硬く焼けている。表面は黄灰色から暗灰色。厚さ1cmと薄く、7世紀前半の瓦とみてよいだろう。

v 小 結

以上、吉備池廃寺出土の丸瓦を1類から5類に分類した。丸瓦 1 類は総破片数、総重量とも丸瓦の99%以上を占めるので、創建丸瓦と認定してよい。その製作技法をまとめておこう。

丸瓦 1 類の模骨は、玉縁部までである一木の模骨と考える。布袋は、筒部広端まで綴じ付けた「布A」。綴じ合わせ目には少なくとも2種類がある。分割凸帯は撚り紐を使用するが、段部では凸帯を露出させないので、玉縁部と筒部とで紐が連続しない。粘土板は、丸瓦の全長分の長さをもったものを逆時計回りに巻きつける。このため、粘土板合わせ目は筒部から玉縁まで連続し、合わせ目はS型に限られる。段部は、凸面に粘土を貼り足して成形する。凸面を叩いたのち(叩き目不明)、タテ方向に丁寧に調整する。模骨から粘土円筒をはずし、分割界線を目安に二つに分割する。分割截線は凹面側から入れる。側面調整をしたのち、凹面の四周と時に側辺の凸面側にも面取りをおこなう。

丸瓦 2 類は、7世紀末の藤原宮期以降の丸瓦と推定する。このうち、丸瓦 2 類A・Bは製作技法や焼きのぐあいから判断して、藤原宮所用瓦とみてよからう。丸瓦 2 類Cは、奈良時代の瓦だろう。丸瓦 2 類Dは平安時代、丸瓦 3 類と4類は吉備池廃寺創建以前の瓦だろう。

D 平 瓦

吉備池廃寺からは、破片数総計17,963点、総重量2,073.3kgの平瓦が出土した。出土平瓦については、各調査次数の概要報告のなかで簡単な報告をおこなってきた。そこでは、創建期の平瓦については、おおむね厚さ1.7cmを境として、「厚手品」と「薄手品」とに分類できること、出土量は前者が9割を占めること、創建期以外の時期の平瓦もごく少量存在すること、が指摘¹⁹⁾されている。今回の報告では、吉備池廃寺から出土した平瓦を1類から5類に分類し、さらに各々を成形技法や調整手法で細分²⁰⁾した。

i 平瓦1類 (Fig. 72~80, PL. 42~44)

『年報』や『紀要』で「厚手品」と呼んだ厚さ約2cm以上の粘土板桶巻き作り平瓦。完形品はないが、大略の判明する資料が3点ある。 大型の1類

1 (Fig. 72, PL. 42-1) は、全長41.5cm、推定狭端幅31.5cm、推定広端幅36cm、厚さ2~2.5cm。凸面はタテナデ調整ののち、一部ヨコナデ調整を加え、成形時の叩き目を残さない。凸面の広端寄り半分には、調整後に付いた無文叩き板の痕跡がある。凹面も、広端から狭端に向かうタテナデで丁寧に調整し、布圧痕や桶の側板痕跡をまったく残さないが、瓦のほぼ中央と、それより広端寄りおよそ10cmのところに、狭端・広端と平行する浅いくぼみがある。あるいは桶の綴じ合わせに関連する痕跡だろうか。 桶綴じ合わせの痕跡

側面調整は、分割破面と分割断面をともに断面と平行にヘラケズリ調整するc₁手法。狭端面と広端面もヘラケズリ調整し、凹面四周を面取りする。側面と端面および面取りのヘラケズリは、凹面からみて時計回り方向に動く。現存重量4.63kgあり、完形品だと6kgを越えるだろう。第111次調査北区の土坑SK362出土。

2 (Fig. 73, PL. 42-2) は、全長41.8cm、現存最大幅30cm、厚さ1.7~2cm。凸面は全面タテナデ調整、凹面もタテナデとタテヘラケズリ調整。叩き目や布圧痕、桶の側板痕跡などは一切残さない。側面調整はc₁手法、端面はヘラケズリ調整し、凹面四周に面取りのヘラケズリを加える。第111次調査北区の僧房北雨落溝SD341出土。

3 (Fig. 74, PL. 42-3) は、全長42.5cm、狭端幅26cm以上、厚さ2.2cm。凸面は、広端から狭端に向けてタテナいし斜めにナデ調整し、叩き目を残さない。補足の叩き目もみあたらない。粘土板合わせ目Z型の剥離面がある。凹面は、狭端から広端に向けてヘラのような工具を使ってナデ調整する。桶の側板痕跡や布圧痕はみえないが、凹面のほぼ中央には、1と同様に、狭端・広端と平行する浅いくぼみがみえる。側面調整はc₁手法、狭端・広端面はヘラケズリ調整。凹面の周囲をヘラケズリで面取りする。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

このほかに、全長の判明する資料が1点ある (Fig. 75-4, PL. 43-1)。全長は42.7cm、厚さ1.6~1.8cm。凹凸面とも、タテナデ調整で叩き目や布圧痕を消し去る。側面調整はc₁手法、狭端・広端面はヘラケズリして、凹面四周をヘラケズリで面取りする。全体に摩滅しているので、ケズリ調整の方向などは不明。第105次調査中央区包含層出土。

5~13・20は狭端部 (Fig. 75~77・80, PL. 43・44)。凹凸面にタテ方向の調整を加える。

凸面の調整手法は、ナデ (6・7・11~13, PL. 43-2~4)、ヘラナデ (8・10, PL. 43-5・6)、ヘラケズリ (5・9, PL. 44-3) があり、いずれも凸面の全面におよんで成形時の叩き目を残さない。

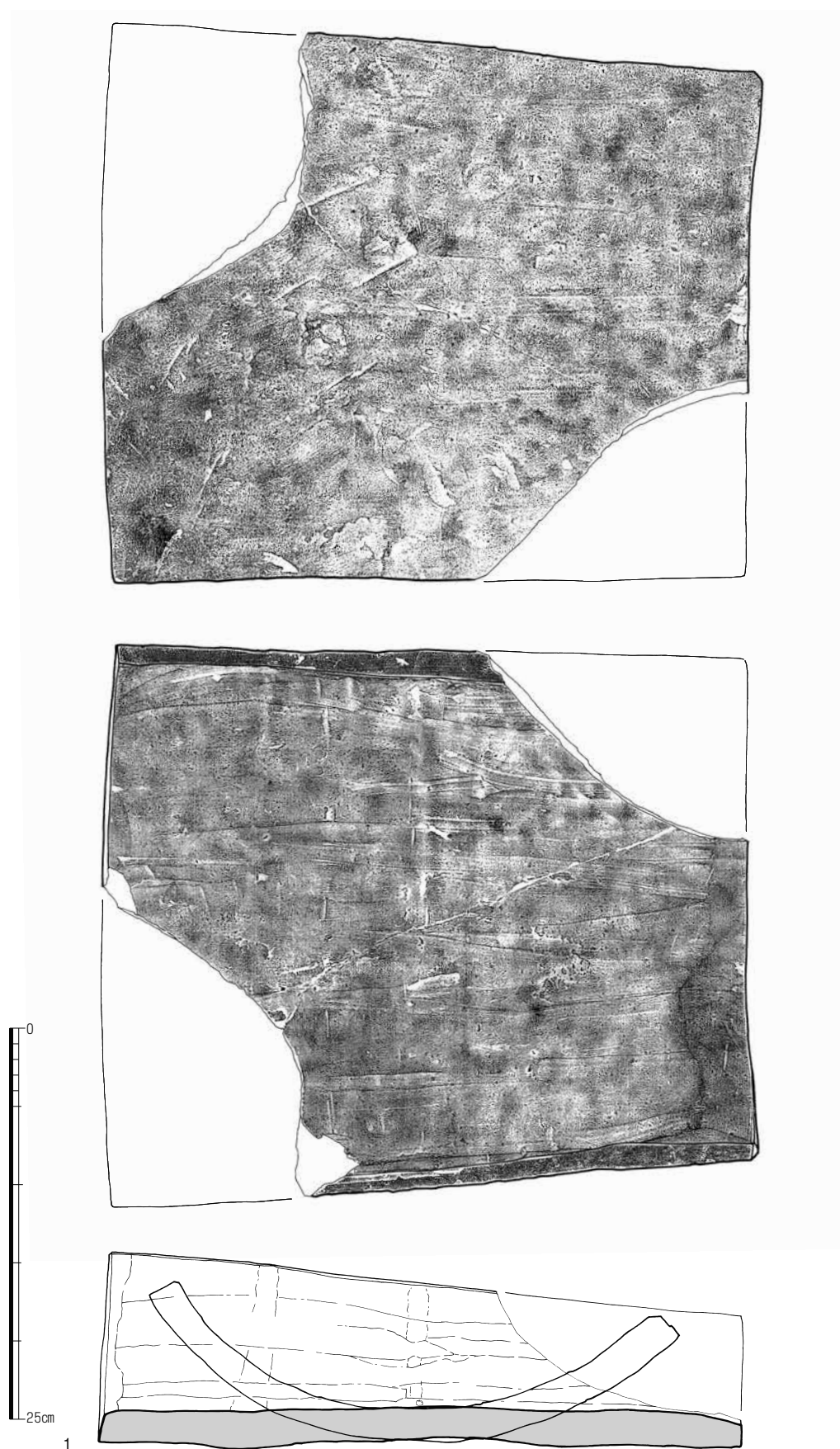


Fig. 72 平瓦1類実測図(1) 1:4

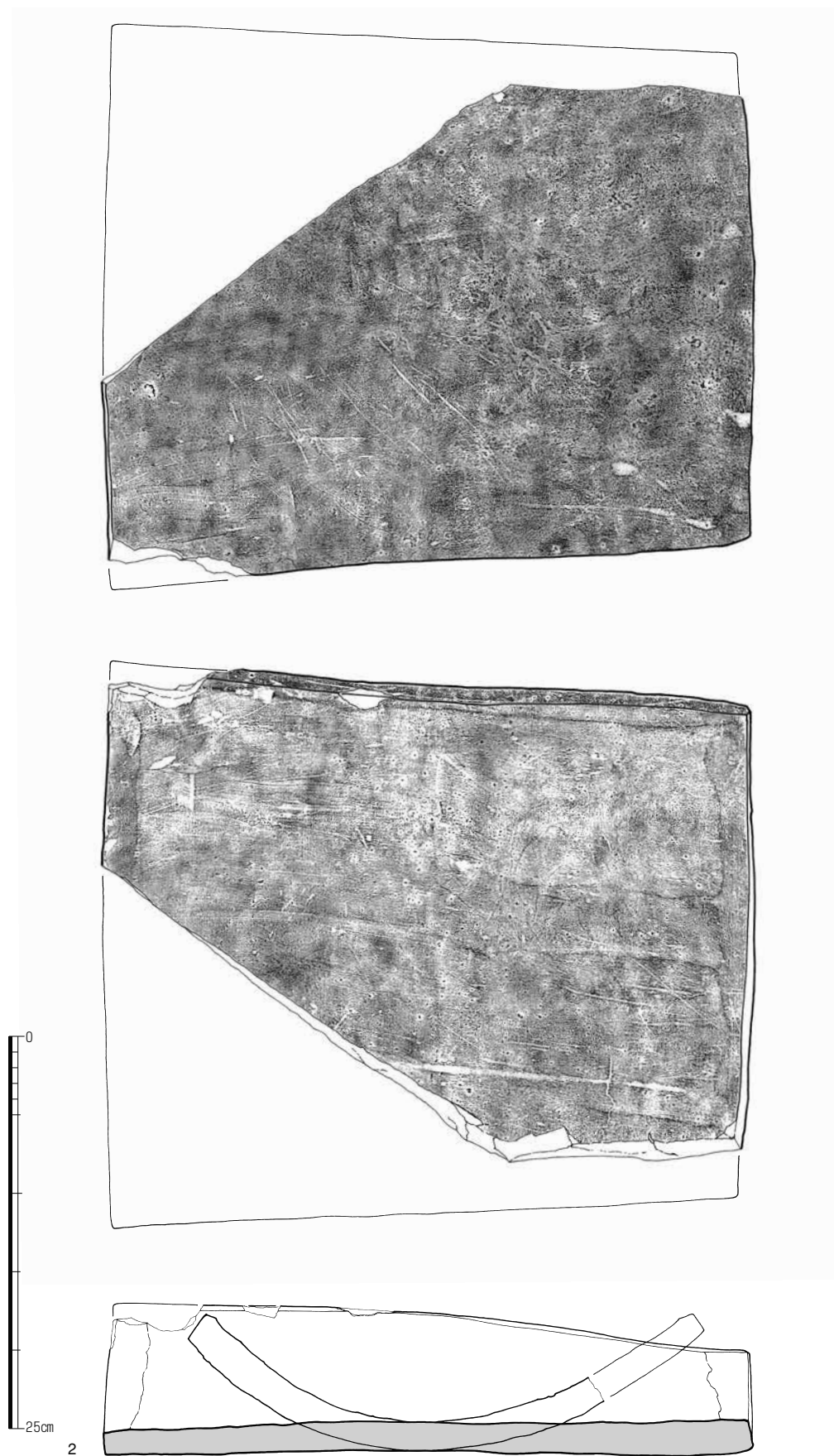


Fig. 73 平瓦1類実測図(2) 1:4



Fig. 74 平瓦1類実測図(3) 1:4

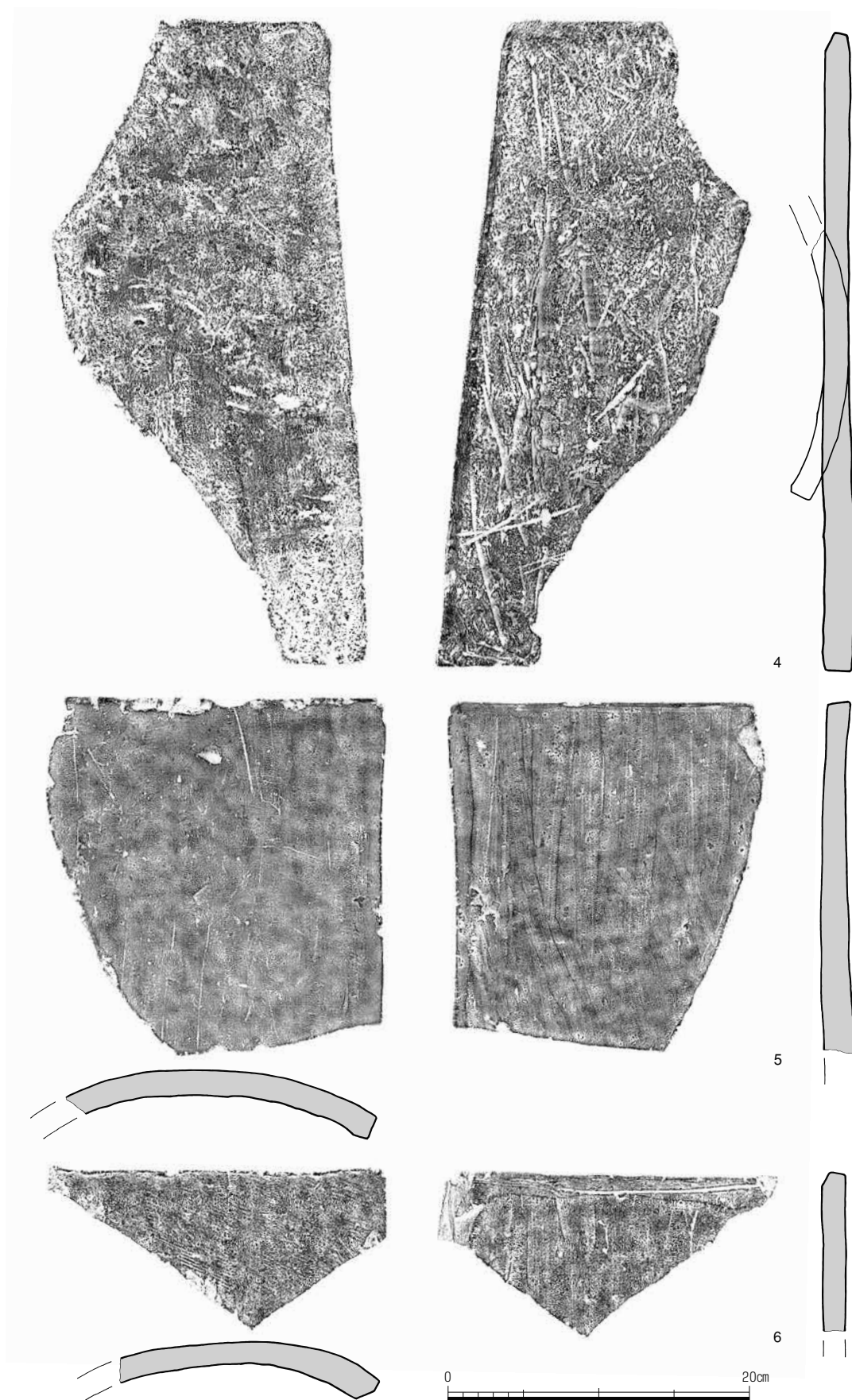


Fig. 75 平瓦 1 類拓影 (1) 1:4

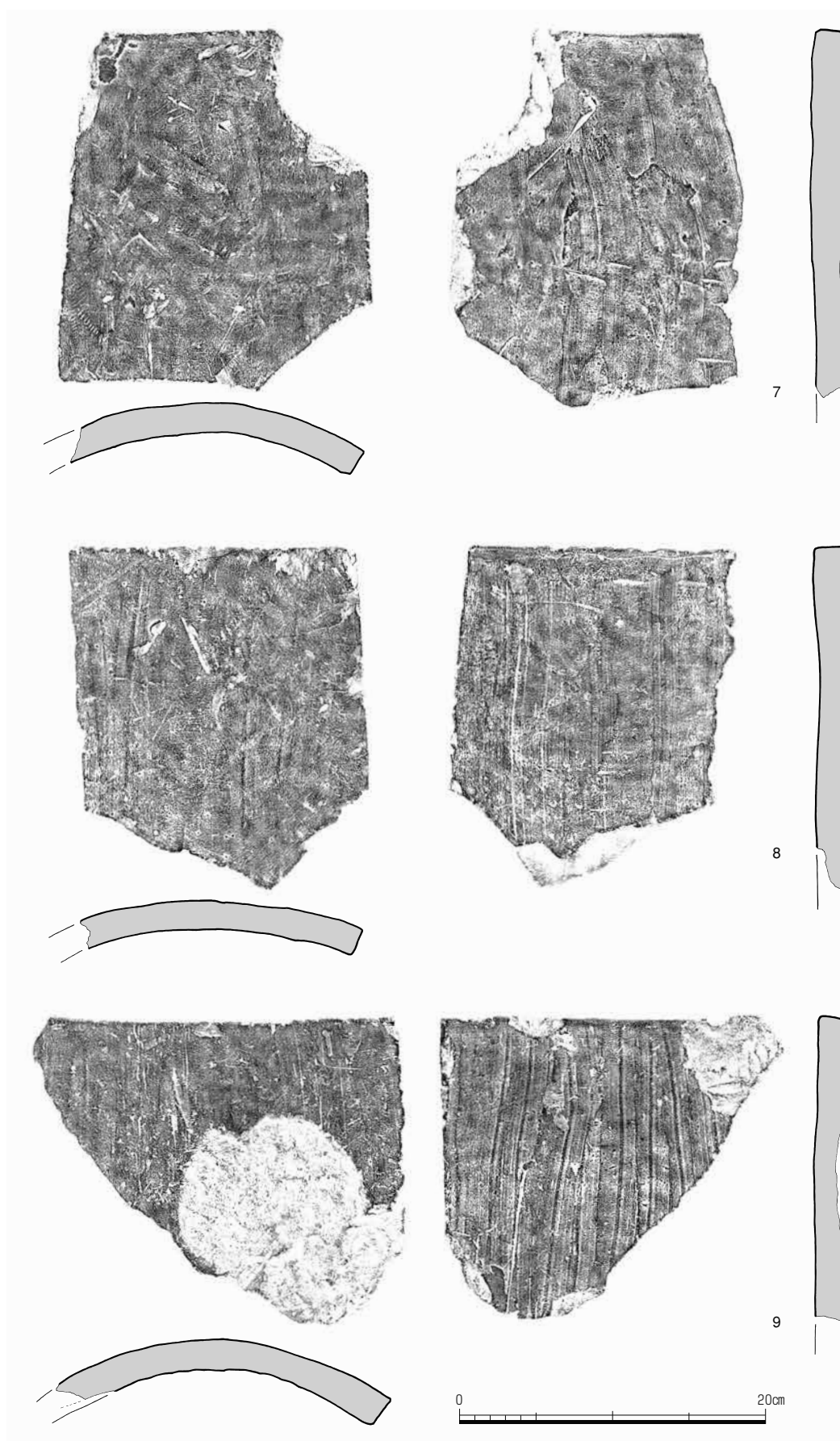


Fig. 76 平瓦1類拓影(2) 1:4

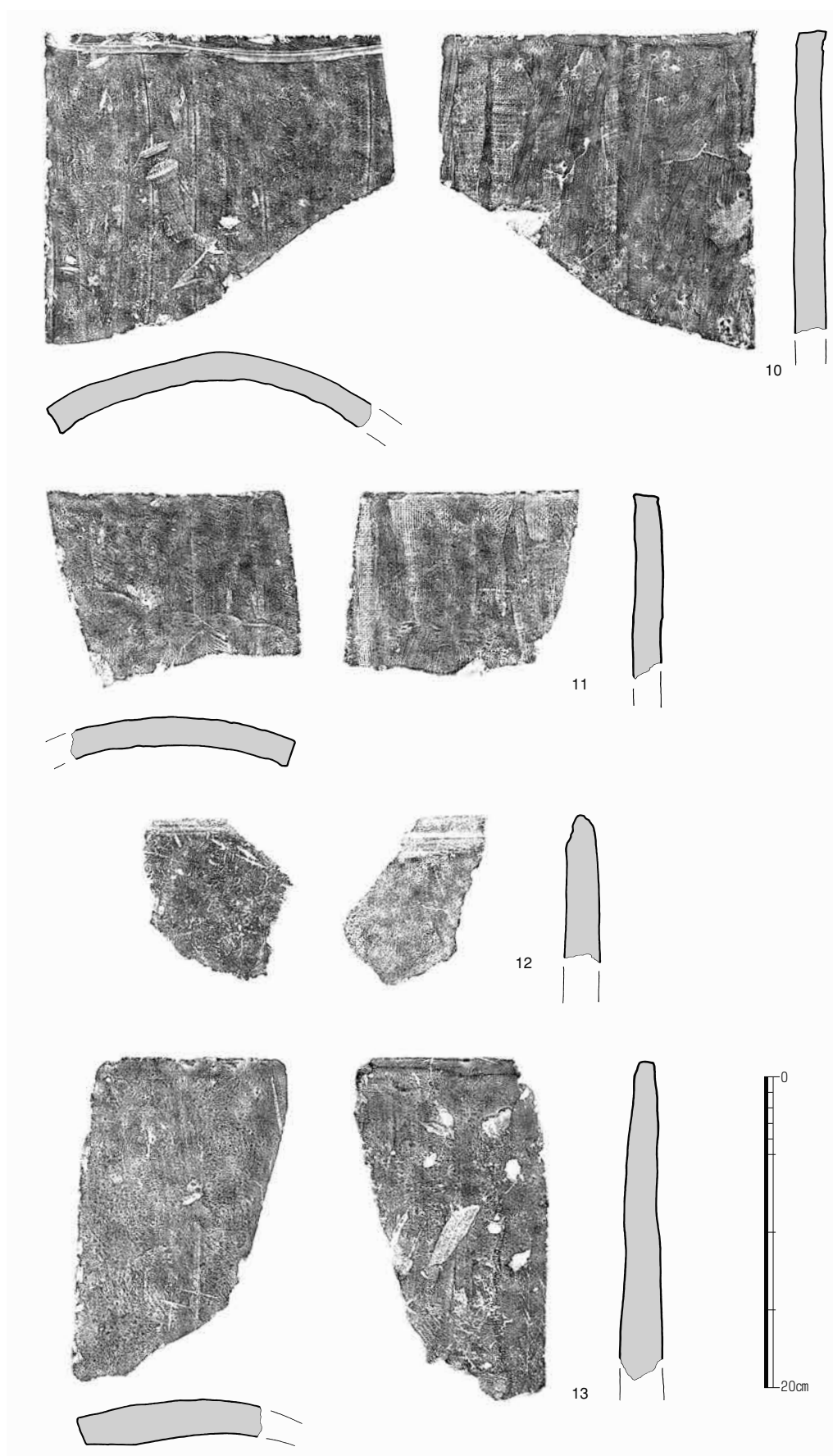


Fig. 77 平瓦1類拓影(3) 1:4

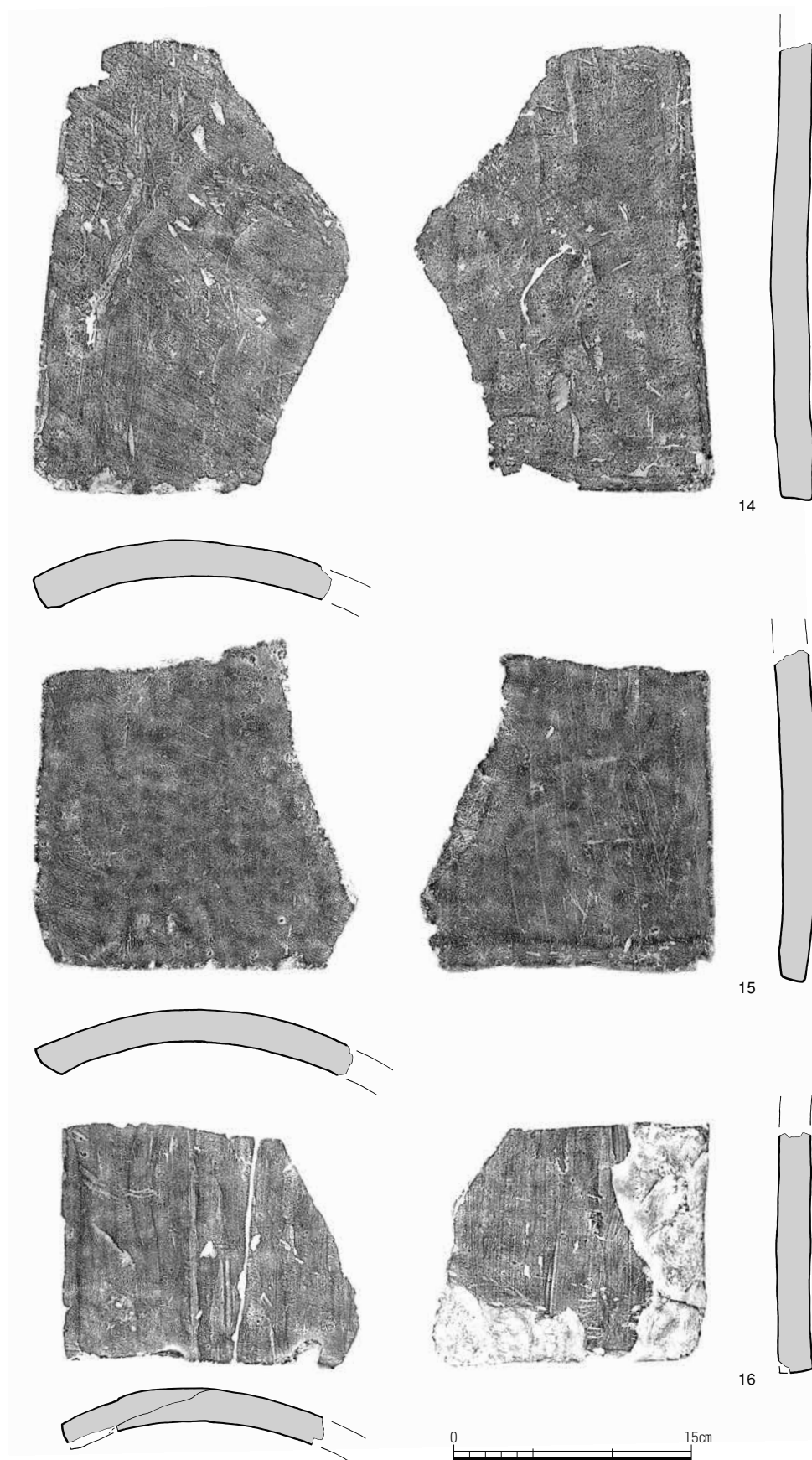


Fig. 78 平瓦1類拓影(4) 1:4

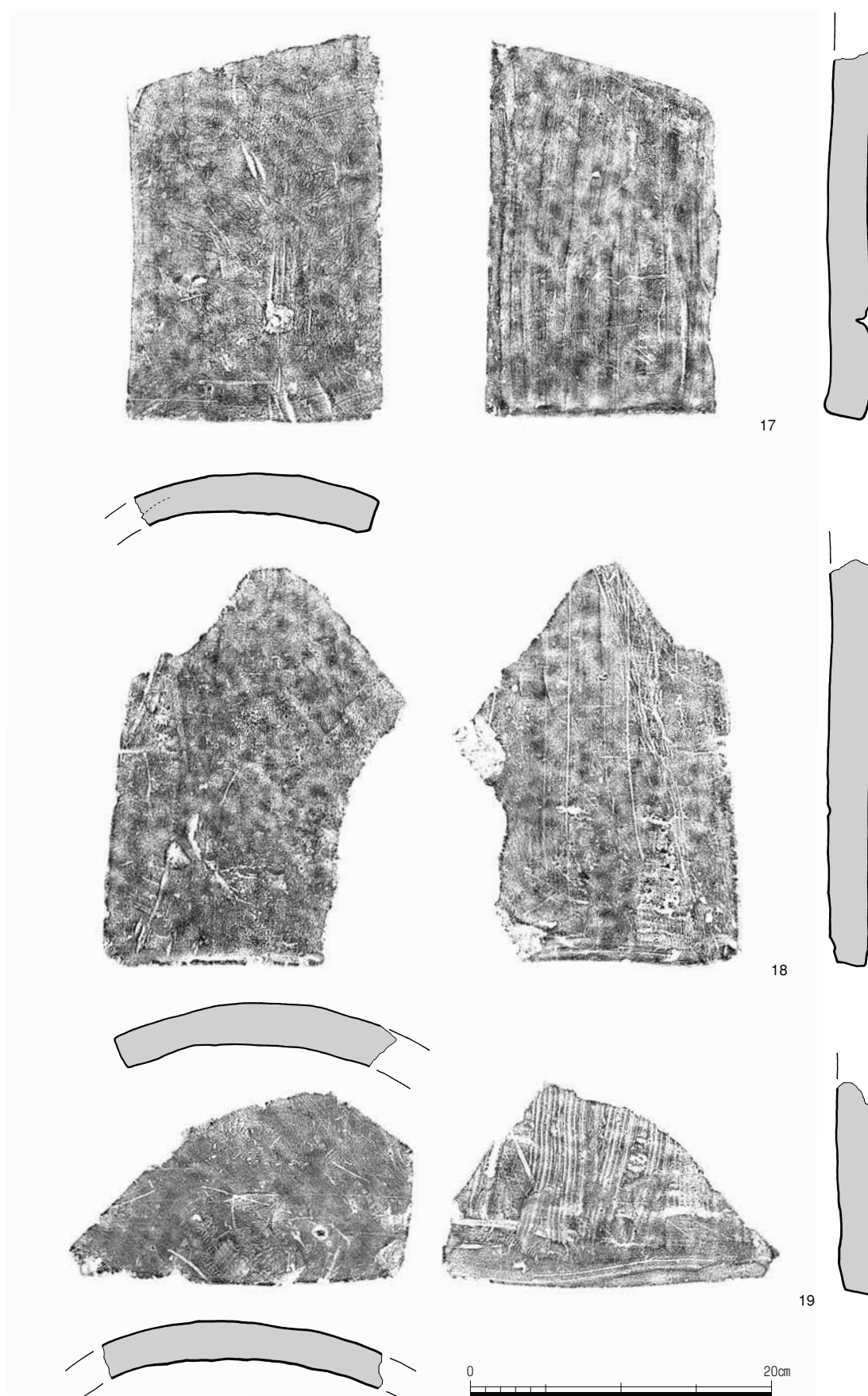


Fig. 79 平瓦 1 類拓影 (5) 1:4

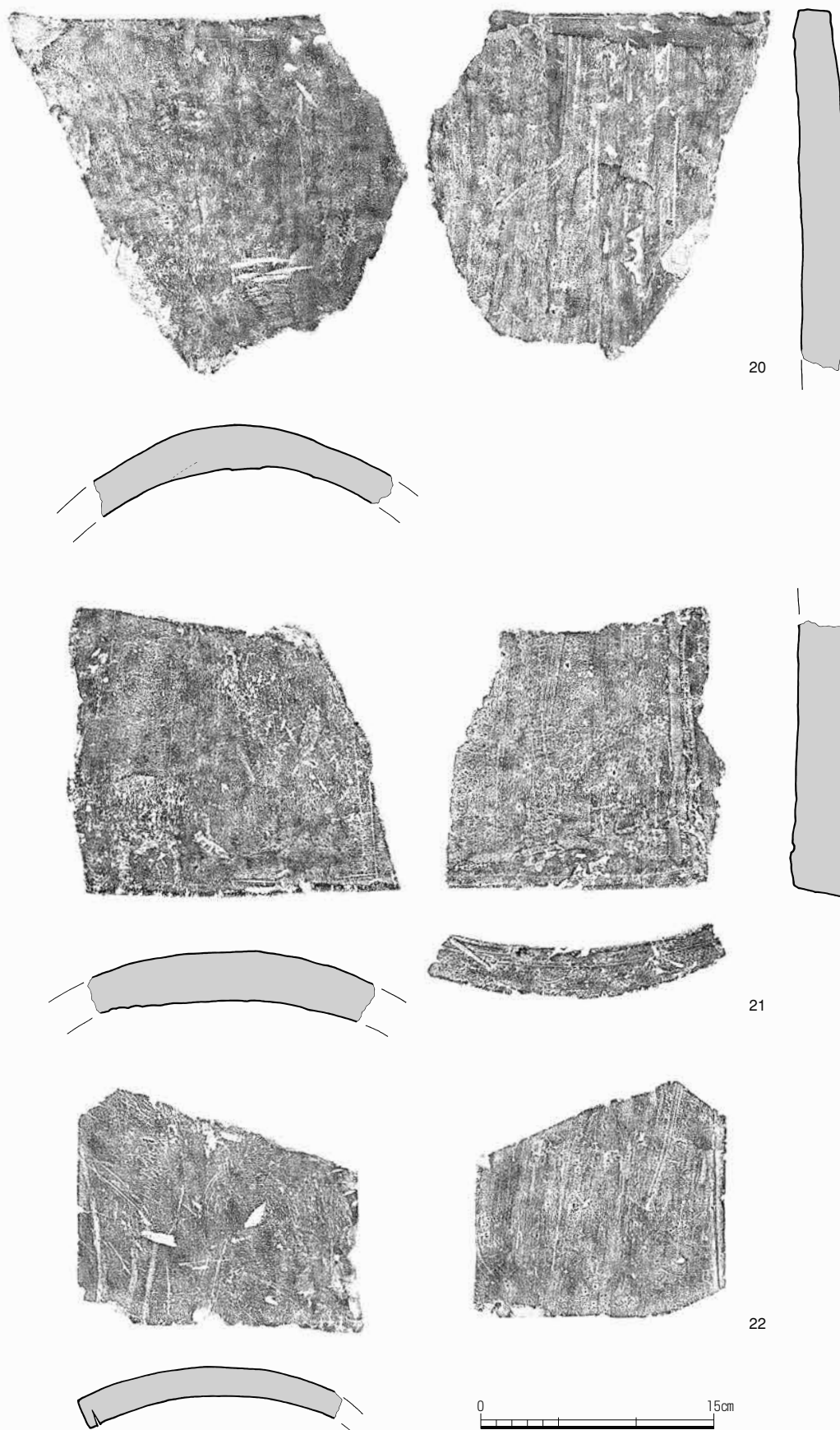


Fig. 80 平瓦1類拓影(6) 1:4

ただし、ナデ調整する個体には、調整後に無文ないしは細かい平行刻線（あるいは木目か）の叩き板で叩いた痕跡が残る（6・7・11, PL.43-2~4・44-1）。凹面も凸面同様、タテ方向に調整する。わずかに布圧痕が残ることがある（10・11, PL.43-3・5）ほか、粘土板合わせ目S型を確認した（20, PL.44-9）。狭端面はヘラケズリする。さらにヨコナデ調整を加えることがあり、断面が丸みをもつ例も稀にある（12, PL.44-7）。

調整後の
叩き

14~19・21・22は広端部の破片（Fig.78~80, PL.43・44）。凹凸面の調整は、狭端部の破片と違いがない。調整後に凸面を叩くことがあり（Fig.78-14, PL.43-8・44-2）、やはり、刻線のない無文叩き板を使う。凹面に、ハケ目の痕跡を残す例がある（Fig.79-19, PL.44-6）。広端面もヘラケズリ調整する。ヨコナデ調整を加える比率は、狭端より小さい。このほか、側面の分割截線を入れ損ねた例（Fig.80-22, PL.44-11）や、分割凸帯の紐の痕跡（分割界線）かと思われるくぼみ（PL.44-10）がある。側面調整は、基本的にはc手法だが、b手法の例もあり、ごく稀に分割破面が残ることがある（PL.44-12・13）。平瓦1類は原則として厚さ3cmを越えないが、まれにそれ以上の個体がある（Fig.80-21）。

分割界線

ii 平瓦2類（Fig.81~83, PL.45~47）

『年報』や『紀要』で「薄手品」と呼んだ、厚さ約2cm未満の粘土板桶巻き作り平瓦。凸面を丁寧にナデ調整して叩き目を残さない「平瓦2類A」、凸面を調整せず平行叩き目が残る「平瓦2類B」、凸面を調整せず格子叩き目が残る「平瓦2類C」の3種に細分した。

2類は薄手

平瓦2類A（Fig.81, PL.45） 広端で幅18.3cm、長さ34.4cmを残すやや大型の破片がある（23, PL.45-1：第111次調査北区の僧房SB340の北側柱列柱抜取穴出土、24, PL.45-2：第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土）。全長が35cm以上と推定でき、以前推測したような「小型平瓦」とする²¹⁾のはあたらない。厚さ1.2~1.8cm。

2類は小型
にあらず

凹凸面とも丁寧に調整するため、凸面には叩き目をまったく残さず、凹面にも布圧痕が残ることはほとんどない。調整はナデまたは板ナデで、多くは広端から狭端に向かって調整する。ただし、狭端から広端に向かう例や、凸面のみヨコないし斜めにナデ調整する例もある。また、凹面をタテにヘラケズリ調整した例もあった。凸面調整ののちに、無文の板で軽く叩いた例があり（23・25, PL.45-3）、凹面にはそれに対応した当て具の痕跡がある（25, PL.45-4）。1例だけ粘土板合わせ目S型を確認した（28, PL.45-5）。

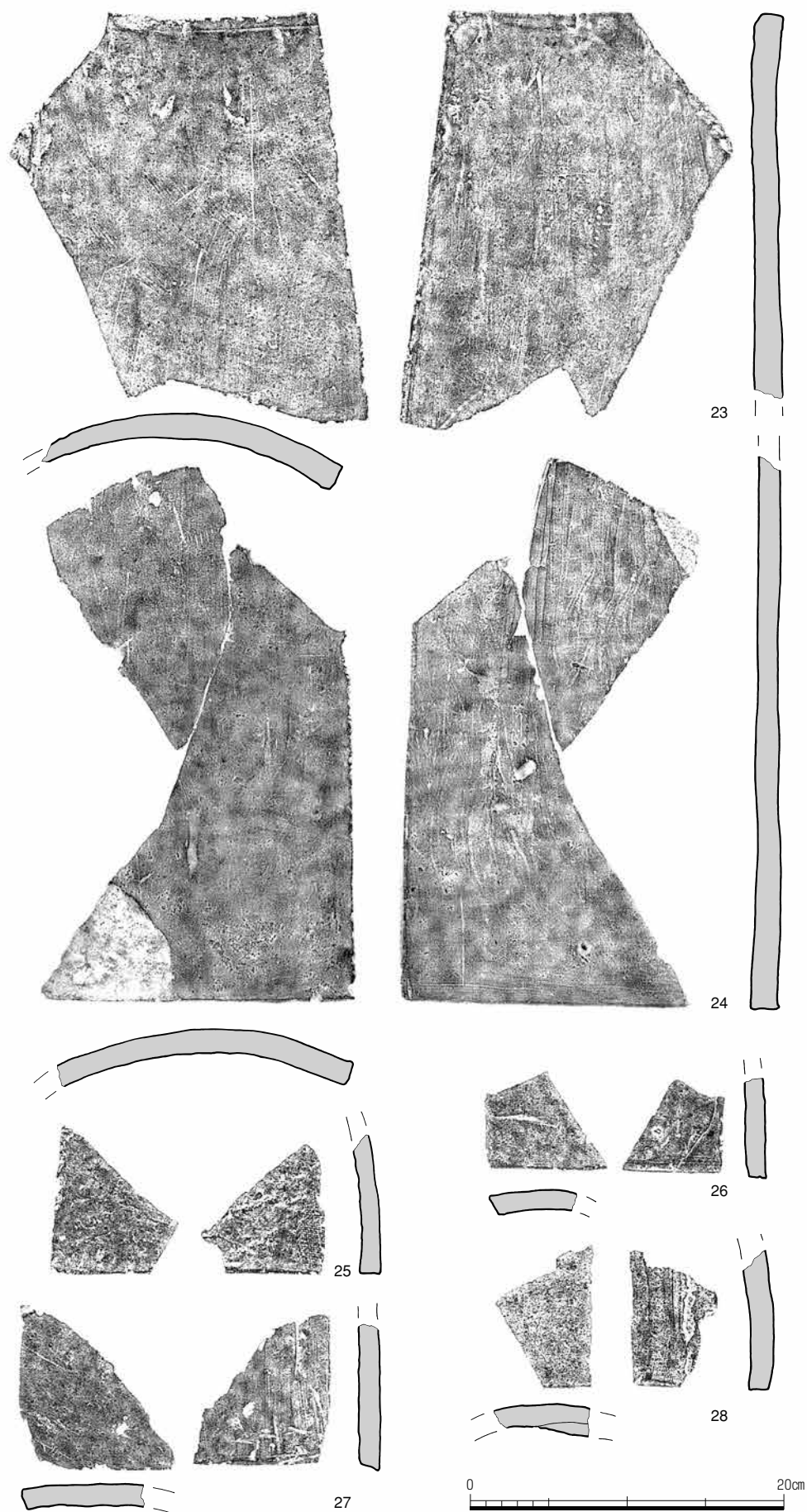
側面は、分割破面だけをヘラケズリ調整するb手法。分割截面が残る（PL.45-6）。広端面はヘラケズリ調整ののちナデ、狭端面はナデ調整した例が多い。広端側の凹面縁に面取りのヘラケズリをおこなう。

平瓦2類Aは、石英、長石、雲母のほかクサリ礫の粒を含む緻密な胎土をもち、灰色ないし淡褐灰色をして焼きがやや甘いものと、硬質の焼きで灰色から青灰色をしたものがある。

平瓦2類B（Fig.82, PL.45~46） 凸面はごく稀に軽いナデ調整が入る程度で、ほとんどが細かな平行叩き目を明瞭に残す。叩き目は、狭端あるいは広端に平行するか左上がりの方向で、その上から方向の違う叩き目が重複する例がある（33・35~37, PL.45-8・46-4~6）。いずれにしても、叩き締めの際弧を描くようにはみえない。

平行叩き目

叩き板を完全に同定することはできなかったが、1cmあたり7本前後のごく細い刻線を入れる叩き板（31, PL.46-2）、1cmあたり3~4本程度の細い刻線をもつ叩き板（29・34, PL.45-



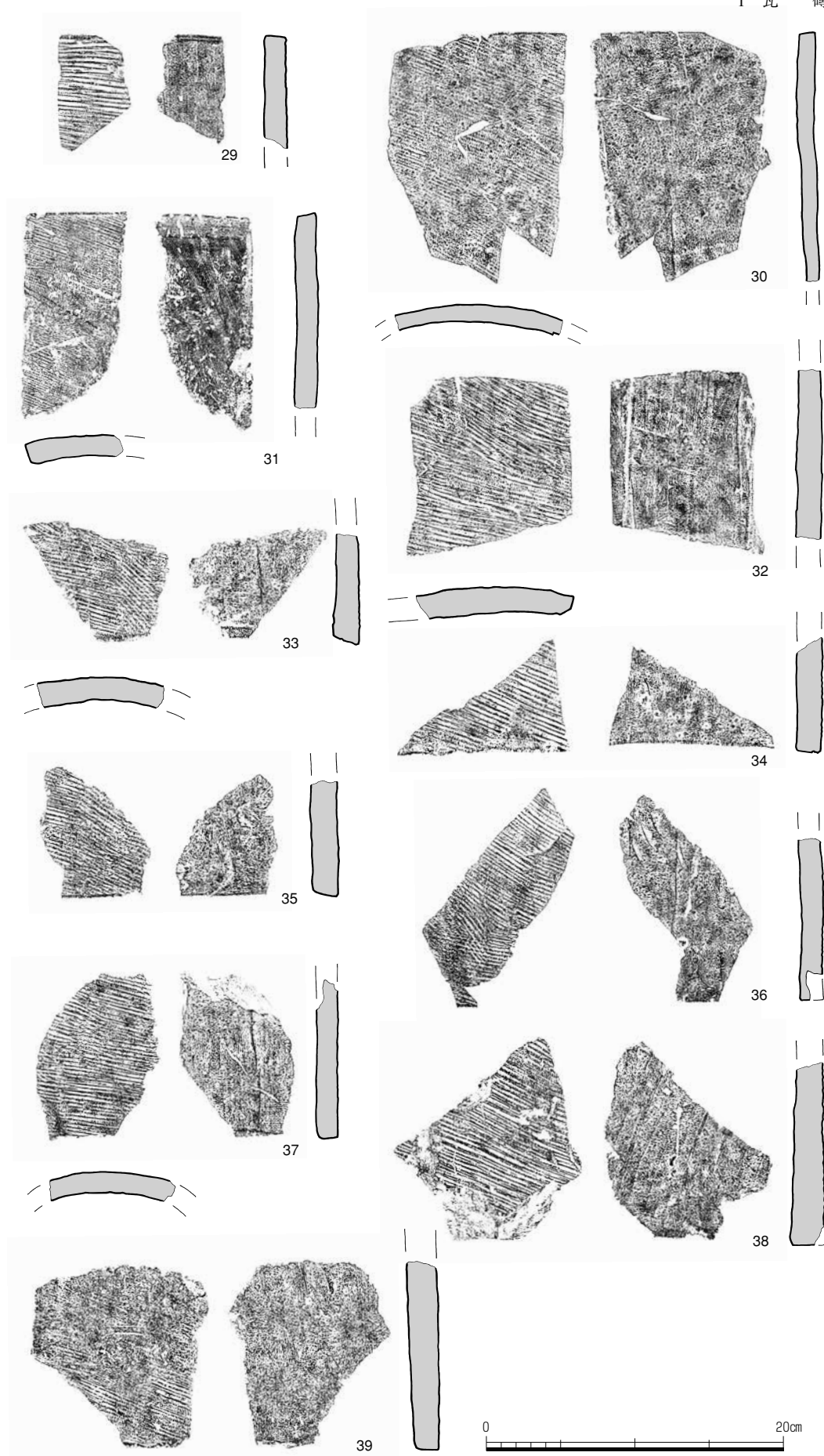


Fig. 82 平瓦 2 類B拓影 1:4

柁目の板の
叩 き 板

7・46-3)、刻線がやや太い叩き板 (32・33・35, PL.46-1・4)、間隔がやや広く刻線が太い叩き板 (37~39, PL.46-6~8) があることは識別できる。ほかに、叩き目の凹部がきわめて細く、単なる柁目の板を叩き板としたのではないかと思えるものがある (30, PL.45-9)。また、叩き板の先端は角が落としてあることがわかる例もある (36, PL.46-5)。

凹面はタテないしヨコ方向のナデ調整をおこなうが、糸切り痕や布圧痕を残すことがある。桶側板の痕跡は明瞭でない。

側面は、破面をヘラケズリ調整するb手法。凹面側ないし凸面側に面取りをするものがある。狭端面と広端面はヘラケズリ調整で、そののちナデ調整を加えることがある。凹面側だけを面取りするものが多い。

一辺20cm以上の破片がなく、規格は不明。厚さは1.4~2.0cmあって、2類Aより少し分厚い。

平瓦2類C (Fig.83, PL.47) 凸面に正格子あるいは斜格子叩き目を残す平瓦。

叩きを7種
に 分 類

叩き板は、イ~トの7種類がある。なお、叩き板口・ハ・への3種は、刻線が叩き板の木目(軸線)とどのような角度で交わるかがわからない。

叩き板イは、叩き板の木目に平行および直交する刻線を入れた正格子刻線叩き板 (40, PL.47-1)。木目に平行する刻線がやや太く (7~9mm間隔)、木目に直交する刻線はやや細い (6~7mm間隔)。

叩き板口は、正格子刻線叩き板 (41, PL.47-7)。刻線と叩き板の木目と角度は不明。刻線の間隔が8~9mmあり、叩き板イほど2方向の刻線で間隔の差がない。刻線が叩き板イよりも細いため、格子目が大きくみえる。

叩き板ハは、正格子刻線叩き板 (43, PL.47-4)。2方向とも刻線の間隔が5~6mmと狭く、しかも刻線は断面V字形をしているため、叩き目を見たとき、凹部底に平坦面がない。

叩き板ニは、正格子に近い斜格子刻線叩き板 (42, PL.47-5)。刻線は木目に平行および斜交し、お互いが交わる角度はおよそ75~80°。木目に平行する刻線がやや太く (5~6mm間隔)、木目に斜交する刻線が細い (3~5mm間隔)。

叩き板ホは、斜格子刻線叩き板 (46, PL.47-6)。刻線はともに木目と斜交し、刻線どうしは45°前後の角度で交差する。刻線の間隔は5~7mm。

叩き板へは、斜格子刻線叩き板 (47, PL.47-9)。刻線の交差角度はおよそ70~75°。刻線の間隔は56mm。

叩き板トは、斜格子刻線叩き板 (48, PL.47-8)。刻線はともに木目と斜交する。刻線どうしの交差角度はおよそ70~75°で、刻線の間隔は約7mm。叩き板へに似るが、木目が浮きだす点で区別できる。

2種類の叩き目が共存する例では、叩き目は左右で違っており、上下で異なる場合はなかった。ただし、いずれもそれほど大きくない破片資料での状況ではある。

叩き板の
組 合 せ

叩き板の組合せは、叩き板ホのあとに叩き板口が重なる例 (41, PL.47-7) のほか、先後関係不明ながら、叩き板イと叩き板ト (40, PL.47-1)、叩き板ホと叩き板へ (44, PL.47-2)、そして叩き板ホと叩き板イ? (45, PL.47-3) が重なる例があった。したがって、例数の少ない叩き板ハおよび叩き板ニを除く5種類がすべて関連することとなり、排他的に使用された叩き板は存在しない。

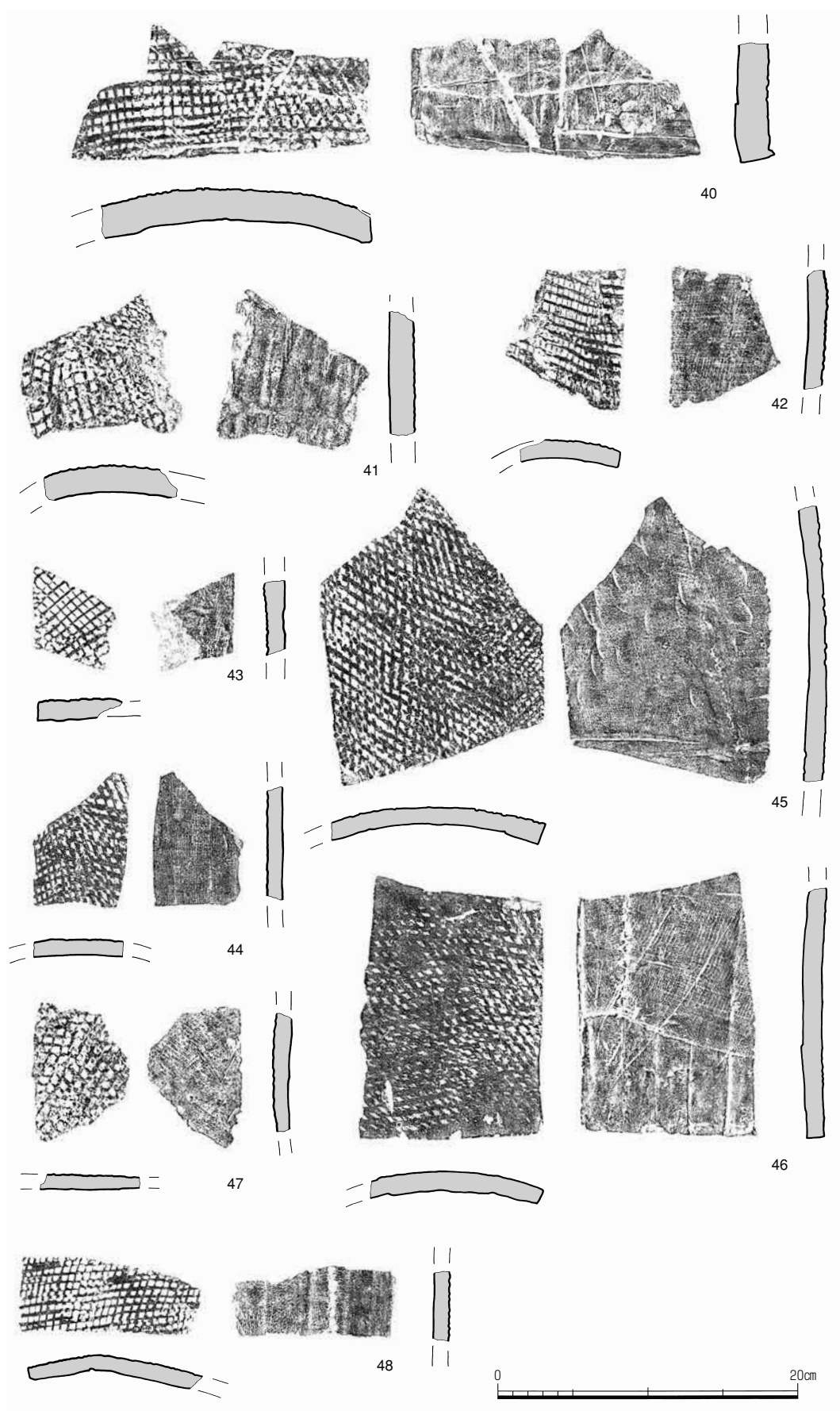


Fig. 83 平瓦 2 類C 拓影 1:4

当て具痕跡 凹面は、タテまたはヨコ方向のナデ調整をおこなうが、2類Aや2類Bに比べるとかなり簡略な調整にとどまっております、ほとんど調整していない例もある。このため、凹面には糸切り痕、桶側板の圧痕、布圧痕が明瞭に残る。当て具による爪形の痕跡（45, PL.47-3）や布綴じ合わせ目（46・48, PL.47-6・8）をとどめる例もある。46（PL.47-6）の布綴じ合わせは、綴じ目がぐし縫いで、重ね代の端を留め付けた縫い目は残っていない（綴じ合わせGSx²²⁾）。布袋が桶の下端までかぶらないため、広端では桶の側板に粘土板がじかに接している。側板の幅は2.2～2.6cmある。48（PL.47-8）は左上がりのまつり縫い（綴じ合わせMISx）。

側面調整は、破面だけをヘラケズリするb手法のほかに、分割破面と分割断面を断面に平行にヘラケズリ調整するc₁手法があり、後者の方が目立つ。狭端面と広端面は、ヘラケズリ調整ののち、ナデを加える。平瓦2類Cも、一辺20cmを越える破片がなく、規格は不明。厚さは1.2cm前後の薄いものが多いが、1例だけ2cmを越える破片があった。

3類は桶巻き縄叩き

iii 平瓦3類 (Fig. 84, PL.48)

平瓦3類は、タテ縄叩きの桶巻き作り平瓦。粘土板桶巻き作りの「平瓦3類A」と粘土紐桶巻き作りの「平瓦3類B」に細分する。

粘土板桶巻き

平瓦3類A 凹面に桶の側板痕跡があり、糸切り痕を残すタテ縄叩きの桶巻き作り平瓦（49～51, PL.48-1～3）。

凸面は調整がなく、凹面もごく一部をナデ調整ですり消す程度しか調整しない。凸面の縄叩き目は密度にばらつきがあり、同様に、側面の調整と面取りの仕方にも数種が存在する。

49（PL.48-1）は、縄叩き目の密度が9本/3cmで、凹型台の上で調整したため、縄叩き目が潰れる。凹面は軽く板ナデ調整する。

50（PL.48-2）は、縄叩き目の密度が11～12本/3cmで、凸面の側辺近くにそれと平行する凹型台の縁の痕跡がある。

51（PL.48-3）は、凸面をヨコナデ調整して、縄叩き目をほとんど消し去る。凹面には粘土板合わせ目Z型を残す。

平瓦3類Aは、厚さ1.8～2.7cmあり、規格は不明。石英や長石を含んだ緻密な胎土と粗い胎土とがある。

粘土紐桶巻き

平瓦3類B 凹面に桶の側板痕跡と、粘土紐の継ぎ目を残すタテ縄叩き桶巻き作り平瓦（52～55, PL.48-4・5）。

53（PL.48-5）は、凹凸面ともほとんど調整しない。凸面には10本/3cmの縄叩き目があり、凹面に桶の側板圧痕と布圧痕のほか、粘土紐の継ぎ目がある。52は、凸面をタテ縄叩きののち、ヨコナデ調整する。凹面に、綴じ目まつり縫い、縫い目ぐし縫いの布綴じ合わせ痕跡（MSg）がある（PL.48-4）。

52～55とも、側面調整は、分割破面と分割断面とともに凸面側に深くヘラケズリするc₂手法。凹面側の縁に面取りをおこなうものと、これを欠くものがある。狭端面と広端面はともにヘラケズリ調整する。規格の判明する資料はないが、厚さは1.7～2.8cm。

石英や長石は少なく、クサリ礫の目立つ緻密な胎土をもつ。焼きはやや甘く、青みがかった灰色をしている。53～55は、胎土と色調から判断して、藤原宮所用の高台・峰寺瓦窯の産品とみてよからう。

高台・峰寺瓦窯産

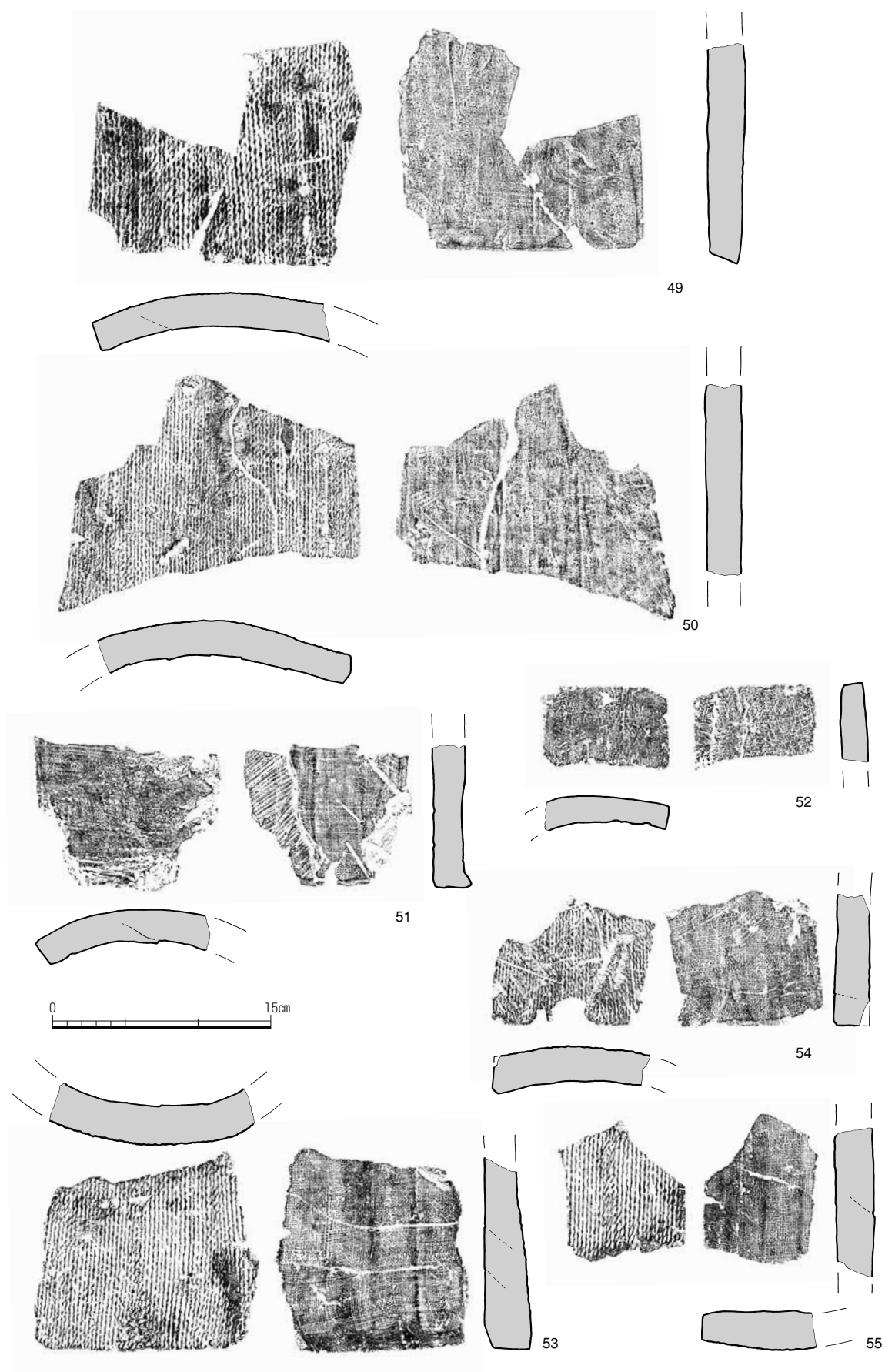


Fig. 84 平瓦 3 類 A・B 拓影 1:4

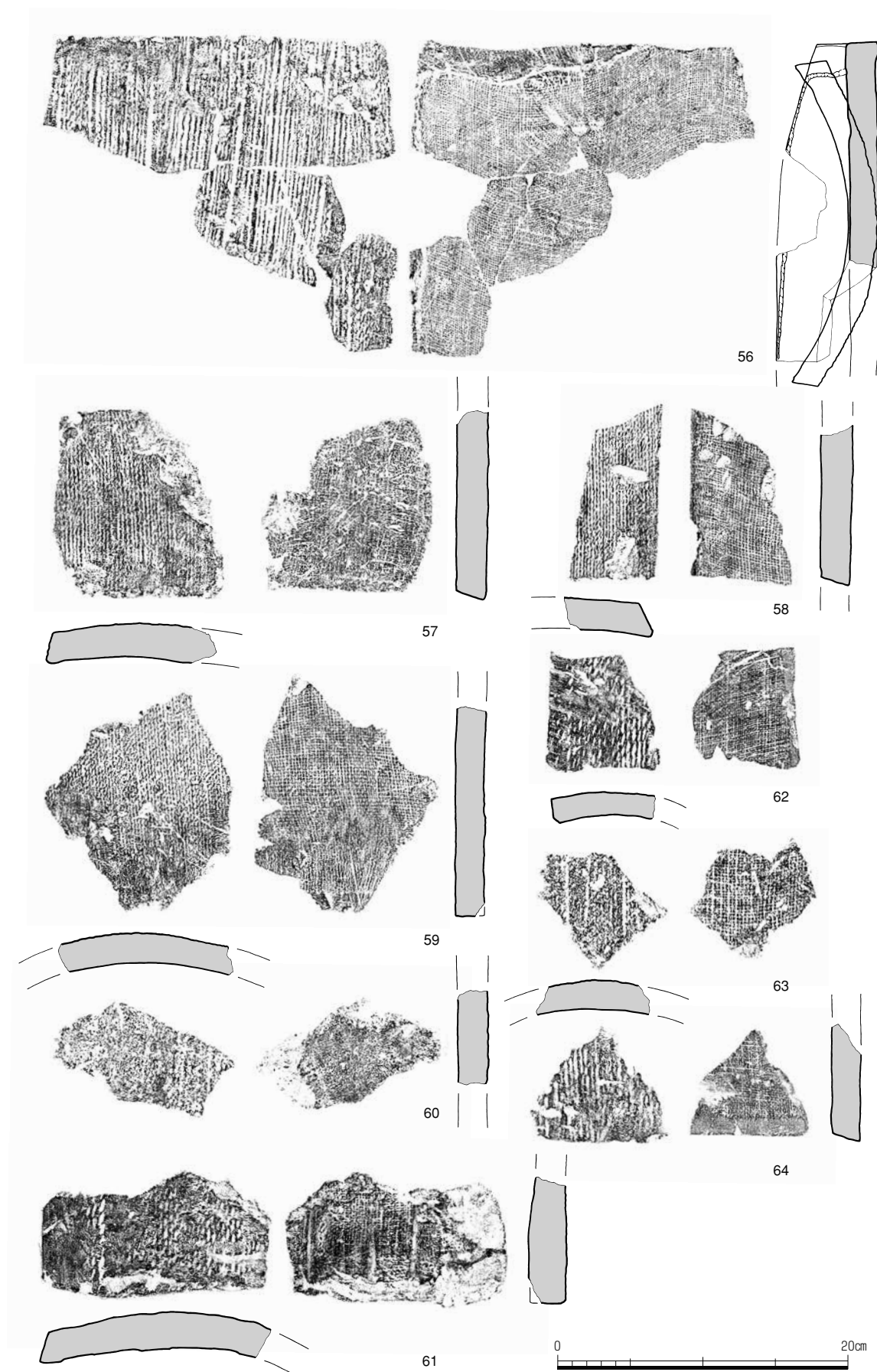


Fig. 85 平瓦4類A・B拓影 1:4

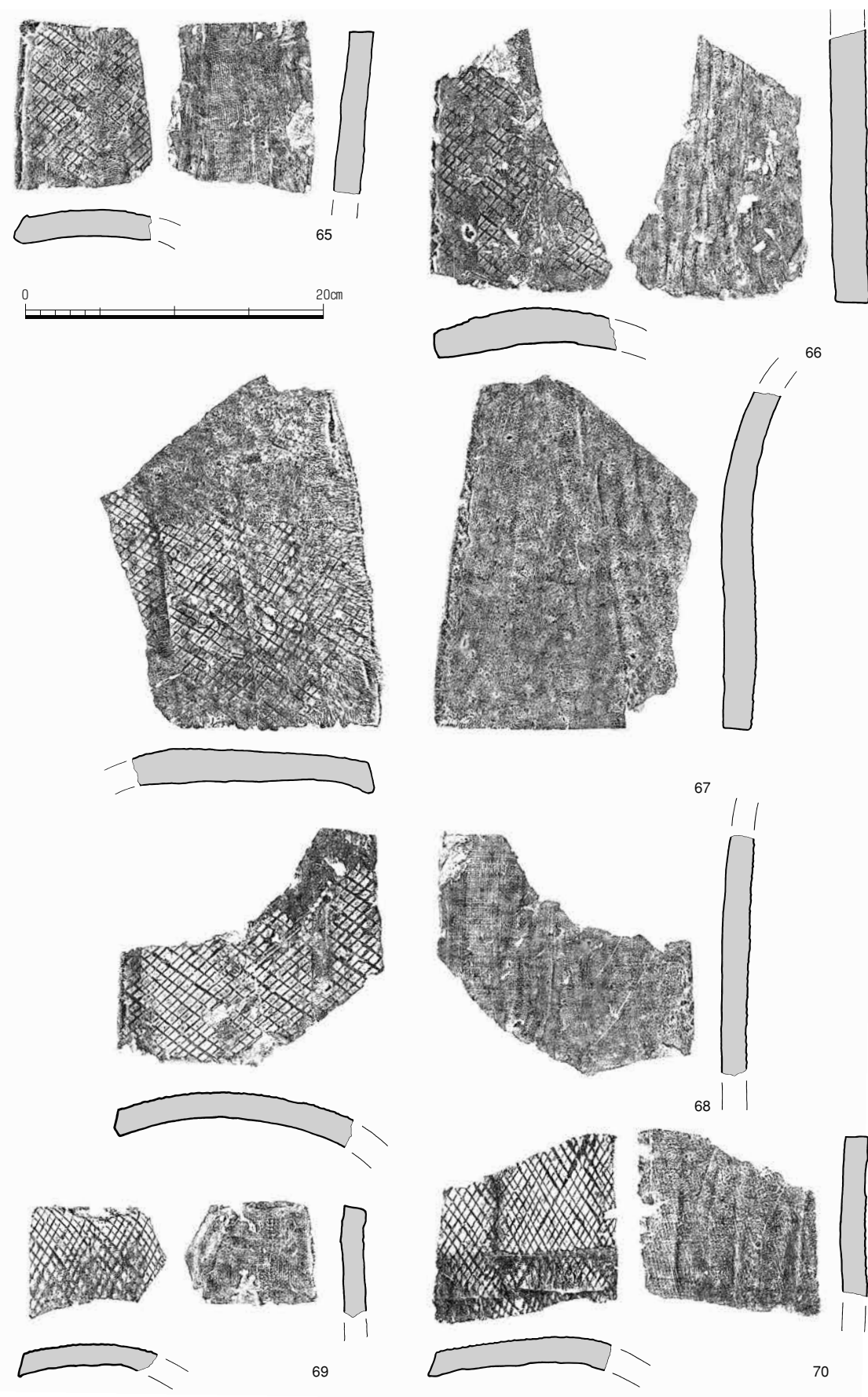


Fig. 86 平瓦5類拓影 1:4

iv 平瓦4類 (Fig. 85, PL. 49)

縄 叩 きの
一 枚 作 り

平瓦4類は、タテ縄叩きの一枚作り平瓦。黒灰色・灰色ないし淡青灰色をして縄叩き目が密な「平瓦4類A」と、ハナレ砂を使用して赤褐色に発色する「平瓦4類B」とに細分する。

平瓦4類A (56・59・61・62, PL. 49-1~3) 凹凸面ともほとんど調整しないので、凸面にはタテ縄叩き目が、凹面には布圧痕と糸切り痕が明瞭に残る。桶の側板痕跡や粘土板合わせ目がないこと、さらには、56 (PL. 49-1) のように、布端の圧痕が凹面の狭端から側辺にかけて連続することから、一枚作り平瓦と判断できる。縄叩き目は、縄の縊りが明確でないものもあり、3 cmあたりの縄叩き目の条数も、5本程度から10本を越えるものまで各種ある。縄叩き目の多くは、凹型台にのせたときの圧迫により潰れている。凹面を叩く例もある (61, PL. 49-2)。

凹 型 台

側面は、基本的に、凸面側を深くヘラケズリする。さらに、凹面の縁を面取りする例がある (56)。狭端・広端とも端面をヘラケズリ調整したのち、凹面側のみ面取りする。

規格は不明だが、厚さは2.0~2.8cmある。石英や長石のやや大きな粒を含んだ粗めの胎土をもち、焼きはおおむね硬質。表面は暗灰色、断面は灰色をしている。

平瓦4類B (60・63・64, PL. 49-4~6) 凸面には粗いタテ縄叩き目を、凹面には粗い布圧痕を残す。凸面にはハナレ砂が付着する。側面は凸面側に深くヘラケズリしたのち、凹面側を面取りする。平瓦4類Aと違って、赤褐色に発色する特徴がある。厚さ2 cm前後。

v 平瓦5類 (Fig. 86, PL. 50)

斜格子叩きの
一枚作り

平瓦5類は、斜格子叩きの一枚作り平瓦。叩き板は2枚、つまり、刻線が約100°の角度で交差し、2方向の刻線の間隔に違いがあるもの (65~68, PL. 50-3~6) と、刻線が約60°の角度で交差し、2方向の刻線がほぼ等間隔となるもの (69・70, PL. 50-1・2) とがある。前者は格子目が粗い平行四辺形となり、後者は細かな菱形の格子目となる。凸面は、叩き目を軽くナデ調整する。凹面は、部分的にナデ調整する例と、破片のほぼ全面がナデ調整された例がある。この違いは、叩き板の違いには必ずしも対応しない。側面は、凸面側に深くヘラケズリし、ナデ調整を加える。端面はヘラケズリのみ。厚さ1.5~2.4cm。破片資料しかないので、規格は不明。砂粒を含んだ緻密な胎土をもち、硬質の焼きで灰色をしたものと、軟質で明るい褐色をしたものがある。

vi 小 結

以上、平瓦を5類に分類して報告した。丸瓦と平瓦の組合せについて簡単にまとめる。

吉備池廃寺創建瓦は、丸瓦1類および平瓦1類と2類。丸瓦1類は、出土丸瓦総量の99%以上、平瓦1類は、出土平瓦総量の約90%を占めた。平瓦2類は総量の10%近くを占めるので、これら以外の丸・平瓦はごく微量しか出土していない。丸瓦1類と一緒に焼かれたのは平瓦1類で、平瓦2類と技法や焼き質が近似する丸瓦は出土しなかった。

藤原宮期の平瓦3類A・Bは、丸瓦2類A・Bと同時期。ともに高台・峰寺瓦窯の製品と推定できる資料はあるが、セットとして持ち込まれた確証はない。平瓦4類Aは奈良時代の瓦で、丸瓦2類Cが組む可能性がある。平瓦5類も一枚作りなので近似した時期と推定できるが、丸瓦には斜格子叩き目を確認できなかった。これらの瓦は、出土量がごく微量にとどまり、かつ創建瓦とは瓦の規格が違うので、吉備池廃寺の差し替え瓦ではない。吉備池廃寺廃滅後の瓦でまとまっているのは、丸瓦2類Dと平瓦4類Bのセット。これについては後述する。

- 1) 大脇 潔「吉備寺はなかった—『京内廿四寺』の比定に関連して—」『文化財論叢 II』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年。
- 2) 『年報 1997-II』～『年報 2000-II』および『紀要 2001』。軒丸瓦の「A・B」は、同文異範を意味する。一方、軒平瓦の「b」は、押し型が斑鳩寺（法隆寺若草伽藍、生駒郡斑鳩町）の213型式B種のそれを転用していることから、瓦範の彫り直しを表現する「小文字のアルファベット」（奈文研・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年）で、斑鳩寺例が先行することを示したものであった。
- 3) 花谷 浩「軒平瓦」『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年、213～242頁。
- 4) 木之本廃寺の認識と概要については、「第V章 4 出土瓦をめぐる諸問題」を参照のこと。
- 5) 仮屋喜一郎ほか『海会寺—海会寺遺跡発掘調査報告書—』泉南市教育委員会、1987年。
- 6) 伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」『古代瓦研究 I—飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—』奈文研、2000年。
- 7) 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝 瓦』法隆寺昭和資財帳 15、小学館、1991年。
- 8) 後述するように、木之本廃寺出土資料には時計回りに施文した例が少数ある。
- 9) 伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6)。
- 10) 『年報 1998-II』67～68頁。
- 11) 木之本廃寺の型式別出土点数は、伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6) 参照。
- 12) 井内 功「山田寺瓦当紋様の溯源」『古代瓦研究論誌』井内古文化研究室、1982年。『年報 1998-II』68頁。
- 13) 奈文研『古代瓦研究 I』前掲註6)、360～365頁参照。
- 14) 瓦の側面調整は次の3種に分類。a手法：分割破面を調整しない。b手法：分割破面のみ調整する。c手法：分割破面と分割断面をともに調整する。奈文研『藤原報告 II』奈文研学報第31冊、1978年、42頁。c手法は、ヘラケズリが分割断面と平行するものをc₁手法、分割破面側を深くヘラケズリ調整するものをc₂手法と細分する。
- 15) 布袋の綴じ合わせに関わる用語は、大脇潔（大脇 潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集 IX』奈文研学報第49冊、1991年）にならって、次のように記号化した。
M：綴じ目まつり縫い G：綴じ目ぐし縫い
S：布重ねSタイプ（左が上） Z：布重ねZタイプ（右が上）
l：綴じ目まつり縫いの針目左上がり r：綴じ目まつり縫いの針目右上がり
m：縫い目まつり縫い g：縫い目ぐし縫い o：縫い目なし x：縫い目不明
- 16) 大きい方の杯G身は、現状で差しわたし10cmほどあるが、変形して広がっているので、口径は10cm足らずと推測できる。また、杯G蓋のかえりは、高さが5mm程度しかないようにみえる。この資料については、以前に大脇 潔が言及している。大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註1)、註22。
- 17) 類品は山田寺と川原寺にある。山田寺は、玉縁丸瓦BⅢ b 5①とBⅢ b 5②。奈文研『山田寺発掘調査報告』前掲註3)、Ph. 131-2・3、Ph. 133-17・19。同書では、玉縁丸瓦BⅢ b 5①・②を天平宝字年間から平安時代前期に位置づけた（513頁）。
- 18) 『藤原報告 II』前掲註14)、42～43頁参照。
- 19) 『年報 1997-II』90頁、『年報 1998-II』64頁、『年報 1999-II』70頁、『紀要 2001』82頁など。『年報 1997-II』では、「薄手品」を小型瓦と推測している。また、『紀要 2001』では藤原宮期の丸瓦・平瓦の存在を報告している。このほかに、大脇潔が、吉備池廃寺で採集した平瓦をA～C類に分類している。大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註1)、註22。本書の分類との対応は、大脇A=平瓦2類B、大脇B=平瓦2類C、大脇C=平瓦1類・2類A、となるだろう。
- 20) 伊藤敬太郎は、平瓦をI群とII群に分けた。伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6)。それぞれ、本書の1類と2類に対応する。
- 21) 本薬師寺の裳階用小型平瓦は、全長28.9cm、狭端幅19.8cm、広端幅23.3cm（いずれも平均値、『年報 1997-II』35頁）。また、木之本廃寺からは、完形に近い平瓦2類Bが出土しており、全長40cm、広端幅30cm以上、重量約4kgある（伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6)）。
- 22) 前掲註15) 参照。

2 土 器 類

土器類は、奈文研による調査で整理用木箱（内法72×45×12cm）65箱分が出土し、桜井市の調査ではコンテナ17箱分が出土した。その多くは、包含層や時期の新しい遺構からの出土である。ここでは、柱穴や整地土など、吉備池廃寺の創建や廃絶に関して重要な意味をもつものを中心に報告する。可能なかぎり図示したが、小片が多く良好な資料が少ないので、図化できない場合も、器種を判定しうるものは本文に列記した。また、包含層、耕作にともなう小溝、中近世以後の小穴などから出土した土器のうち、図化できる古代の遺物も掲載した。

土器の器形や調整方法の名称、年代観などは、従来の奈文研刊行物に従う。口径などは、口縁部が1/6以上残るものにかぎり記述した。

また、埴輪は吉備池廃寺以前の遺物であるが、調査区のほぼ全域から出土しており、近隣にこれまで古墳の存在が知られていないことから、紹介することとした。

A 土 器 (Fig.87~96, PL.51・52)

i 金堂SB100とその周辺 (Fig.87)

掘込地業 SX101出土土器 金堂基壇の版築土および掘込地業SX101出土の土器には、土師器杯H・甕、須恵器壺・甕などがある。土師器杯Hは、図化できないが、比較的深い器形である。遺物は古墳時代から7世紀代までのものに限られるものの、詳細な時期決定は難しい。

基壇外周溝 SD104・105・250出土土器 金堂基壇の外周をめぐる溝のうち、西辺のSD104からは、土師器の杯C・甕C、須恵器の杯H身・壺・甕などが出土した。土師器杯Cは底部外面不調整、内面にまばらな放射暗文を施す。比較的深い器形で7世紀前半のものである。他はいずれも小片ばかりで時期決定は難しいが、7世紀後半以後に属するとみられる遺物はない。³⁾北辺のSD105からは、土師器杯C・甕・^{かまど}竈、須恵器甕・^{はそう}甗などが出土した。甗(1)は口縁部の破片で、口径11.6cm。飛鳥Iであろう。色調は青灰色～黒灰色。胎土には砂粒を多く含む。東辺のSD250からは、土師器杯C・杯H・竈、須恵器杯H身などが出土した。

掘込地業の排水溝 SD102出土土器 掘込地業SX101の排水溝SD102の埋土からは、7世紀前半の土師器杯CIが出土したが、図示できない。底部の破片で、外面にヘラケズリ、内面に放射暗文を施す。

SX103出土土器 金堂東側の砂利敷SX103からは、土師器の杯C・甕、須恵器の杯H・有蓋高杯・鉢・甕などが出土した。須恵器長脚有蓋高杯(2)は杯部の破片で、色調は青灰色、胎土は精良。飛鳥Iに比定できる。雷丘北方遺跡SD3580などに類例がある。⁴⁾

SA251・252出土土器 金堂基壇外周の溝SD105・SD250と並走する柱列。遺物は僅少であるが、SA251から土師器甕、SA252から7世紀代の土師器杯C・甕が出土した。

SB106~109出土土器 金堂基壇周囲で検出した掘立柱穴である。SB106・SB108の柱穴には7世紀代の資料しか含まれず、SB106の柱穴から土師器の杯C・甕、須恵器杯G蓋が出土した。また、SB108の抜取穴からは土師器杯CⅡ(3)が出土した。口径12.0cm、器高4.4cm、b₁手法。内面は1段放射暗文。赤褐色の胎土である。飛鳥Iの新しい段階であろう。SB107・109の柱穴からは遺物が出土しなかった。

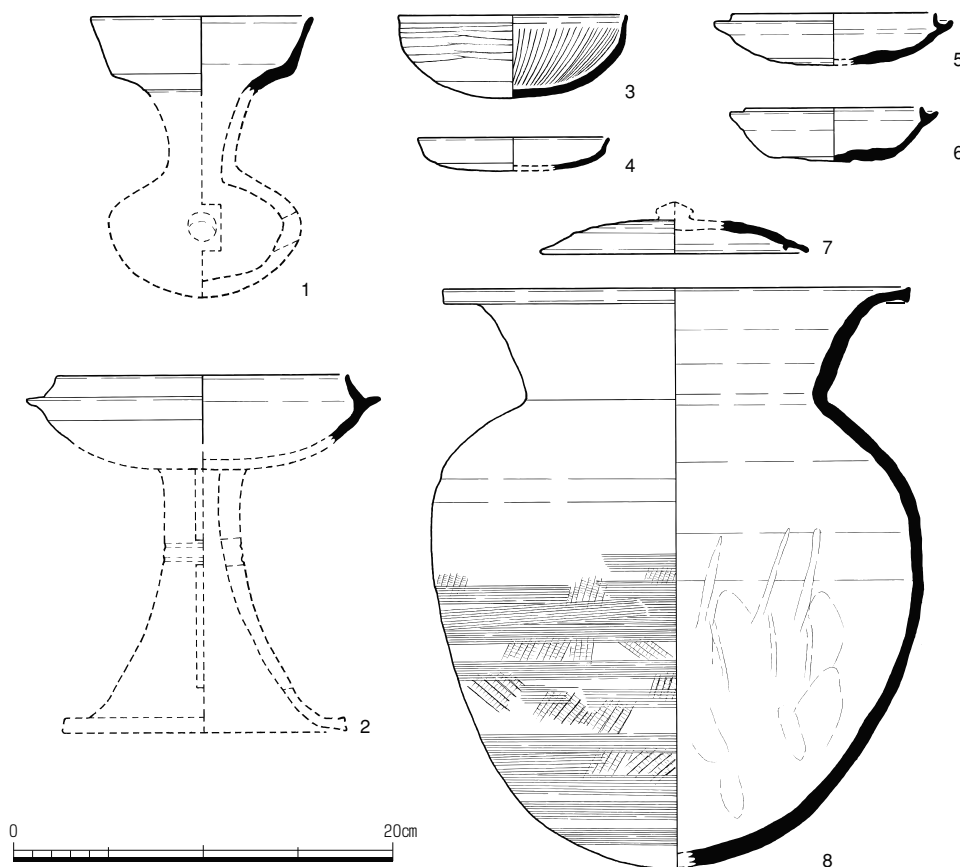


Fig. 87 金堂・塔周辺出土土器 1:4

吉備池堤防出土土器 第81-14次調査・第89次調査ともに、吉備池堤防の築堤土から雑多な土器片が出土した。埴輪など古墳時代の遺物、7世紀代の土師器や須恵器、黑色土器、中世の瓦器、近世の陶器碗などがある。

その他 (4~6) 金堂周辺の包含層などから出土した土器のうち、土師器の皿A (4) は口径10.0 cm、 a_0 手法。須恵器の杯H身 (5・6) は、ともに底部外面ヘラキリ、色調は灰色で、精良な胎土をもつ。5はかえり径9.2cm、外径11.0cm、器高2.9cm。6はかえり径10.8cm、外径12.6cm、器高2.7cm。SA110・SB111の柱穴には土器が含まれていなかった。

ii 塔SB150とその周辺 (Fig. 87, PL. 51)

SX151出土土器 (7・8) 塔心礎抜取穴SX151からは、土師器杯C・甕、須恵器杯G蓋・杯B蓋・甕などが出土した。須恵器は7世紀後半のものとみてよい。杯B蓋 (7) は内面に小さいかえりがある。頂部外面はロクロケズリ。かえり径11.7cm、口径14.2cm。青灰色を呈し、1~3 mmの砂を多く含む。甕A (8) は口径24.8cm、復元高30.6cm。口縁端部は上下に肥厚して、端部に面をもつ。体部外面の下半は叩きののちカキ目、底部は叩きののちナデ。内面は体部中位に縦方向のナデ、上部から口縁部はロクロナデとする。淡青灰色を呈し、1~2 mmの砂粒を多く含む。このほか、SX151からは別個体の甕体部片も出土した。

その他 塔基壇の表土・攪乱土から、土師器杯C・甕、須恵器杯H・壺・甕などの古代の土器片とともに、埴輪、瓦器碗小片などが出土した。また、基壇版築土には土師器と須恵器蓋・甕が含まれるが、いずれも細片である。基壇南方の小石敷SX155にともなう土器はなかった。

iii 中門SB320とその周辺

中門雨落溝 SD321・322出土土器 第111次調査南区で検出した中門SB320にともなう雨落溝である。基壇南側のSD321からは、土師器皿・甕、須恵器杯などの小片が出土した。また、基壇北側のSD322からは、土師器の甕、須恵器の壺などが出土したが、いずれも図化しがたい。

その他 第111次調査南区の土坑SK326には須恵器甕、SK327には土師器の小片があるのみで、時期比定などは困難である。井戸SE330からは、土師器杯A・甕、須恵器杯H身・飛鳥Vの杯B蓋・甕が出土した。掘立柱東西堀SA325では遺物は出土していない。

iv 南面回廊SC160とその周辺 (Fig. 88, PL. 52)

回廊雨落溝 SD161・SD162出土土器 南面回廊SC160の南雨落溝SD161の埋土からは、土師器の甕C、須恵器の杯H身・杯G蓋・壺などが出土した。いずれも小片である。北雨落溝の石組抜取溝SD162からは、土師器の杯C・蓋・鉢・甕、須恵器の壺・甕などが出土した。土師器甕は、口縁部の形態からみて飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

SD180上層 SD180出土土器 (11～18) 第95次調査南区と第111次調査南区で検出した素掘りの東西溝。
第95次調査では、上層の埋め立て土から、土師器の杯B・甕・竈、須恵器の杯H身・杯B蓋・壺・甕などが出土した。土師器杯Bには、形態からみて7世紀後半、同じく甕は、口縁部形態から飛鳥Ⅳ～Ⅴ、須恵器杯B蓋には飛鳥Ⅴのものがある。須恵器甕(17)は口径20.2cm、体部外面は叩きのちロクロナデ、内面は同心円当て具痕の上をナデ。

SD180中層 また、中層からは、土師器杯CⅢ・杯H・高杯C・甕A、須恵器碗B・鉢・壺・平瓶・甕などが出土した。土師器杯CⅢ(11)は口径11.4cm、a₀手法。色調は明橙褐色、飛鳥Ⅳとみられる。土師器甕(13)は口径14.4cm、色調は暗褐色～明褐色。同じく甕A(14)は口径26.4cm、底部を欠くが器高約30cm。口縁端部は上下にやや肥厚し、角張った形態である。色調は橙褐色、胎土には砂粒を多く含む。須恵器平瓶(15)は体部の破片。まるみを帯びた体部で、上面に沈線を1条施す。体部下半は斜格子叩きとし、底部外面はナデ、体部上半はケズリのちロクロナデで調整し、肩部より上位の体部上面および体部内面はロクロナデである。

SD180下層 下層からは、土師器杯CI、須恵器甕、弥生土器片が出土した。杯CI(12)は飛鳥Ⅲ～Ⅳで、内面に1段放射暗文、見込に螺旋暗文を施す。明灰褐色、胎土精良。

一方、第111次調査では、土師器の杯C・碗・甕・甗^{こしき}、須恵器の杯B蓋・高杯C・平瓶・壺・短頸壺・甕などが出土した。須恵器杯B蓋は飛鳥Ⅴのもの。平瓶(16)は頸部中位に2条の沈線をめぐらせる。肩は稜を持って屈曲し、沈線を1条施す。口縁部径13.8cm。色調は灰色で、精良な胎土だが、焼成はやや軟質。須恵器甕A(18)は、口径63.8cmに復元される大型のもの。口縁部上半の外面には、2条1組の沈線と櫛描波状文による2段構成の文様帯がある。口縁端部は上下に拡張して幅広い端面をつくり出し、外面下端に沈線が1条めぐる。色調は明灰色で、胎土には1～5mmほどの砂礫を少量含む。

SK187～189出土土器 第95次調査南区で検出した浅い土坑SK187～189のうち、SK187は土器が出土していない。SK188では飛鳥Ⅳ～Ⅴの須恵器杯B蓋が出土した。また、SK189からは、土師器の杯A・杯BI、須恵器の杯BI・Ⅲなどが出土した。土師器、須恵器ともに、形態の特徴から飛鳥Ⅴに比定できるものを含んでいる。土師器杯BI(9)は口径21.2cm。口縁部外面はミガキ、内面は2段放射暗文と見込に螺旋暗文を施す。色調は赤褐色～明褐色を呈し、胎土

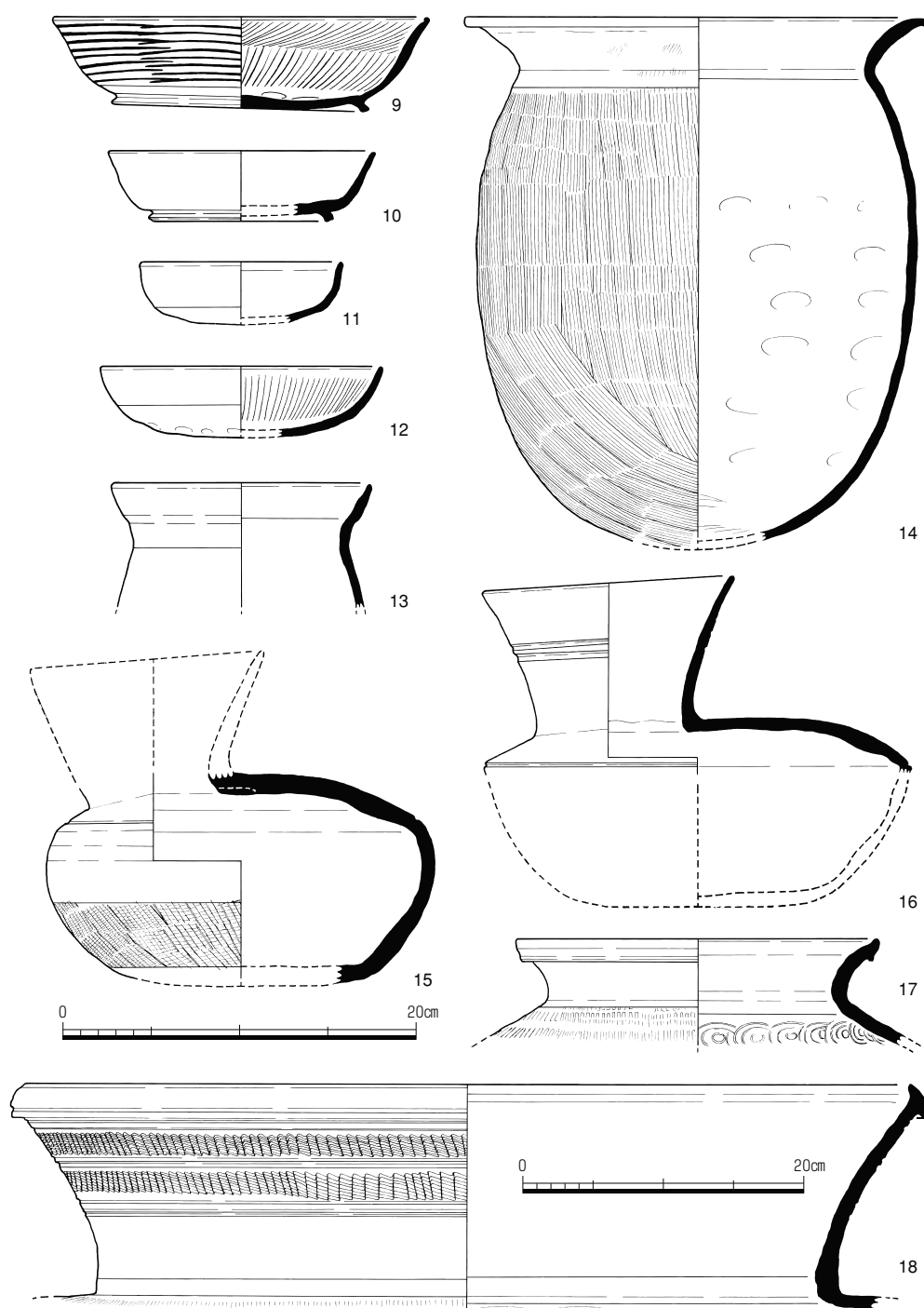


Fig. 88 南面回廊周辺出土土器 1:4 (18のみ 1:5)

は精良。須恵器杯BⅢ (10) は明灰色の色調で、胎土には1 mmほどの砂粒を比較的多く含む。口径15.0cm、器高4.0cm。ほかに、胎土・色調はほぼ同様の、10とよく似た個体があり、口径14.8cm、器高4.0cmである。

その他 第95次調査南区で検出した掘立柱建物SB190の柱穴からは、飛鳥Ⅰとみられる土師器杯CIと、土師器甕の破片が出土した。また、SK193では土師器の甕、弥生土器片とともに、摩滅した瓦器の小片が出土している。南区の中央部にある吉備池廃寺創建以前の土坑SK186には、布留式の壺・甕、須恵器甕の破片が含まれていた。

SX183・SX185・SX324からは土器が出土しなかった。また、掘立柱の東西塀SA181、SA182にも土器はみられない。一方、包含層からは雑多な土器類が出土しているが、そのうち須恵器杯BⅢには、胎土などがSK189出土品と共通する個体がある。

v 西面回廊SC200とその周辺 (Fig. 89, PL. 52)

SD219出土土器 (19～21) 第95次調査西区中央のトレンチにある素掘りの東西溝。遺物は土師器が少量出土したにとどまる。皿A (21) は口径14.0cm。口縁部をヨコナデ、体部下半はナデで調整する。内面は風化により調整不明。色調は黄褐色で、胎土に砂粒を多く含む。小型壺は2個体あり (19・20)、19は口径7.0cm、器高4.6cmの完形品。体部外面は全面ナデ、内面もナデで調整し、口縁部はヨコナデ。短い口縁部は外反し、肥厚ぎみのまるい端部をもつ。明黄褐色で砂粒を多く含む粗い胎土。20もほぼ同様である。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属すると思われる。

SD226出土土器 第95次調査西区中央のトレンチから西方へ続く素掘りの東西溝。土師器の鉢・甕、須恵器杯H・杯B・壺・甕などの破片が出土した。須恵器杯BⅢ (22) は口径16.2cm、器高3.7cmをはかる。色調は灰色で、砂粒を含む胎土をもつ。飛鳥Ⅴであろう。このほか、弥生土器の壺も出土している。

SD240出土土器 第95次調査西南区で検出した素掘りの東西溝。土師器の杯・甕、須恵器の甕などがある。土師器甕は口縁端部に面をもつ形態で、飛鳥Ⅴに比定できる。

その他 第95次調査西区中央のトレンチでは、素掘溝SD225の下層から、飛鳥Ⅰの須恵器杯H身と弥生土器の壺片が出土した。同じトレンチの土坑SK216～218のうち、SK216からは7世紀代の土師器杯Cと7世紀前半とみられる土師器甕が出土し、SK217では弥生土器とおぼしき甕片がみつかった。また、近世の井戸SE220には、土師器の甕と須恵器の小片がわずかに含まれていた。西区東側のトレンチの掘立柱南北塀SA204からは、土師器甕の破片が1点出土したにとどまり、年代の詳細は決めがたい。

なお、第95次調査西区の以下の遺構は、土器を包含していなかった。西面回廊SC200にともなう雨落溝の石組採取溝SD201、土質の差SX203、石の採取痕跡SX202、斜行溝SD210・215、土坑SK218・221、東西塀SA227。また、第95次調査西南区の東西塀SA241、土坑SK242からも土器は出土していない。

vi 東面回廊SC300とその周辺 (Fig. 90, PL. 51)

SC300整地土出土土器 (23～28・31～38) 東面回廊SC300にともなう橙黄色粘質土混じりの褐色～黄灰色粘質土層は、吉備池廃寺創建期の整地土である。この中から、土師器の杯C・杯G・杯H・高杯C・高杯H・甕、須恵器杯H・蓋・高杯・甕などが出土した。土師器杯H (23・24) は明褐色の胎土に比較的砂粒を含む。皿H (25) も同様。高杯C (32) は口縁端部に内傾面をもち、杯部内面は1段放射暗文。口縁部はヨコナデ、杯底部外面には指の圧痕が残る。

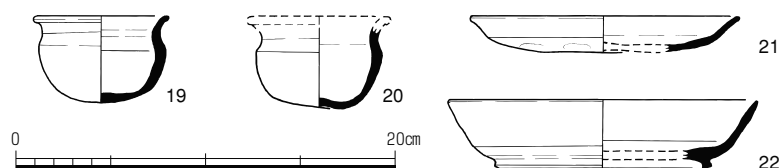


Fig. 89 西面回廊周辺出土土器 1:4

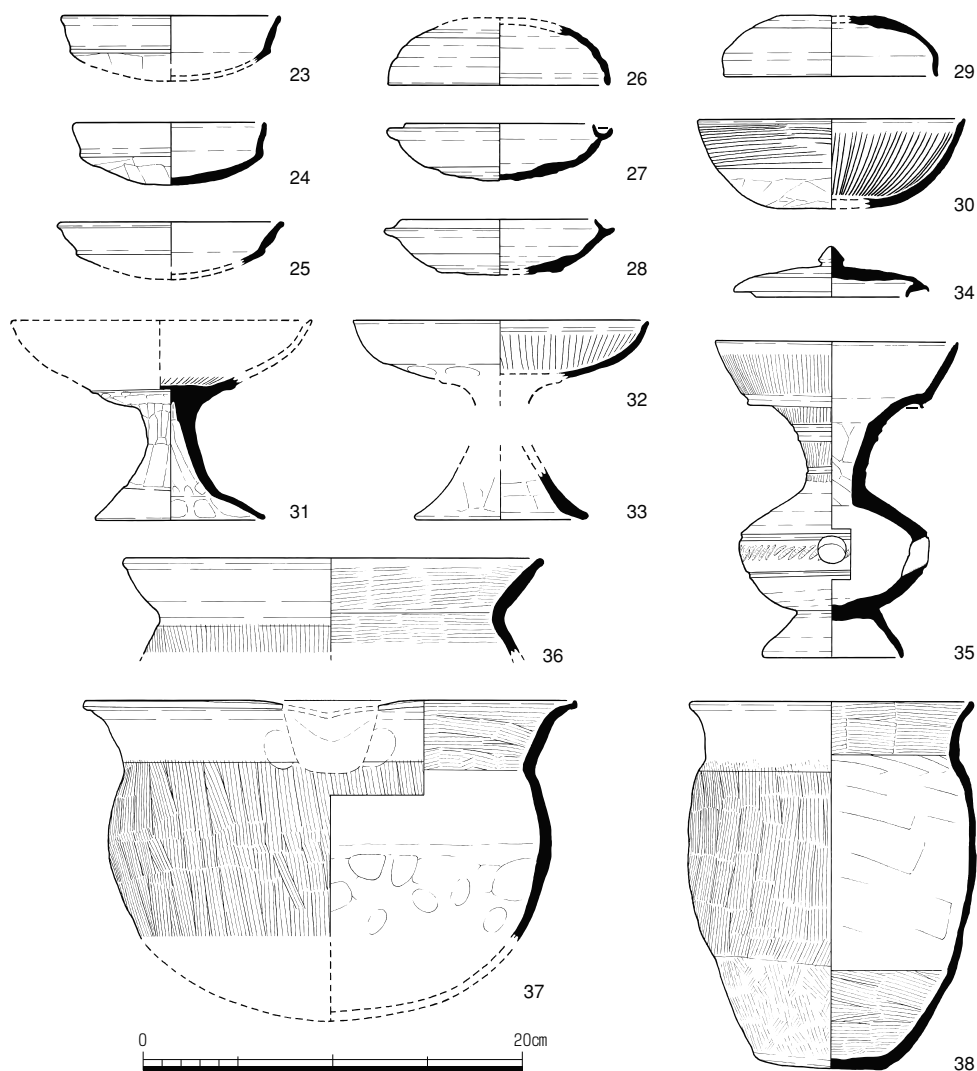


Fig. 90 東面回廊周辺出土土器 1:4

高杯C (31) にも、同様の放射暗文と見込の螺旋暗文がある。杯部下面の接合部は、凸帯状の段差をなす。脚部外面は縦方向のナデ、内面は絞り痕が明瞭である。脚端部は外面ヨコナデ、内面には強い指の圧痕が残る。明橙褐色で精良な胎土。31・32と類似した高杯Cは、飛鳥Iの新しい段階⁵⁾に位置づけられる飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などから出土している。高杯H (33) は脚端部の破片で、端部はヨコナデするが、脚部外面は面取りのヘラケズリ、内面も横方向のヘラケズリとする。色調は橙褐色で、胎土は精良。土師器片口鍋 (37) は口径26.0cm。体部内面には無文当て具痕とナデがみられる。口縁端部はナデにより上方へ肥厚する。片口の両側にオサエの痕跡が残る。胎土は明褐色。土師器甕 (36) は口径22.0cm。黄褐色で、砂粒を含む粗い胎土である。同じく甕A (38) は、底部および体部下半を先に成形し、上半部を継ぎ足していることが明瞭である。下半は内外面をハケ、底部内面をナデで仕上げる。接合痕より上位の内面は横方向の板ナデ。口縁部はわずかに外反し、まるい端部をもつ。色調は灰褐色で、微細な砂粒を多く含む。器形や調整に特徴があり、畿内産の土器ではなかろう。平底の甕は、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などに例がある。

飛鳥Iの
新しい段階

須恵器蓋 (34) は、かえり径8.0cm、口径10.3cm、器高2.7cm。宝珠形のつまみがつく。口縁を

受ける部分は外傾する面をなし、杯類ではなく、壺などの蓋であろう。色調は暗灰色で、上面は自然釉が一方へ流れている。杯H身（27・28）は低いかえりをもち、底部外面はヘラキリ。27は外面灰色、断面が赤灰色を呈し、胎土は精良。28は暗灰色で白色の微粒子を含む。杯H蓋（26）は28と似た胎土で、頂部外面ロクロケズリ、口縁部内側がナデにより凹線状をなす。端部はやや摩耗している。甕（35）は高台付きのもの。口縁端部を欠くが、口径13cm、器高16.5cmほど。頸部から体部の内面に漆が付着している。灰色で精良な胎土。

これらの土器群は、山田寺下層のSD619および整地土⁷⁾、甘樫丘東麓の焼土層SX037⁸⁾、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などに近似した内容といえる。

回廊雨落溝
石組抜取溝

SD305出土土器（29・30） 東面回廊SC300の雨落溝の石組抜取溝SD305からは、土師器の杯C・杯G・甕、須恵器の杯H蓋・杯G蓋・甕などが出土した。7世紀前半とみてよい。土師器杯C（30）は、口径14.0cm、器高4.7cm、b₁手法。内面は1段放射暗文。色調は外面橙色、内面明橙褐色で精良な胎土をもつ。須恵器杯H蓋（29）は、頂部外面をヘラケズリしている。

SD306・307出土土器 第105次調査東区で検出した吉備池廃寺廃絶後の溝で、12～13世紀頃に埋まったものとみられる。土師器には、7世紀後半の杯A、奈良時代後半～平安時代の甕、9～10世紀の杯などがあり、須恵器には、飛鳥Vの杯B蓋、奈良時代前半の須恵器杯Bがある。ほかに、奈良時代の土馬や製塩土器の破片、9～10世紀の黒色土器A類碗・B類碗、緑釉陶器の皿、灰釉陶器の壺、12世紀末～13世紀初めの瓦器碗、円板など、雑多な遺物が出土した。

SE311～313出土土器 いずれも第105次調査東区で検出した井戸。SE311からは12～13世紀の瓦器碗など、SE312からは9世紀の土師器杯や11世紀の瓦器碗などが出土し、SE313には10～11世紀の黒色土器A類碗などが含まれていた。

vii 僧房とその周辺（Fig.91～94・96, PL.51・52）

創建期整地

灰色～灰黒色粘質土層出土土器（Fig.91-39・40） 第105次調査池内調査区の灰色～灰黒色粘質土層は飛鳥Iの土器を含み、吉備池廃寺創建にともなう整地と考えられる。土師器の杯CⅢ・高杯C・甕、須恵器の杯H身・高杯・甕・漆の付着した甕などが出土した。土師器甕Bの把手は挿入式である。土師器高杯C（40）は口径16.9cm、器高12.2cmをはかり、脚端部径は10.5cmである。口縁部はヨコナデし、内面に粗い1段放射暗文を施す。外面のミガキは施していない。杯部下半の外面はオサエとナデ。杯部の成形は2段構成で、下面の接合部に凸帯状の段差がある。脚部はナデで整え、内面には絞り痕がみられる。屈曲して開く端部は外面ヨコナデ、内面に指の圧痕が残る。明橙褐色で胎土は精良、脚端部に黒斑がある。飛鳥Iの新しい段階に比定され、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などに類例がある。ほかに、時代が遡る遺物として、TK47型式の須恵器杯H身（39）、埴輪などが含まれている。

飛鳥Iの
新しい段階

僧房の土器

SB340出土土器（Fig.92-50・51） SB340は、第111次調査北区で検出した掘立柱の僧房である。土器の大半は小片だが、柱掘形から土師器杯C・杯H・甕、須恵器杯H身・甕などが出土し、抜取穴からは土師器杯A・甕、須恵器杯H身・杯G蓋・高杯・甕などが出土した。抜取穴出土の土師器杯Aには、口縁端部の形状から飛鳥Ⅳ～Ⅴとみられる破片がある。南側柱列東から2基めの柱掘形出土の土師器杯GⅡ（51）は、口径12.0cm、器高3.7cm。いびつな口縁部をもち、暗褐色で精良な胎土に雲母を多く含む。須恵器杯H蓋（50）は、南側柱列東から8基めの柱穴の抜取穴から出土した。口径12.2cm、器高3.0cm。頂部外面はヘラキリのまま。このほか、

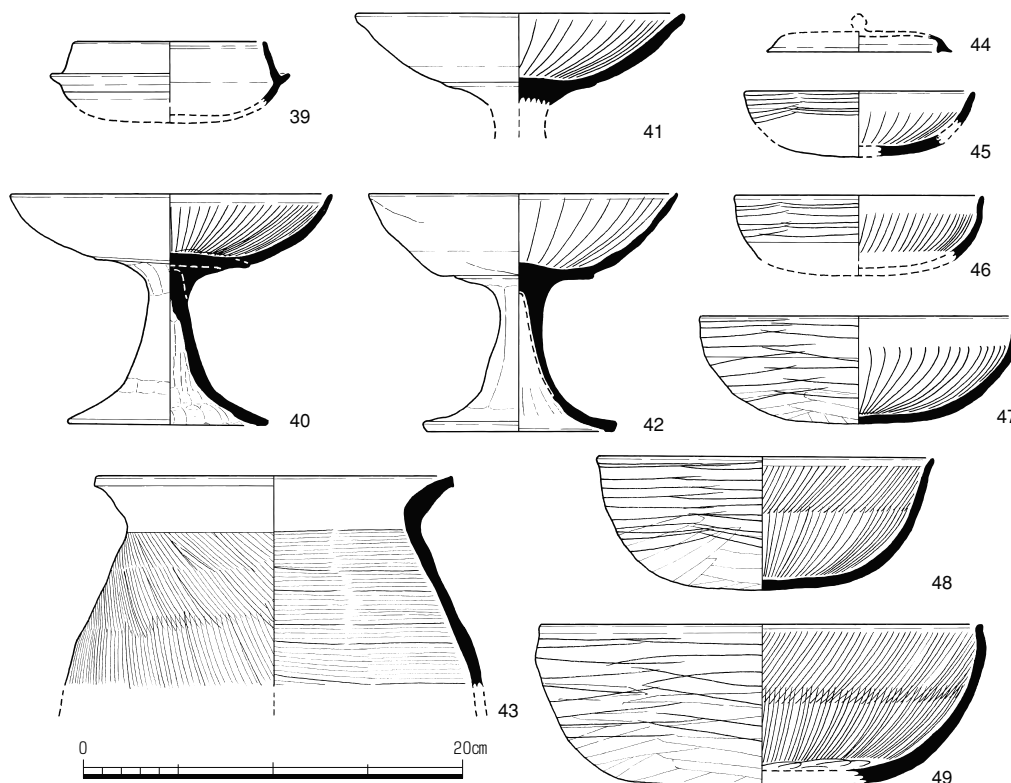


Fig. 91 僧房周辺整地土等出土土器 1:4

SB340の西雨落溝SD343から、円面硯の脚部片 (Fig. 96-127) が出土している。

SB340東方の整地土出土土器 (Fig. 91-41~43) SB340の東にある整地土のなかには、数カ所の焼土溜があり、そこから、焼土とともに、飛鳥Ⅰに属する土師器の高杯C、甕などが出土した。高杯C (42) は口径16.2cm、器高12.6cm、脚端部径10.0cm。杯部は内面に粗い1段放射暗文を施している。杯部の成形は2段構成になっており、下面の接合部には凸帯状の段差がある。脚部は縦方向のナデ、端部は外面ヨコナデ。色調は明褐色で、胎土に少量の砂を含む。42は深い杯部をもつが、これと比較的類似した深い器形が、飛鳥Ⅰの古い段階とされる川原寺下層SD02にある。高杯C (41) は口径17.2cmで、42より浅い杯部に復元される。杯部下面に接合部の段差がある。色調は明黄褐色を呈し、外面に黒斑をもつ。41は、第105次調査池内調査区出土の高杯C (40) および東面回廊SC300整地土出土の高杯C (31・32) と同様に、山田寺下層整地土、甘樫丘東麓SX037、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層など、飛鳥Ⅰの新しい段階の例と似ている。川原寺下層SD02出土品にも41のような浅い器形はあるが、口縁部外面にミガキを施す点が、41などの吉備池廃寺出土例と異なる。山田寺下層整地土・飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層のものにもミガキはない。土師器甕 (43) は口径18.7cm、なで肩の体部をもち、口縁端部はナデにより四角く成形する。色調は明褐色、粗い胎土で1~5mmほどの砂礫を多く含む。

焼土溜

飛鳥Ⅰの新しい段階

SB400出土土器 (Fig. 92-52~60) SB400は桜井市第9次調査で検出した僧房である。柱掘形には飛鳥Ⅰの土器が含まれ、抜取穴にはそれに加えて飛鳥Ⅳ~Ⅴの土器がある。

僧房の土器

柱掘形からは、土師器の杯C・甕B、須恵器の杯H・杯G・高杯・提瓶・甕などが出土した。土師器甕Bの把手は挿入式。須恵器杯H身 (52・53) のうち、52はかえり径10.1cm、外径12.2cm。底部外面はロクロケズリを施す。青灰色で胎土に砂粒を少量含む。53はかえり径10.2cm、

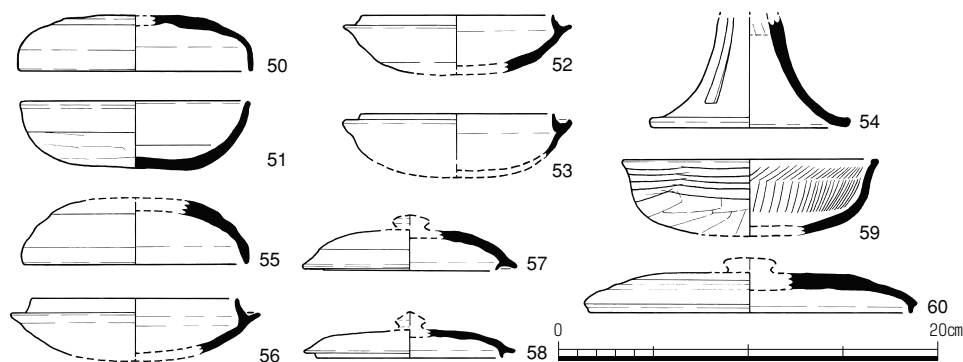


Fig. 92 僧房柱穴出土土器 1:4

外径12.2cm。色調は青灰色。須恵器高杯（54）は脚部の破片で、端部径10.6cm。三方に長方形の透かしが入る。色調は灰色～黒灰色、胎土精良。

抜取穴からは、土師器の杯A・杯C・杯H・甕、須恵器の杯H・杯G・杯B・高杯・碗・壺・甕などが出土した。土師器甕Bの把手には、挿入式のものがある。土師器杯AⅢ（59）は口径13.4cm。器表面は風化しているが、 b_1 手法であろう。内面には2段放射暗文を施している。口縁端部は小さく内側に巻き込む。須恵器杯H身（56）はかえり径10.8cm、外径13.2cm。底部外面はロクロケズリで調整する。色調は灰色である。須恵器杯H蓋（55）はまるい形態で、頂部外面ロクロケズリ、青灰色で胎土は精良。須恵器杯G蓋（57・58）のうち、57は小さなかえりをもち、かえり径9.1cm、口径11.4cm。色調は灰色、胎土には砂粒を含む。58は、小さいが口縁端部より突出するかえりをもつ。暗灰色の精良な胎土で、上面に灰をかぶる。須恵器杯B蓋（60）は、端部を小さく折り返す形態である。頂部外面はロクロケズリ。色調は灰白色を呈し、胎土は精良だが、焼成は不充分で軟質。

飛鳥Ⅰまで
を含む整地

SB400東方の整地土出土土器 SB400東端の柱穴に先立つ整地土は、古墳時代から飛鳥Ⅰまでの土器を含んでいたが、いずれも図示しがたい。土師器には、杯C・杯H、接合部が凸帯状を呈する高杯C・甕Bなどがあり、須恵器には、古墳時代の杯H蓋、飛鳥Ⅰの杯H身、壺・甕などがみられる。

SB260出土土器 僧房SB260の柱穴からは土師器杯Cなどの細片がわずかに出土した。

創建期土坑

SK261出土土器 (Fig. 91-44~49) 第105次調査中央区で検出した吉備池廃寺創建期の土坑である。土師器杯C・杯A・鉢、須恵器杯G蓋などが出土した。

土師器の杯CⅡ（45）は内面に1段放射暗文、外面は横方向のミガキを施し、底部外面はナデ。橙褐色で精良な胎土。46もほぼ同様に、褐色を呈する。杯CI（47）は口径16.7cm、器高5.7cm、 b_1 手法。内面に上端がわずかに左へまがる1段放射暗文を施す。底部外面はケズリで、4分割とみられる。色調は褐色、胎土精良。杯A（48）はやや歪むが、口径約18cm、器高7.1cm、 b_1 手法。口縁端部は外反し、内側に内傾面をもつ。底部外面は中央を1方向、周縁を4分割のケズリで調整する。内面は2段放射暗文、口縁部外面は横方向のミガキを施す。色調、胎土は47と同様。鉢（49）の口縁はやや歪むが、口径23.4cm、器高8.5cm、 b_1 手法。底部外面はケズリ。内面に2段放射暗文を施す。色調や胎土は47と同様。須恵器杯G蓋（44）は口縁部破片だが、幅広の平らな受け部をもつ。明灰色で、胎土にはわずかに砂粒が入る。

数点の資料で先後関係を検討する無理を承知のうえで、これらを飛鳥Ⅰの新しい段階に属す

るとされている山田寺下層のSD619・整地土、甘樫丘東麓の焼土層SX037、飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層、雷丘北方遺跡のSD3580、飛鳥Ⅱの基準資料である坂田寺のSG100¹²⁾から出土した土器と比較してみよう（以下、遺跡名で略称する）。

SK261の
位置づけ

まず目につくのが鉢（49）で、やや浅く平底気味の器形は、山田寺下層や甘樫丘の例が大きく開く口縁部をもつとは異なり、飛鳥Ⅲ～Ⅳのものにも似る。しかし、全形が判明する鉢の資料は少なく、坂田寺にも底部形状が判明する個体はないことから、飛鳥Ⅰの新しい段階から飛鳥Ⅱの古い段階の頃にこのような形状の鉢がある可能性は充分考えられる。次に、これまで主に検討対象にされてきた杯類についてみると、土師器杯CI（47）は口径・器高とも山田寺下層と坂田寺の中間に位置し、飛鳥池にはほぼ同じものがある。杯Cの径高指数の平均は、山田寺下層が36.0、甘樫丘が35.7、飛鳥池は34.2。雷丘北方には浅いものと深いものがあり、杯CIの深いものに限れば34.0。飛鳥Ⅱの坂田寺は33.3。これらに対して、本例（47）は径高指数34である。したがって、径高指数だけをみれば、山田寺下層・甘樫丘よりやや新しく、坂田寺よりやや古い様相ということができ、飛鳥池と同じ頃の飛鳥Ⅰの新しい段階に比定される。杯CII（45・46）も、残存率が低く参考程度だが、同様な位置づけが可能である。

以上、SK261出土土器は、飛鳥Ⅰでも新しい段階として捉えることが可能であり、飛鳥Ⅰと飛鳥Ⅱの中間的な様相をもつといえよう。しかしながら、資料数自体が少なく、土師器・須恵器の各器種を総合的に比較検討することができないので、あくまで杯Cの径高指数による位置づけにすぎないことを断わっておく。

飛鳥Ⅰの
新しい段階

明茶色粘質土出土土器 第111次調査北区で確認した明茶色粘質土の整地土には、奈良時代とみられる土師器杯C・皿Aなどの破片が含まれていた。

SD350出土土器 同じく第111次調査北区にある素掘りの東西溝。上層から土師器杯A・杯C・甕、須恵器杯蓋・平瓶・短頸壺・甕などが出土した。土師器甕Bの把手には、挿入式と、貼付式で薄手幅広の奈良時代のものとがある。土師器杯Aには、口縁端部をまるく巻き込む平城Ⅲの頃のものが含まれている。また、下層の堆積土からは、土師器甕A、須恵器杯B・鉢などが出土した。土師器甕Aは、図化できないが、体部がやや寸詰まりな形態で、藤原宮期以後のものであろう。須恵器は小片のため、時期比定は難しい。

SB345～347出土土器 第111次調査北区で検出した掘立柱建物である。SB345の柱穴からは土師器杯・甕、須恵器甕が出土した。年代の詳細は決めがたいが、奈良時代までは下らないだろう。SB346柱掘形からは、土師器杯・甕、飛鳥Vとみられる須恵器杯B蓋が出土し、抜取穴には土師器杯・甕と飛鳥Vの須恵器杯B・甕などがある。SB347では土器が出土しなかった。

飛鳥Ⅴ

SE355・356・360出土土器 第111次調査北区の井戸SE355からは、平城Ⅲに比定できる土師器杯Aなどが出土した。また、SE356には奈良時代の土器片、10世紀の土師器杯、羽釜がある。SE360では、土師器の杯・甕、須恵器の杯A・甕などのほか、須恵器杯B（Fig.93-63）が出土している。口径10.7cm、器高3.7cm。底部外面ヘラキリ。

SA401出土土器（Fig.93-61・62）桜井市第9次調査で検出した僧房SB400の東にある掘立柱南北塀。柱穴から、土師器の杯C・杯H・皿・甕、須恵器の杯H身・杯G蓋・甕などが出土した。土師器杯H（61）は、底部ケズリ、口縁部ヨコナデである。土師器甕は、端部をまるくおさめる個体のほかに、口縁部の形態から藤原宮期とみなされる甕も出土した。須恵器杯H身

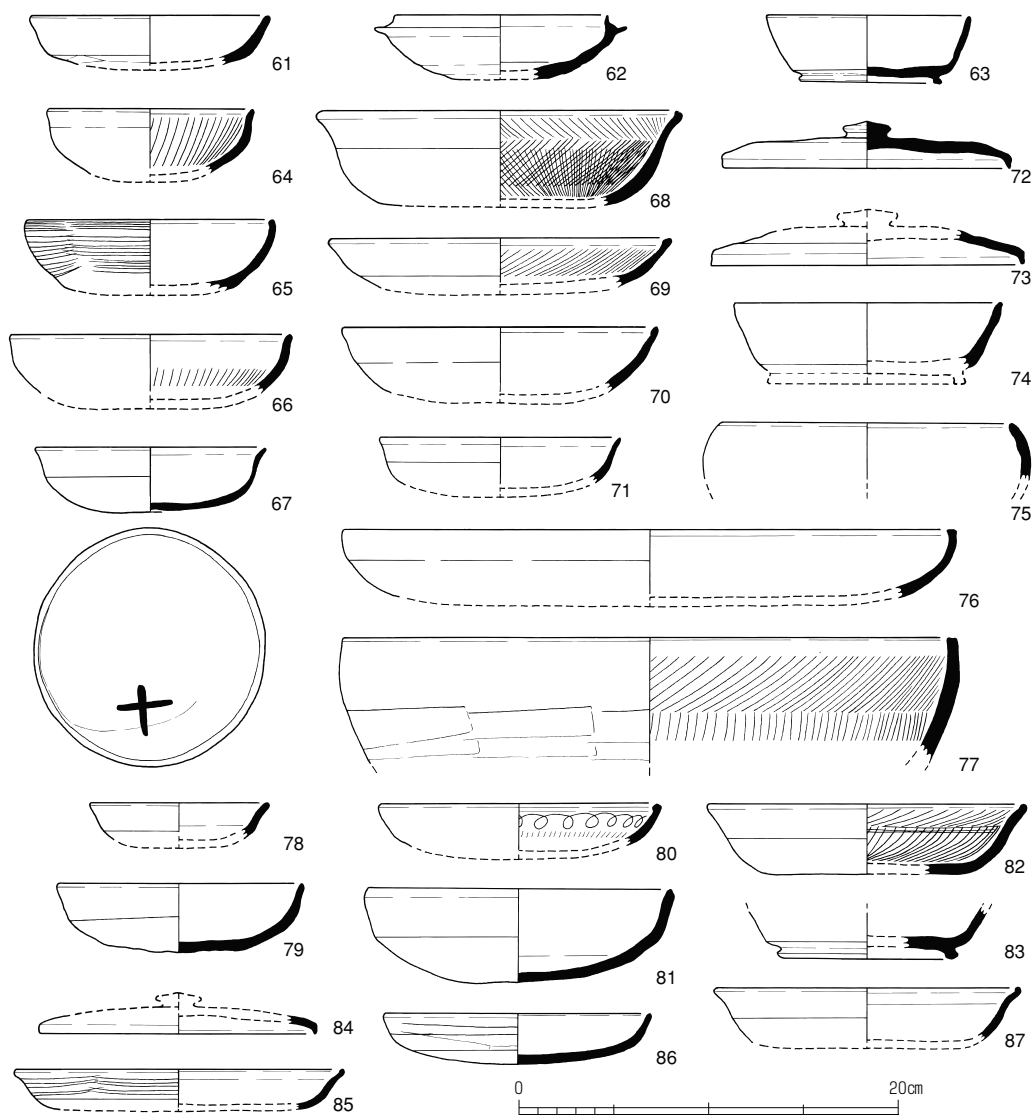


Fig. 93 僧房周辺遺構出土土器 1:4

(62) は、かえり径11.2cm、外径13.4cm。底部外面はヘラキリ、色調は明灰色。このほかにも、飛鳥Ⅰの須恵器杯H身がある。須恵器の杯G蓋は、図化しがたいが、頂部外面をロクロケズリ、口縁部を強くロクロナデする7世紀前半のものがある。

SD402出土土器 (Fig. 93-64~77) 僧房SB400に重複する素掘りの南北溝SD402では、遺物を上層と下層に区別して取り上げたが、どちらも飛鳥Ⅴに比定できる。

飛 鳥 Ⅴ

上層出土の土師器には、杯A・杯C・杯D・杯H・皿・高皿・鉢・甕・竈・盤など、須恵器には、杯H・杯B・高杯・甕などがある。土師器杯Aは、飛鳥Ⅳ～Ⅴの形態が多い。杯AI (68) はb₁手法で、内面の暗文は、通常の2段放射暗文に加えて、下段の放射暗文を二重に施している。橙褐色で精良な胎土である。杯D (65) は内彎ぎみで、内側に肥厚する口縁部の外面に横方向のミガキを施す。色調は橙色～黒褐色で、砂粒を含む。須恵器杯B蓋 (72・73) は、いずれもかえりがない。72は口径15.2cm、頂部に扁平な宝珠形つまみがある。色調は明灰色、胎土はやや砂粒を含み、上面に灰かぶりがある。同じく73は口径16.4cm、頂部外面はロクロケズリ。灰色で、胎土にはわずかに砂粒を含む。

下層には、土師器の杯A・杯C・皿A・高杯A・甕B・竈、須恵器の杯B・鉢・甕Aなどがある。土師器甕Bの把手は貼付式。土師器の杯AⅢ（71）は、口径12.6cm、e₀手法。明橙褐色で胎土は精良。杯CⅢ（64）は口径10.8cm、e₀手法。口縁端部は、強いナデにより外反気味につまみ出す。橙褐色で精良な胎土。杯CⅡ（66）は口縁端部に内傾面をもち、65と似た胎土である。杯G（67）は口径12.0cm、器高3.5cm。底部外面に「十」の墨書がある。色調は橙色、微細な砂粒を少量含む。皿A（69・70）はともに底部不調整。69は口径18.0cmで、口縁部上端が面をなす。70は、口縁端部が内側に小さく肥厚する。同じく皿A（76）は、口縁端部が内側に肥厚して、上面に平坦面をもつ。器表面は風化しているが、内面に1段放射暗文の痕跡がある。須恵器の杯BⅢ（74）は灰白色で胎土精良。杯B蓋には、かえりがない形態のものがある。鉢（77）は体部下半を横方向にケズリ、口縁部はヨコナデし、端部上面がわずかにくぼむ平坦面となる。内面は2段放射暗文。鉢（75）はまるい口縁端部をもつ。

SK404出土土器（Fig. 93-78～82） 僧房SB400の南側柱列に重複する長方形土坑。土師器は杯A・杯B・杯C・杯G・皿A・甕、須恵器は杯B蓋・甕などがある。土師器杯には飛鳥Ⅲ～Ⅳのものもあるが、全体としては飛鳥Ⅴに属するものが主体を占める。

飛鳥Ⅴ

土師器の杯AI（82）は口径16.6cm、器高3.7cm。底部外面は風化のため調整不明。内面は2段放射暗文。橙褐色を呈し、精良な胎土。杯CⅢ（78）は口径9.4cm。杯CⅡ（79・81）はともに底部外面不調整のe₀手法。79は口径12.8cm、器高3.7cm。褐色。81は口径12.8cm、器高3.7cm。風化のため暗文はみえない。黄褐色～橙褐色で砂粒を多く含む。皿A（80）は、口縁端部内側がまるく肥厚し、1段放射暗文と螺旋暗文を施す。色調・胎土は82などと共通。

SA405・406出土土器（Fig. 93-83～87） 桜井市第9次調査区の掘立柱塀である。ともに出土土器は飛鳥Ⅴといえるが、小片が大半で図化は難しい。SA405からは、土師器の杯A・杯C・高杯・甕B、須恵器の杯B（83）・鉢などが出土した。土師器杯Aは灯火の痕跡をもつ個体もある。土師器甕Bの把手は貼付式。SA406には、土師器の杯A・杯C・皿A・高杯・甕、須恵器の杯B蓋（84）・甕などがある。土師器杯AⅡ（87）は口縁端部を小さく巻き込む。表面風化のため暗文はみえない。橙褐色を呈する。皿A（85）はb₁手法とみられるが、表面風化のため詳細不明。色調は明橙褐色、胎土は精良である。皿A（86）は口径14.0cm、器高2.7cm、b₀手法。褐色で精良な胎土。

その他（Fig. 94） 第105次調査中央区にある溝SD266・267からは、14世紀の瓦器碗、14～15世紀の白磁碗などが出土した。同じ中央区の東西溝SD268では土器が出土しなかった。桜井市第9次調査で検出した東西溝SD403には、7世紀代の土師器、須恵器などがある。

このほか、僧房周辺の包含層などから、7世紀～8世紀をはじめとして、平安時代から中・近世あるいはそれ以降の土器が比較的多量に出土した。

包含層などのため、時期比定はしにくいだが、7世紀前半の遺物は次のようなものがある。土師器の高杯（98）は脚部片。ロクロ成形され、波状文を1条施す。長方形の透かしは三方に開く。色調は明橙褐色、胎土は精良。このような土師器は、山田道SD2320¹³⁾など、飛鳥Ⅰの土器にともなう例がある。須恵器杯H身は底部外面ヘラキリのもの（89）とロクロケズリのもの（91）がある。杯H蓋（88）は頂部外面ヘラキリ、杯G蓋（90）は頂部外面ロクロケズリ。碗A（92）は銅鍮を模した器形で、口縁部外面に2条の沈線があり、底部外面はロクロケズリで調整する。

7世紀前半

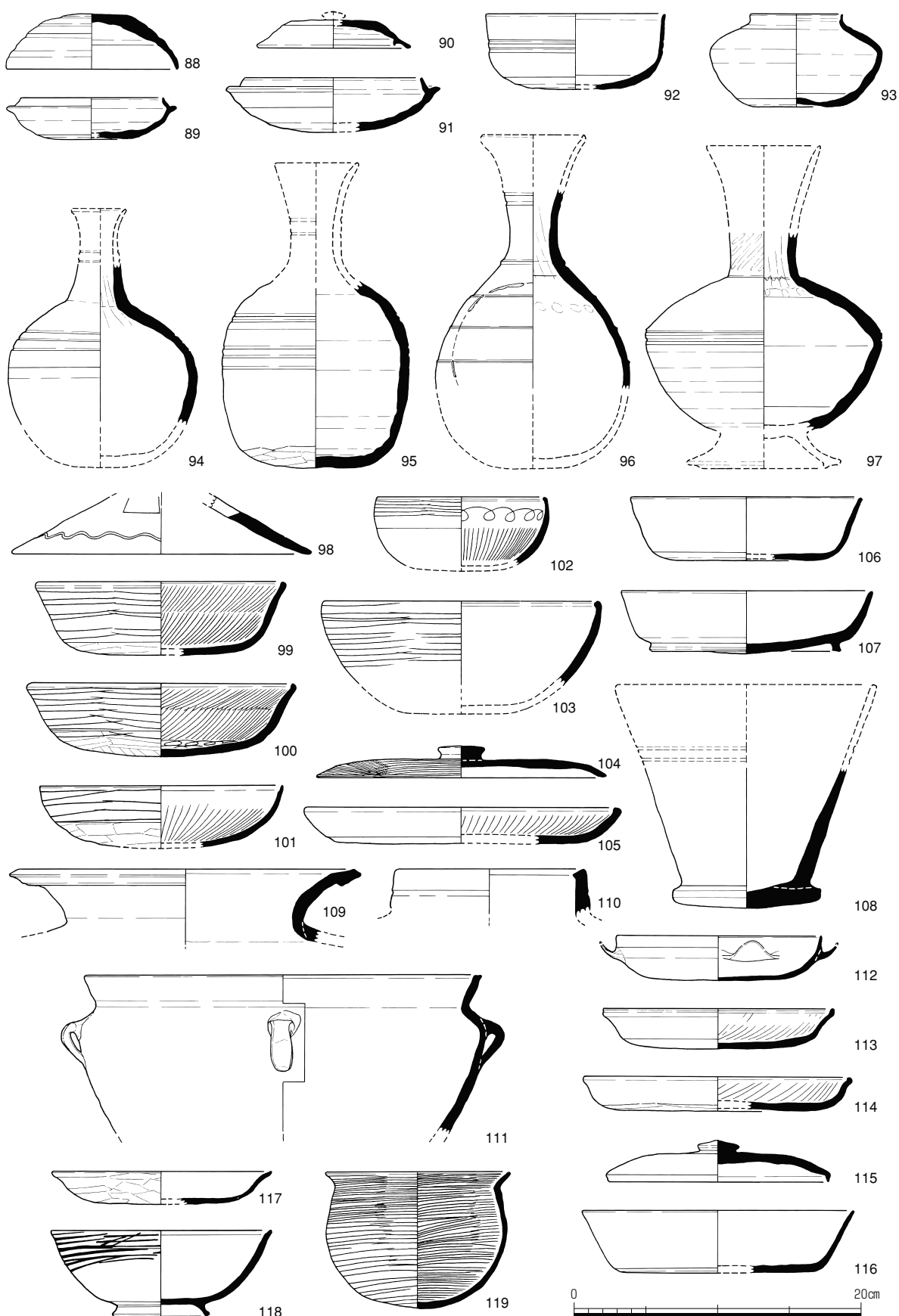


Fig. 94 僧房周边包含層等出土土器 1:4

小型の短頸壺(93)は口径6.4cm、器高6.5cmで、底部外面をロクロケズリで調整している。口径7.8cmの蓋の融着痕跡があるが、該当する蓋は出土しなかった。長頸壺(94~97)は、飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層などに類例がある。94は体部に3条の沈線があり、下半をロクロケズリで調整する。95は体部上半に5条の沈線を施す。底部外面はヘラケズリ。96は体部に小さな段が3段あり、頸部付根に1条の鋭く細い凸帯、頸部上位には2条の沈線がめぐる。金属器模倣の器形である。成形は全体をロクロナデ。体部に、壺または高杯脚とみられる口径10cmほどの口縁端部が融着しており、横位で焼成したことが知られる。台付長頸壺(97)は強く張った算盤玉形の体部で、肩部に2条の沈線がある。体部下半をロクロケズリしている。杯・皿など日常の器に加えて、これら須恵器の長頸壺や後述する土師器の鉢など、仏具と関係

上記のほか、7世紀後半に属する土器も比較的多量に存在している。土師器杯AI(99・100)のうち、99は口径17.0cm、器高5.2cm、b₁手法。内面2段放射暗文、見込に二重の螺旋暗文。100は口径18.5cm、手法や暗文は99と同様。杯CI(101)は口径16.9cm、b₁手法。皿A(105)は口径21.3cm、器高2.6cm、a₀手法。皿A(112)は口径14.3cm、器高3.2cm。b₀手法。ケズリは口縁部近くまでおこなう。貼付式の扁平な把手があり、本来一対と考えられる。橙褐色で砂粒を含む胎土。蓋(104)は上面が平らで大きいつまみをもち、頂部のミガキは全体を5分割している。鉢(102・103)は、口縁部外面の下部をヘラケズリする。103の口径は19.0cm。須恵器の杯AⅢ(106)は、口径16.1cm、器高4.4cm。底部外面はヘラキリのまま。杯BⅡ(107)は口径17.4cm、器高4.4cm。底部外面は、同じくヘラキリのままである。鉢F(108)は底部径10.4cm、灰白色で、焼成はやや軟質。短頸壺(110)は口径13.0cm、口縁端部は内傾面をもち、内側へ突出する。甕A(109)は口径23.6cmである。甕C(111)は口径27.6cm。肩部に左右一対の把手を貼り付ける。

8世紀以降に下る遺物としては、土師器、須恵器のほか、黒色土器などがある。土師器の杯AⅢ(113)、皿AI(114)は、ともにb₀手法。須恵器の杯AⅡ(116)は口径18.8cm、器高4.4cm。底部外面ロクロケズリ。杯B蓋(115)は口径15.4cm。これらは奈良時代中頃のものと考えられる。また、奈良時代後半以降の遺物も出土しており、土師器皿A(117)、黒色土器B類碗(118)、黒色土器A類甕(119)などがある。

viii 北外周部 (Fig. 95)

桜井市第11次調査区と第105次調査西区が相当する。

SB426出土土器 (120~121) 竪穴住居SB426の埋土から、土師器高杯(120)と甕、須恵器壺が出土した。柱穴には土師器の甕、竈内には土師器の杯類・高杯G(121)・挿入式の甕B把手・甕などがある。竈内出土土器は小片だが、吉備池廃寺創建より古い時期のものとみてよい。

SB423出土土器 杯H身(122)は飛鳥Ⅰに比定できよう。他は大半が小片である。

その他 桜井市第11次調査では、切り通しSX421と南北溝SD422から、土師器甕と埴輪の破片が出土した。SB420・425、SA424では土器が出土していない。

第105次調査西区で検出した中世の溝からは、古代のものを含めて、比較的多量の土器が出土した。SD291~293は南トレンチにある流路で、SD291には9~10世紀の土師器杯、12~13世紀の瓦器碗などがある。SD292にも12~13世紀の瓦器碗などが含まれており、SD293で

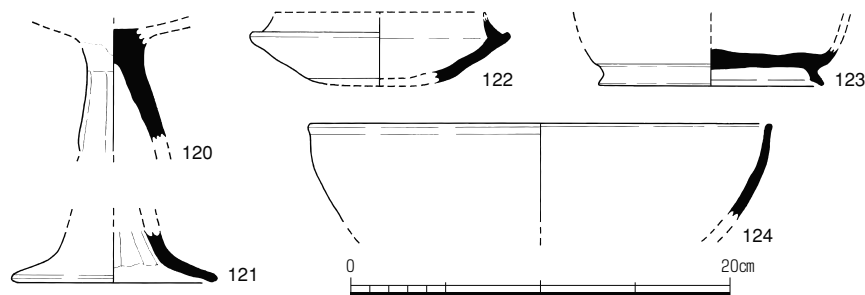


Fig. 95 北外周部・南外周部出土土器 1:4

は9世紀の土師器皿などが出土した。また、コの字形をなす溝SD285～287には、12～14世紀の瓦器椀などが含まれる。このほか、SD286・287の底面で検出したL字形の溝SD288～290のうち、SD288には14世紀の瓦器椀、瓦質播鉢などがある。

ix 南外周部 (Fig. 95)

桜井市第12次調査区が相当する。SD442・SX443からは土器が出土していない。

SD441出土土器 (123・124) 調査区の北方で検出した東西方向の石組溝。土師器杯A・杯H・甕、須恵器杯B・椀C・甕・壺がある。溝の側石の間からは、須恵器甕の体部片が1点出土した。須恵器杯B (123) は、つま先立ちの比較的高い高台をもつ底部の破片。高台径11.8cmである。厚い底部と丸みのある腰部が特徴的で、飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけることができる。須恵器鉢 (124) は口縁部がほぼ直立し、端部に面をもつ。

x 特殊遺物など (Fig. 90・93・96, PL. 52)

土 馬 4点ある。第105次調査では、中央区の包含層から7世紀末頃とみられる胴部1点と脚部1点、東区の12～13世紀頃の溝SD307から奈良時代の脚部が1点出土した。また、第111次調査南区の包含層からも、折り曲げて成形した奈良時代の胴部1点が出土している。

墨書・ヘラ記号・針書土器 墨書土器は3点が出土した。そのうちの1点は、桜井市第9次調査区の藤原宮期の溝SD402からの出土。土師器杯Gの底部外面に「十」を記す (Fig. 93-67)。ほかの2点は中世の土器なので省略する。ヘラ記号をもつ土器は、第105次調査中央区の包含層から出土し、7世紀のものとみられる丸底の須恵器平瓶の底部外面に「×」と刻んでいる。針書土器は第111次調査南区SD180から出土した。須恵器甕の体部外面に、直交する3本の直線を刻むが、文字ではない。

円 面 硯 (Fig. 96-125～127) 3個体、計4片がある。第105次調査では、円面硯の破片が包含層およびそれに属する窪みから1点ずつ出土し、同一個体とみられる (125)。堤部と脚部が残存しており、長方形の透かしをもつ。なお、断片のため、図示した直径は確定的ではない。第111次調査北区においては、僧房SB340の西雨落溝SD343から円面硯の脚端部が1点 (127)、同じく包含層から堤部が1点出土した (126)。127は明灰色、126は青灰色～紫灰色を呈し、焼成も異なる別個体である。

緑釉陶器・灰釉陶器 (Fig. 96-128～131) 緑釉陶器は3点ある。うち1点は、第105次調査東区のSD307から出土した皿の口縁部 (128) で、口縁部径13.2cm。内外面とも、全面に淡黄緑色の釉を施し、口縁部内面には緑色の釉が部分的に残る。胎土は褐色がかかった白色で、軟質。他の2点は、第105次調査中央区の包含層出土で、椀の底部である (129・131)。129は、下面に糸

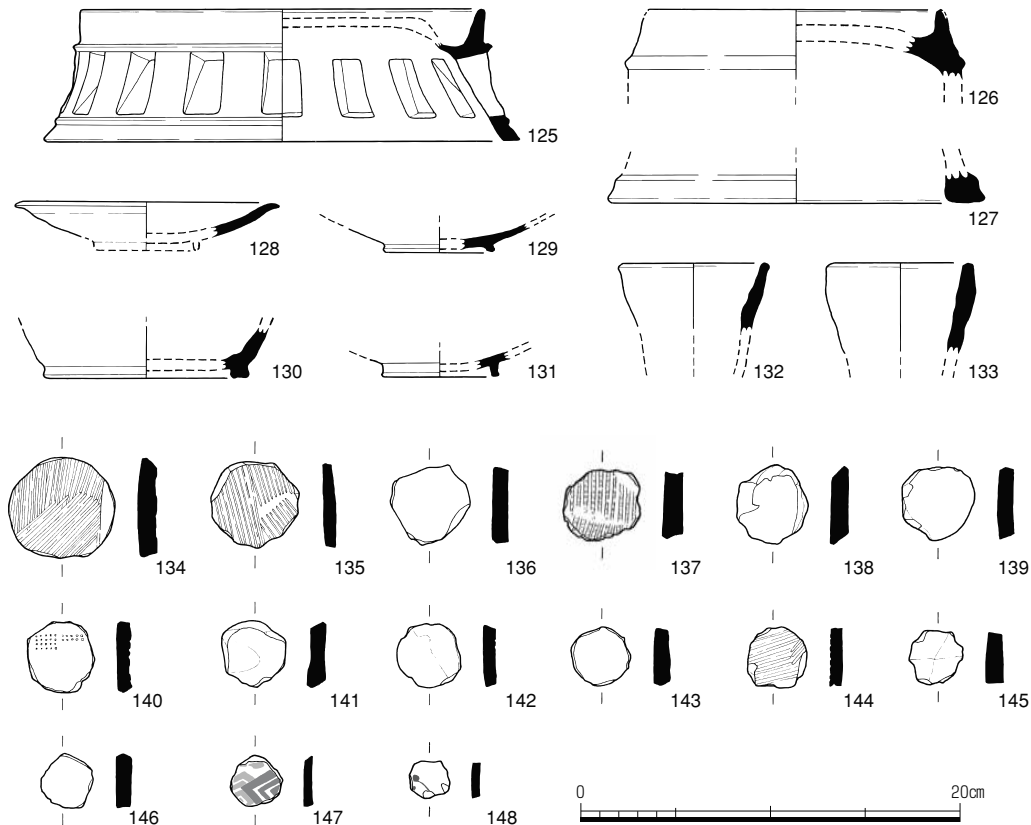


Fig. 96 特殊遺物など 1:4

切り痕が残る削り出し高台をもち、高台内側以外の全面に淡緑色の釉を施す。胎土は明灰色、焼成は須恵質で堅緻。131は貼付け高台で、内面から高台外面まで淡黄緑色の釉を施す。胎土は白～灰白色。

灰釉陶器は24点あるが、いずれも小片。第105次調査東区のSD306とSD307に壺体部が各1点、同じくSD292に壺または平瓶の口縁部片がある。ほかに壺、皿、碗が包含層などから出土した。SD306出土の壺(130)は体部外面ロクロケズリ。釉は体部から高台外面におよぶ。

白磁・青磁 白磁は、第105次調査中央区の水田床土から碗の小片が出土した。薬師寺西僧房跡出土品¹⁴⁾と類似した玉縁状の口縁端部をもち、10世紀頃の製品とみられる。ほかに中世の白磁・青磁が、第105次調査中央区のSD267や包含層などから出土している。

薬師寺西僧房と類似

漆・白色物附着土器 漆附着土器5点、白色物附着土器4点が出土した。第105次調査東区では、東面回廊SC300にともなう創建期の整地土から、漆が付着した須恵器甕が1点出土している(Fig. 90-35)。また、池内調査区の創建期整地土の土器にも漆附着の甕破片がある。ほかに、第105次調査東区の中世の溝SD306では、漆が付着した須恵器壺と白色物が付着した須恵器甕・平瓶が出土した。上記以外は包含層などからの出土で、漆が付着した須恵器壺と平瓶が1点ずつ、白色物が付着した須恵器甕と壺が1点ずつある。白色物附着土器については尿瓶の可能性が指摘され、分析がおこなわれたことがある¹⁵⁾。そこでは、白色物質がギブサイトかそれに似た物質と判明したが、尿に起因するかどうかは確定的ではない。

製塩土器 (Fig. 96-132・133) 第105次調査で8点、第111次調査では156点が出土した。いずれも小片で、吉備池廃寺の遺構にともなうものはない¹⁶⁾。第105次調査東区の12～13世紀頃の溝

奈良時代末
～平安時代

SD306の2点以外は、すべて包含層などに属する。したがって、年代は確定しがたいが、奈良時代末～平安時代のものであろう。口径7～10cmほどで直線的に開く形態のものが主体を占め、胎土は細かい砂を多く含むものと、きめ細かい胎土に1～3mmほどの砂粒を多く含むものがある。色調は灰白色から橙色を呈し、二次的な火熱を被っている。このほかに、微砂を多く含む薄手のもの、厚手で大型のもの、口縁部が屈曲して開くもの、口縁部が内彎するものなどが少数みられる。

円板 (Fig. 96-134～148) 土器片などを加工した直径数cmの小型の円板が15点ある。うち遺構からの出土は2点で、1点(139)は第105次調査東区の12～13世紀の溝SD306から、もう1点(141)は第105次調査西区の14～15世紀の溝SD285から出土した。そのほかは包含層などからの出土で、吉備池廃寺の遺構にともなうものはない。転用された土器は、いずれも中・近世のもの。表側中央がよく擦れている個体があるが、油の付着や灯火の痕跡はまったく認められない。円板は縄文時代から明治時代までであるともいわれ、縄文時代と中・近世を中心として多くの研究があるものの、性格や用途は依然はっきりしない。今回の出土例からも、性格などを限定することはできなかった。

B 埴輪 (Fig. 97・99, PL. 53)

埴輪は調査区のほぼ全域で出土しているが、円筒埴輪33点・形象埴輪7点のあわせて40点と出土点数は少なく、かついずれも小片で、全形がわかるものはない。

円筒埴輪

円筒埴輪 (Fig. 97) は大きく3類に分けることができる。¹⁷⁾

A 類 (1～6) 外面が黄褐色～黄茶色を呈し、高い突帯をもつのが特徴で、突帯は断面が台形のもののほかに、器壁からほぼ垂直に立ち上がるものもある。外面調整は、一次調整にタテハケ、二次調整にタテハケまたはB種ヨコハケを用いる。断面はいずれも黒色化しており、焼成の際、内部まで熱が充分伝わっていないことがわかる。有黒斑で野焼き焼成である。出土点数は最も多く、18点を占める。口縁部(1)は端部が「く」字形に外反する。2は体部の破片で、内外面ともにハケ調整を施す。3～5は同一個体と思われる破片で、体部の径は約30cmをはかる。突帯上下を強くナデで高く鋭い突帯を形成し、目の細かいハケ原体を使ってB種ヨコハケを密に施す。内面調整は、上半ではナナメハケ、下半ではナデおよびオサエを用いている。円形の透孔をあけ、外面には赤色顔料を塗っている。6も高い突帯をもち、B種ヨコハケを密に施す。内面はナデ調整で、粘土紐積み上げ痕跡を残す。外面には赤色顔料を塗っている。4世紀後半～5世紀初頭。

B 類 (7～9) 外面は淡茶色～黄灰色を呈する。野焼き焼成であるが、比較的硬質に焼成されており、摩滅したものは少ない。突帯はやや低く、上面の幅が広い。断面は台形または「M」字形を呈する。外面調整は、A類と変わらない目の細かなヨコハケを密に施すもの(7)もあるが、目の粗いヨコハケを断続的に施すもの(8)も見られる。内面調整は、タテハケやナナメハケを用いるもの(7・8)と、ナデを用いるもの(9)がある。断面が黒色化した破片は少なく、灰黒色あるいは器壁内外面と同色を呈する。5世紀前半～中頃。

C 類 (10～12) 外面が明橙色～淡橙色、断面が青灰色を呈し、^{あな}管窯を用いて硬質に焼成されている。突帯は低く、台形の断面をもつ。12はとくに突出が小さい。口縁部(10)は直立して

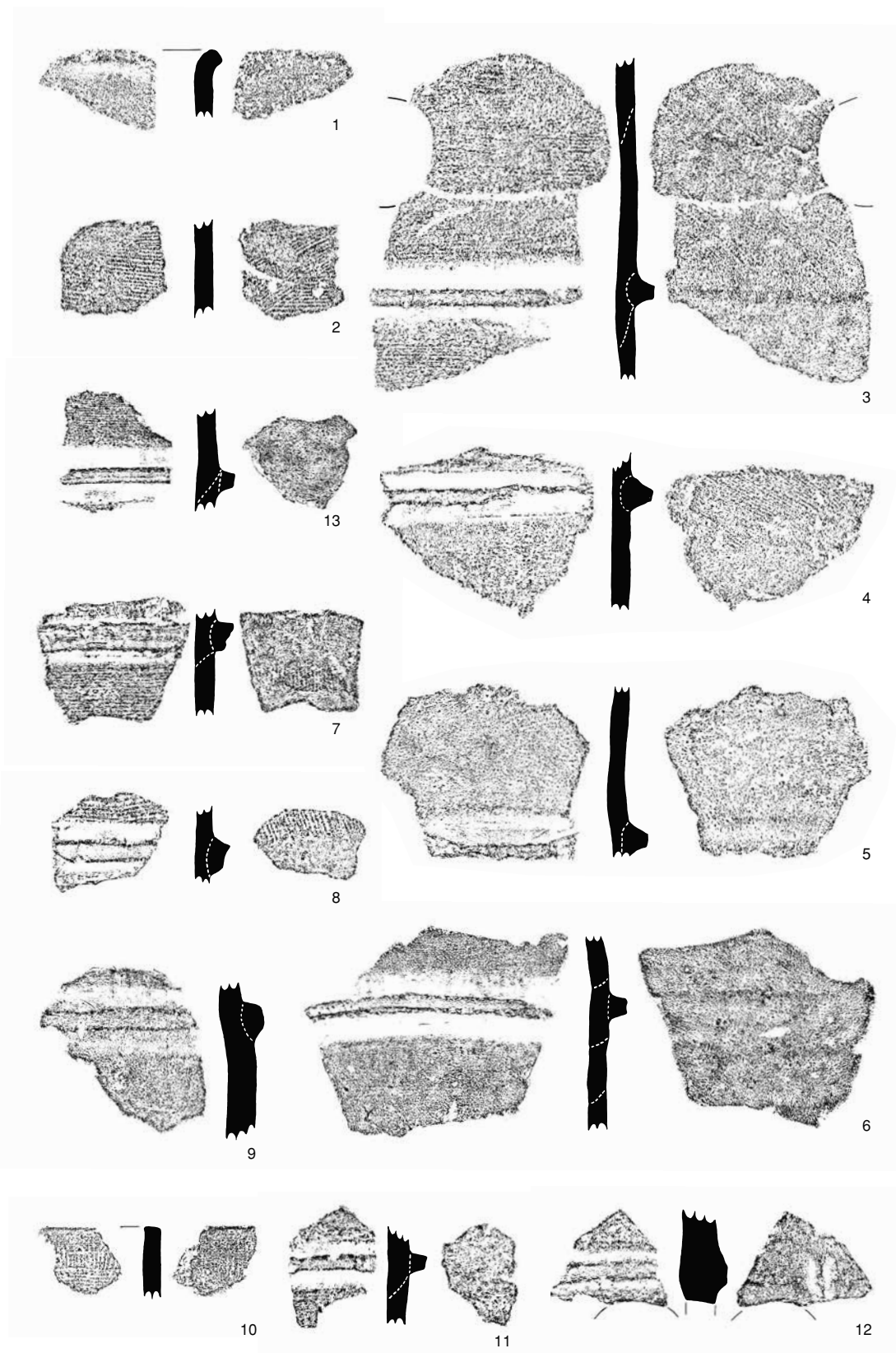


Fig. 97 円筒埴輪 1:3

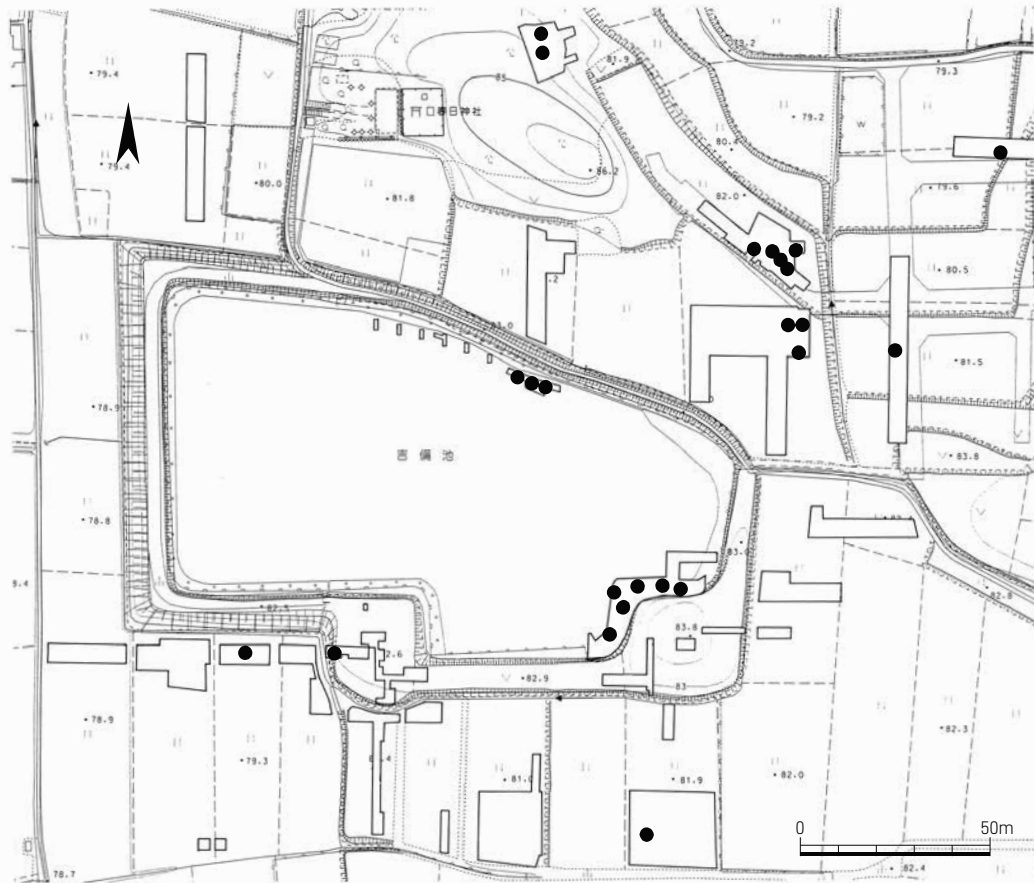


Fig. 98 埴輪の出土地点 1:2000

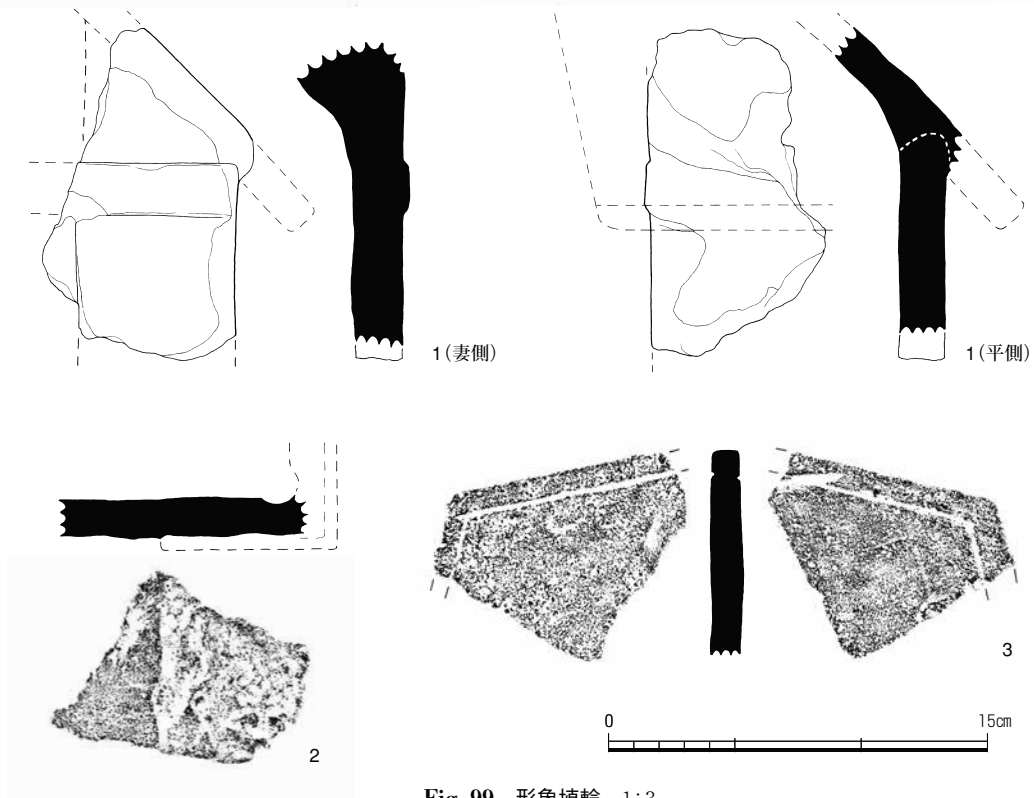


Fig. 99 形象埴輪 1:3

終わり、外面調整はタテハケ後にヨコハケを施す。内面調整は、口縁端部付近にのみヨコハケを施すほかはナデによる。11は外面をヨコハケ、内面はナデで調整している。12は、突帯にごく近接して、円形の透孔をあける。5世紀後半～6世紀前半。

形象埴輪 (Fig. 99) には、家形埴輪と蓋形埴輪がある。1は切妻造屋根と壁体との接合部分である。妻側には粘土板を貼り付けて、角柱と梁を表現している。2は家形埴輪の壁体角で、外面には剥離痕が見られる。この部分に粘土板を貼り付け、角柱を表現したのだろう。角の内面は、縦方向に強くナデ付けている。3は蓋形埴輪の立ち飾りである。両面とも丁寧なナデで仕上げられ、縁取りの沈線が各1条見られる。いずれの形象埴輪も黄褐色～赤褐色を呈し、軟質で、A類ないしB類のどちらかに伴うものである。

形 象 埴 輪

なお、吉備池廃寺北方の春日神社裏山とその周辺は、従来から埴輪出土地として知られている¹⁸⁾。また、戦前から奈良県下各地で考古資料を収集してきた松本俊吉が、吉備池内および周辺で採集した遺物の中にも埴輪が見られる¹⁹⁾。今回の報告とも関連するため、以下、これらの埴輪について簡単に触れておこう。

吉備池廃寺
近隣の埴輪

13は春日神社裏山で採集した円筒埴輪²⁰⁾で、断面が台形の高い突帯をもつ。外面は細かく密なB種ヨコハケで調整され、赤色顔料が残る。A類に属するものである。松本の収集資料の中には、A類・B類と同様、外面の二次調整に細かなB種ヨコハケを用いる円筒埴輪(目録番号K3560)や、外面の一次調整にタテハケとナナメハケを用い、二次調整を欠いたC類に含まれる円筒埴輪(目録番号K3562)、網代を表現した家形埴輪(目録番号K3559)などがある。また、桜井市文化財協会が1995年におこなった吉備池廃寺東北部²¹⁾の調査でも、谷状に落ち込む傾斜面から埴輪が出土している。そのうち円筒埴輪は、いずれも器壁が薄く摩滅し、「ていねいな細かいハケ調整」を特徴としている。これらはA類と同様の特徴をもつ。ほかに、網代を表現した家形埴輪片もある。

以上のように、吉備池廃寺周辺では、過去の発掘調査や採集資料を含めて上記の3類の埴輪が出土し、時期差を有するものの、混在している様子がうかがえる。では、それらの埴輪はどのようにして運ばれてきたのだろうか。

第105次調査池内調査区では、吉備池廃寺創建に伴う整地層から4点の埴輪が出土している(Fig. 97-5・8)。5はA類、8はB類の破片である。また、小片のため図示していないが、外面明橙色、断面青灰色を呈し、窖窯で焼成されたC類の円筒埴輪の体部片も含まれている。つまり、吉備池廃寺創建期の整地土には、A・B・C各類の埴輪が含まれているのである。ただ、A類の埴輪の中には、軟質であるにもかかわらず、ほとんど摩滅せずに赤色顔料がよく残っているものが存在する。これらは、整地土に紛れて遠くから運ばれたと考えるよりも、吉備池廃寺の近くからの流れ込みを想定するほうが自然だろう。

吉備池廃寺の周辺では、現在、埴輪をもつ古墳の存在は知られていない。しかし、藤原京内では、橿原市四条古墳群・日高山古墳群・新賀池古墳のように、宮や京の造営に伴って破壊された古墳の検出例が増えており、吉備池廃寺からさほど離れていないところにも、埴輪を立て並べた古墳が存在したと考えられる。現状では、地形が大きく改変されているため確認できないが、その候補地として、春日神社裏山の小丘陵を挙げておきたい。摩滅が少なく、大きな破片が残るA類の円筒埴輪は、それに伴うものと推定される。

吉備池廃寺
北方に古墳

- 1) 土師器の杯、皿類の調整手法は、記述の簡略化のため、以下のように記号化している。外面調整手法のうち、a手法は土器の口縁部をヨコナデし、底部を調整しない。b手法は口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリで調整する。c手法は口縁部と底部の外面全体をヘラケズリする。e手法は口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下を調整しない。また、外面にヘラミガキを施す場合があり、施す部位の違いによって区別する。0手法は口縁部も底部も磨かない。1手法は口縁部だけを磨く。2手法は底部だけを磨く。3手法は口縁部と底部の両方を磨く。a～e手法と0～3手法の組み合わせにより、a₁手法、b₀手法などと調整の仕方を表現する。なお、径高指数=器高÷口径×100、四捨五入。
- 2) 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976年、『藤原報告Ⅱ』1978年、『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987年、『藤原報告Ⅳ』1995年、各年度の概報など。
- 3) SD104を検出した第81-14次調査では、上部が削平されて土層関係が明らかでなく、近世までの土器が含まれていたことから、近世の溝と判断した。しかし、これらの土器はいずれも小片で、染付の椀、濃緑色の釉が施された須恵質の壺、摩耗した瓦器椀が1点ずつにすぎない。第105次調査東区では、層位関係から、SD105・250が創建当初の溝であることが確定している点とあわせて、重複する近世以後の遺構や包含層からの混入とみなしてよからう。
- 4) 『藤原概報26』1996年。
- 5) 『藤原概報22』1992年。
- 6) 調整手法の原理からいえば、条痕を伴わないハケ目調整と称することもできる。
- 7) 『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年。
- 8) 『藤原概報25』1995年。
- 9) 『藤原概報10』1980年。
- 10) 『山田寺発掘調査報告』前掲註7)。
- 11) 川原寺下層SD02→甘樫丘東麓SX037→飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層・雷丘北方遺跡SD3580→坂田寺SG100という変遷が提示されている。なお、山田寺下層のSD619・整地土出土の土器は、杯Cの径高指数や底部のケズリなど、甘樫丘より古い要素をもつものが主体だが、新しい要素をもつ個体もあるので、飛鳥池遺跡と同じ頃にまたがる内容をもつとみなされている。したがって、山田寺下層は、甘樫丘・飛鳥池より古い土器を中心としつつ、その下限は飛鳥池遺跡と同じ頃にあると捉えるべきで、年代の近似値としては641年が与えられる（『藤原概報25』前掲註8）、『藤原概報26』前掲註4）参照）。本稿で比較している径高指数などは、主体を占める古めの土器の様相ということになる。
- 12) 『藤原概報3』1973年。
- 13) 『藤原概報20』1990年。ただし図示していない。
- 14) 『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年。
- 15) 村上 隆・佐藤昌憲・黒崎 直「土器などに付着した白色物質—小便容器の可能性を探る—」『トイレ遺構の総合的研究—発掘された古代・中世トイレ遺構の検討—』（科学研究費補助金研究成果報告、研究代表者：黒崎 直）奈文研、1998年。
- 16) 第111次調査北区では、156点中6点が藤原宮期の遺構として取り上げられたが、これまで、藤原宮期にこのような製塩土器は確認されていない。混入であろう。
- 17) 円筒埴輪の編年・調整技法などの名称は、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、1978年に準じた。
- 18) 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 奈良県』1990年では、「埴輪出土地」として登録されている（3-2321）。奈良県の遺跡地図番号は14-B-23。
- 19) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和考古資料目録 第12集』1985年。目録番号は、同書に記載されているものである。
- 20) 1998年9月22日、台風7号による強風で春日神社裏山の木々が倒れ、神社本殿が倒壊した。埴輪はその際の踏査で、倒れた木の根元から採集したものである。
- 21) 清水真一「吉備池遺跡第6次発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財 1995年度発掘調査報告書1』桜井市文化財協会、1996年。

3 石製品・土製品・金属製品ほか

A 石製品 (Fig. 100, PL. 54)

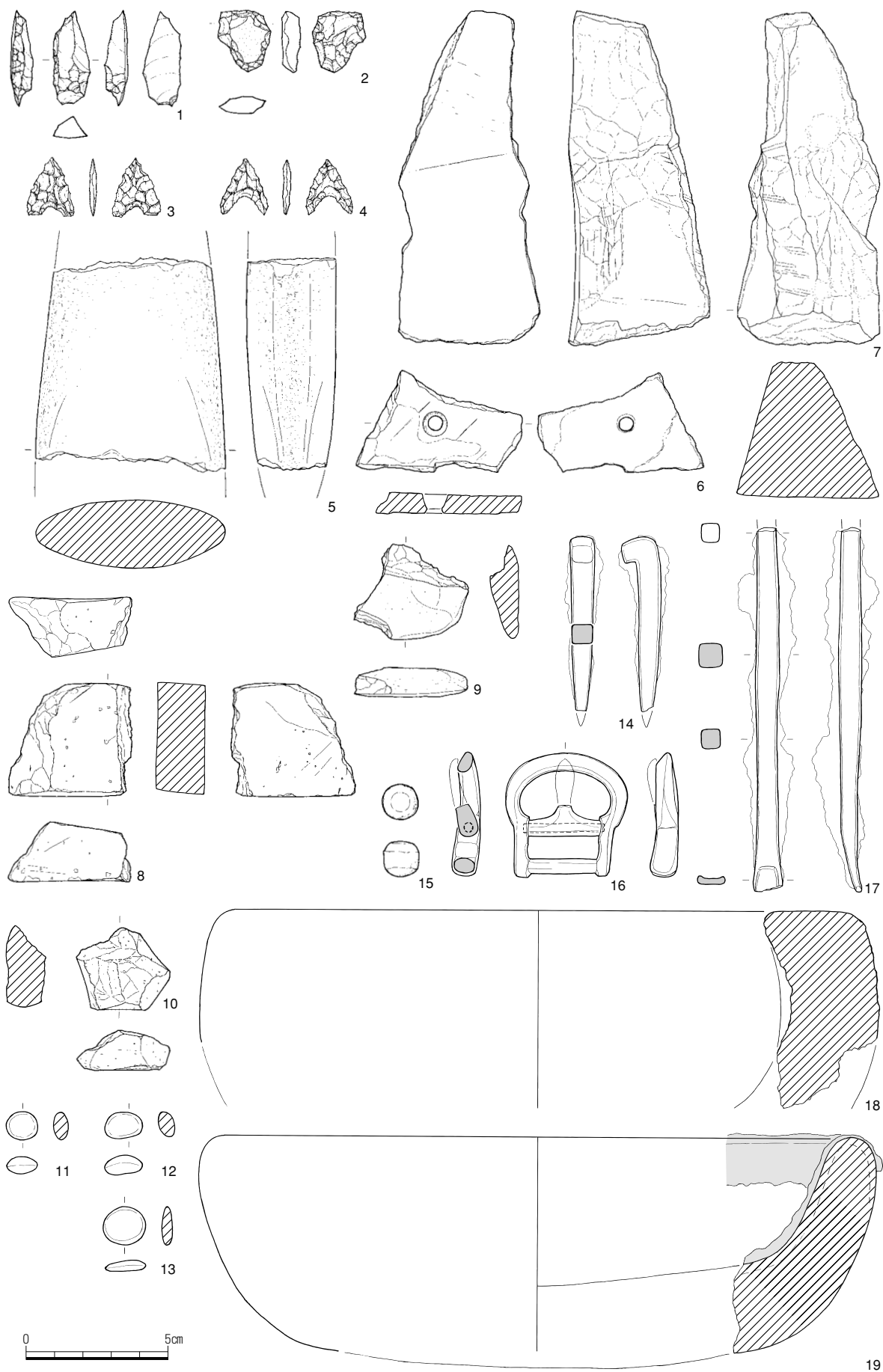
吉備池廃寺から出土した石製品類には、サヌカイト製品としてナイフ形石器 1 点、剥片 24 点、石核 4 点、石鏃 2 点があり、ほかにチャート製剥片 1 点、太形蛤刃石斧 2 点、砥石 9 点、有孔石板 1 点、基石かと思われる扁平な丸石 7 点などがある。サヌカイト製剥片には、被熱したもの 2 点を含む。そのほか、凝灰岩片 7.51kg、流紋岩質溶結凝灰岩（榛原石）片 21.11kg 以上、砂岩片 4.45kg 以上、被熱した礫 2.30kg、石英と長石 7.80kg 以上、メノウ片 1 点（10g）などがある。

出土状況を見ると、サヌカイト製品は主として北側の小丘陵周辺に分布し、桜井市第 9 次調査（以下、「調査」を略す）で 5 点、同第 11 次で 13 点（ナイフ形石器を含む）、第 105 次中央区で 6 点出土した。ほとんどが後世の溝や柱穴、整地土、耕土などから出土し、原位置を保つものはない。砥石の多くは第 105 次中央区、第 111 次北区から出土している。被熱した礫は第 111 次北区に比較的多く、なかでも創建時整地土に含まれるものが 0.5kg 以上あり、後述する工房に関わる可能性がある。同様に、砂岩についても、第 111 次北区の整地土と SB340 柱掘形から全体の半分以上（2.24kg）が出土し、工房に関わる砥石の素材が含まれている可能性がある。榛原石は、第 105 次中央区・西区と第 111 次北区では各々 1～3 kg 程度と少なく、第 105 次東区と第 95 次南区はそれぞれ 6 kg 前後である。第 105 次東区の榛原石の多くは包含層ないし SD306・307 から出土したが、SD305 にもわずかに含まれ、第 95 次南区では石榴を形成していた。石英類は、第 111 次北区からの出土が 5.85kg と圧倒的に多く、うち 2.7kg あまりが SB340 柱掘形からの出土。凝灰岩は第 95・111 次南区 SD180 から半分以上の 4.32kg が出土し、第 105 次中央区・西区で 1～1.5kg 前後、塔周辺と第 105 次東区・第 111 次北区では 0.5kg 前後しか出土していない。

ナイフ形石器 1 は、サヌカイト製で風化が進んでいる。縦長の剥片を素材として、先端を斜めに切り取るように整形し、その側縁と刃部となる側縁の下半部に主要剥離面側からブラントリングを施し、横断面が台形に近い、厚みのあるナイフ形石器に仕上げたもの。基部の剥離調整は、石材の質によるのであろうか、大きく決めるようになっている。ほぼ完形で、長さ 3.3cm、幅 1.3cm、厚さ 0.8cm、重さ 3.0g。桜井市第 11 次の SB423 の西側柱列北から 2 基めの柱穴より単独で出土。これまで奈良県内では、二上山北麓以外に、ナイフ型石器の単独発見例がいくつか知られており、今回、本例を加えることとなった。本遺跡に最も近い位置での出土例に、桜井市阿部丘陵遺跡群の横長剥片を素材としたものが 1 点ある²⁾。また、縦長剥片を素材としたものとして、河合町フジ山古墳付近採集品、天理市布留遺跡出土品³⁾がある。2 は二次剥離のあるチャート製剥片。青灰色を呈する。片面には中央部に大きく原礫面ないし節理面を残し、他面にはわずかながら主要剥離面をとどめる。周縁部全体を両面から細かく剥離調整する。背面では左上縁部に打点を残し、また、腹面では右下縁部から左側縁部にかけて広く打点が認められる。ほぼ完形で、縦 2.2cm、横 1.9cm、重さ 3.0g。桜井市第 11 次覆土出土。石鏃 3 は無茎凹基式で、サヌカイト製。基部の挟りが浅く、側縁は不整な直線状をなす。整形・調整がやや粗く、左右の脚は大きさが不揃いである。長さ 2.0cm、幅 1.7cm、重さ 1.0g。第 105 次中央区床土出土。石鏃

ナイフ形
石器

石 鏃



4は無茎凹基式で、サヌカイト製。基部の挟りが深く、身の中央付近まで入る。側縁は直線的である。整形・調整が丁寧で、全体に形が整い、左右の脚も大きさが揃っている。長さ2.0cm、幅1.6cm、重さ0.58g。塔心礎抜取穴出土。**太形蛤刃石斧 5**は、刃部と基部を欠失した、基部に近い身部片である。表面は丁寧に研磨される。重さ389.0g、残存長7.5cm。石材は砂岩。金堂西南隅耕土出土。**碁石**かと思われる扁平な円形の小石は、いずれも表面が平滑になっており、径が1～2cm程度である。11は白色の小石で、径1.1cm、厚さ0.6cm、重さ約1g、整った円形を呈し、やや厚みがある。石材は石英。第95次南区SK189出土。12は不整な円形ないし楕円形を呈し、中央がわずかに窪む灰黒色の小石。径1.3cm、厚さ0.6cm、重さ約1g。石材は砂岩。第95次南区SK189出土。13は灰褐色を呈する小石で、平面形は楕円形。径1.47cm、厚さ0.4cm、重さ約1g。材質は確定できないが、塩基性凝灰岩か。第105次西区SD291出土。**有孔石板 6**は四辺が折損しており、元の形態は不明。残存長5.6cm、最大の厚さ0.7cm、重さ17.0gある。穿孔は両面から行うが、断面図の上面方向からが深く、径もやや大きく0.8cmあり、他面では径0.6cm。下面がやや摩滅しており、あるいは提碁として使用されたものかもしれないが、確証はない。表面に鉄分が付着し、摩滅も著しいため確定できないが、石材は流紋岩ないし粘板岩か。第105次東区SD307出土。**砥石**は、現状で大・中・小型の別がある。7は大型品で、横断面が台形を呈し、一端がやや細くなる方柱状に石材を粗割して、長側面を砥面としたもの。砥面は3面あり、1面は全体を内湾するまで使用しているが、他の2面は一部を使用しているにすぎない。長さ11.7cm、幅5.0cm、厚さ4.8cm。重量291.0g。砂岩製。第105次中央区包含層出土。8は中型品で、扁平な砥石。両小口が割れているが、使用中あるいは使用後の欠損なのか、粗く整形したものなのかは判然としない。割れ面を除き4面が砥面として使用される。長さ4.3cm、幅4.0cm、厚さ1.7cm。重量47.0g。砂岩製。第105次東区包含層出土。9は扁平な砥石先端部の破片で、全形は不明ながら、厚さなどから考えて中型品とみられるもの。現状では、外湾する砥面が1面のみ認められ、その裏は自然面を残す。緩く弧を描く縁辺部以外は割れて欠失する。残存する長さ4.0cm、幅3.3cm、厚さ1.0cm。現存の重量15.0g。黒色片岩製。第105次西区出土。10は五角形を呈する小型の砥石。平らな石材の側面をやや急角度で粗く打割して五角形に整形し、側面を砥面とするものだが、うち1面は使用されていない。未使用面は、あるいは指を添えるために残されていたのであろうか。頂部および底面は打割した面ないし自然面のままである。砥面はいずれも内湾している。長さ3.3cm、幅2.9cm、厚さ1.4cm、重量13.0g。流紋岩製。僧房SB340南側柱列東から2基めの柱掘形出土。出土状況から、後述する創建以前の工房に関わるものと推定される。

太形蛤
刃石斧

砥石

B 土製品など (Fig. 100, PL. 54)

吉備池廃寺から出土した土製品などには、^{もつば}埴塼2点、とりべ2点、羽口片40g以上、不明土製品1点、炉壁かと思われる焼土片1点があり、ほかに冶金関連遺物として、碗形滓を含む鉄滓0.19kgがある。そのほか、焼土5.45kg以上、粘土熔融物少量、粘土小片少量などが出土。小片が多く、図示できるものは限られている。

冶金関連
遺物

焼土は、北側の小丘陵周辺の調査区、とくに第111次北区に集中し、全体の約68%に相当する3.75kgの出土があった。とりわけSB340東端部の焼土溜SX357付近での出土量（計2.45kg、全

体の約45%)が多い。焼土のうち、寺院創建時の整地土に含まれるものは明らかに創建以前に属し、上層の包含層に含まれるものの一部もこれに由来するだろう。後述する冶金関連遺物の出土状況から考えると、焼土の一部は工房に関わる可能性がある。焼土は、ほかに第105次西区でも比較的多く出土した。また、鉄滓は、第111次北区と第105次東・西区で出土した。

とりべ19は、口縁部から胴部にかけての破片で、内外面とも灰色に焼けて硬化している。胎土には砂粒を含む。小片のため必ずしも明らかではないが、口縁の直径は24cm程度と推定され、口縁部の厚さ2.2cm前後の比較的大型のとりべと考えられる。僧房SB340の西雨落溝SD343上層出土。埴埦18は、口縁部から胴部にかけての破片。内外面ともに灰色に焼けて一部ガラス化し、硬化が著しい。胎土には砂粒を含む。口縁部の厚さ3.0cm前後とかなり厚手で、破片のため明確ではないが、直径24cm前後とみられる、かなりの大型品である。第105次東区包含層出土。このほかに、図示していないが、僧房SB340の北雨落溝SD341から、片口の付くとりべ口縁部片が、また、第111次北区の創建時整地土から、緑青を吹いた鉾滓が付着する小型埴埦口縁部片が出土している。冶金関連遺物は、少量ながら第111次北区に比較集中して認められ、出土層位などから、創建以前の工房が付近にあった可能性がある。

創建以前の
工 房

C 金属製品 (Fig.100, PL.54)

吉備池廃寺から出土した金属製品には、青銅鏡片（乳断片、第105次中央区包含層）1点、銅鉸^か具1点、鉄釘12点（第105次の僧房SB260柱穴から1点、包含層その他から11点）、鉄座金1点（第95次西区包含層）、鉄刀子かと思われる破片1点（第111次北区包含層）、鉄不明品小片5点、球形鉛製品1点、富壽神寶1点、寛永通寶1点（桜井市第11次包含層）などがある。

鉸 具

16は銅製の鉸具である。表面は腐蝕し、銅地金が露出あるいは土中の砂粒が付着し、もともと漆膜あるいは鍍金等があったのかどうかは不明。長さ4.4cm、幅4.3cm、現存重量39.3g。外枠と刺金と軸の3部品から構成される。外枠は、いわゆるC字形の縁金と基部の横棒が一体で铸造されたもの。別铸の刺金は、元部付近から先端が折損し失われるが、「T」字形で、装着用の軸を通すために横軸部が中空となっている。軸は、刺金が枠に銹着した現状では材質・製作法等を肉眼で確認できないが、X線写真（PL.54-16右）では両端を丸く収めた棒状を呈する。铸造後、軸を通した刺金を装着するに際し、枠を外側から押圧したようで、枠全体が一方へやや歪む。第105次東区包含層出土。いわゆる「T字形刺金」を備える鉸具の類例は多くないが、長野県などを中心に十数例が知られており、用途について銚^{かたい}帯か馬具か⁵⁾で議論がある。本例は、製作技法を別にすれば、一、二を除いて既出例と大きさや形態が酷似し、制作・流通年代や用途が共通することが推察できる。奈良時代から平安時代にかけてのものだろう。ちなみに、本例の出土地点に近いほぼ同一土層から、馬の臼歯が出土している。包含層のため、共伴とみてよいか、にわかに判断しかねるが、本鉸具の用途を考えるうえで注意される。鉄製品には図示できるものが少なく、ここでは2点を掲げておく。17は断面方形の鉄棒状品で、一端を扁平に鍛造成形し、わずかに屈曲させる。折損のため他端は失われている。折損する部位に向かってわずかながら細くなる。何らかの工具あるいは折頭釘の未成品かもしれない。現存長12.9cm、扁平部位の幅1.0cm、身部の幅0.8～0.6cm、現存重量41.0g。桜井市11次覆土出土。14は折頭釘。腐蝕が進行し、かつ先端部を欠失するが、ほぼ全形をうかがえる。頭部は扁平に鍛造成形する

T字形刺金

ことなく、方形の断面形を保ちながら鋭角をなして短く屈曲する。現存長6.2cm、頭部幅1.9cm、身中央部幅0.7cm。現存重量13.9g。第111次北区耕作溝出土。**球形鉛製品15**は、わずかに破損が認められるが、ほぼ完形品。表面は酸化して淡い灰白色を呈する。鑄造品で、鑄型の合わせ目が水平の細い稜線となって残存する。その稜線は玉の中央部ではなく、上方に偏っている。また、玉の側面も球形というよりは多角形に近く、現状で8本の稜線が認められ、八角以上になるものらしい。全体として、半球状の底部をなす八角柱形の身部に、扁平な半球状の頭部が載るような外観を呈する。銃弾であろうか。重さ11.8g、直径1.24cm。第81-14次表土出土。

20 (PL. 54) はいわゆる皇朝十二銭のひとつ、**富壽神寶**である。腐蝕が進み、鍍のため表面には砂粒が付着する。上部には穴があき亀裂が入り、鉄分が付着して「富」字部分を覆う。腐蝕と付着砂粒のために他の銭文も判然としない。径2.35~2.40cm、内郭0.65~0.70cm、現存重量1.9g。第105次東区出土。

富 壽 神 寶

D 木製品 (Fig. 101, PL. 55)

木製品には、楔2点、たたり1点、留針1点、曲物底板2点、齋串^{いし}1点、角材状ないし板状などの品目不明な部材7点、柱根等4点、杭2点、加工木などがあり、ほかに第105次東区のSE312・313の井戸枠用曲物4点がある。遺存状態が悪く、図示できるものは少ない。曲物枠は脆弱なため、取り上げを断念した。年輪年代の測定が可能なものはない。

遺構別に見ると、第95次南区のSD162から加工木、SD180から部材・杭・加工木、第95次西区のSK217から加工木、SE220から加工木、SD225からたたり、SD226から杭・加工木・留針・部材など、第105次東区のSD305から楔・加工木、SD306から加工木、SE311井戸枠採取穴から曲物底板・加工木、SE313から加工木、第111次南区のSE330から齋串・部材、第111次北区僧房SB400の北側柱列東から3基めおよび6基めの柱掘形より柱根（樹種コウヤマキ）、第105次中央区と東区の包含層中から楔や加工木などが、また創建以前の包含層中から柱根かと思われる丸木片（樹種マキ）が出土した。SB400出土の柱根は、長さが17~19cm、幅11~14cm、厚さ10cm足らずで、腐蝕が著しく進行した小木片と化している。

2は楔。先端部が欠失し、頭頂部が摩耗する。刃に相当する部分は身部よりも細く仕上げる。腐蝕のため加工痕は不鮮明。長さ11.0cm、幅1.7cm、厚さ1.1cm、樹種はヒノキ。第105次東区のSD305出土。**6**は腐蝕が著しく、形が崩れているが、ほぼ全形をうかがえる。平面形は縦16~17cm、横20cm程度の長方形で、4側面は高さ約12.5cmの長方体の上部1/3を斜めに削り落とし、台形とする。頂部に長さ約6cm、幅約4cmの長方形孔を穿つ。孔は上半部が垂直に穿たれ、下半部は下へ向かって外方へ広がり、底部へ貫通して方約10cmとなる。やや小振りながら、その形態は大阪府久宝寺南遺跡出土のたたりの台に類似する⁶⁾。柱部分が出土しておらず、断言はできないが、上述した形態の類似性からみて、ここは一応たたりの台としておく。第95次西区のSD225出土。樹種はヒノキで横木取り。**留針4**は、細長い棒状の材の側面全体を細かく削り、先端を一方から斜めに切り落とし、頭頂部を丸くおさめたもの。加工はそれほど丁寧ではなく、全体にやや湾曲している。長さ15.1cm、直径0.5cm。樹種はヒノキ。**3**は曲物底板。推定の直径17cm、厚さ約0.6cmで、全体のおよそ1/4の破片。現状では、樺皮綴孔や側面に側板を固定する木釘孔は認められず、あるいは蓋板か。一面に刃物痕が多数残る。第105次東区のSE

た た り

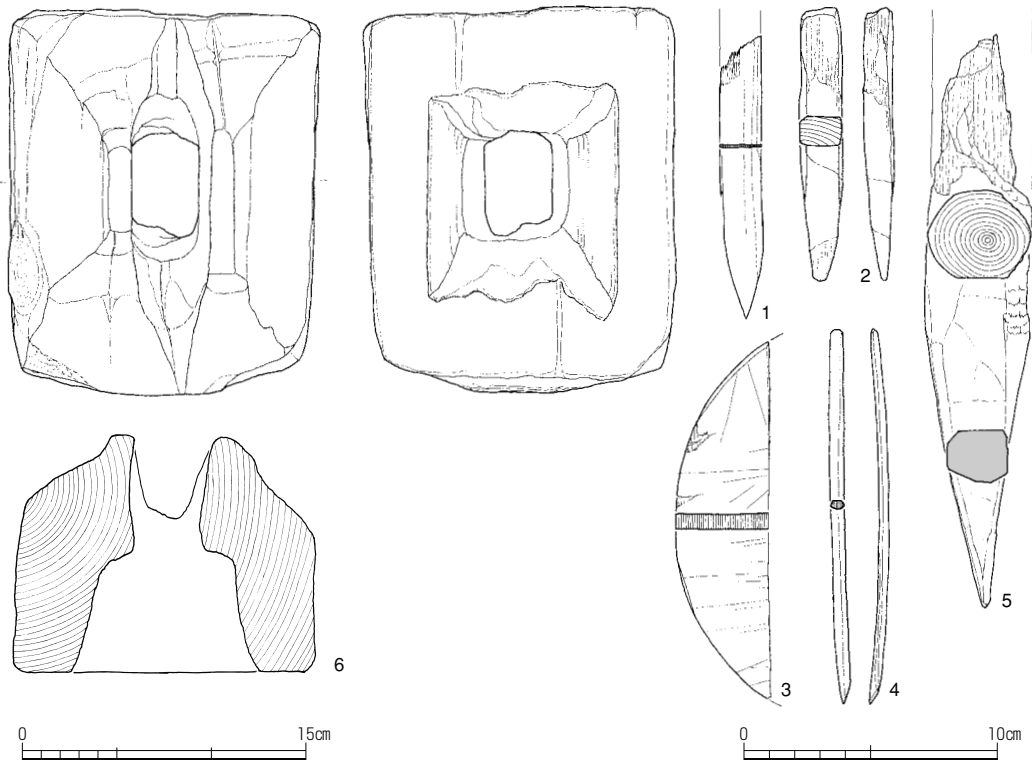


Fig. 101 木製品 1:3 (6のみ1:4)

311井戸枳抜取穴出土、樹種はヒノキ。同じ遺構から出土したもう1点の曲物底板は、腐蝕が著しく図示していないが、直径約16cmあり、樹種はヒノキ。1は薄く細長い板の一端が剣先状に尖る齧串で、上端部は欠失する。頭部の形態と切り込みの有無および形状が不明であるが、ここでは齧串に含める。残存長11.3cm、幅1.7cm、厚さ約0.1cm。樹種はヒノキ。第111次南区SE330出土。5は杭の先端部。残存長23cm。直径約4cmの丸材先端部を長さ約11cmにわたり、粗く四角錐状に削剥したもの。第95次西区SD226出土。樹種はモミ属。

E 動・植物遺存体 (PL. 55)

動・植物遺存体には、獣骨や獣歯0.85kg、^{べっこう}鼈甲かと思われる微小片、少量のクルミとモモの種などがある。種子は第105次東区のSD305・306や包含層などから出土した。また、獣骨、獣歯は第95・111次南区SD180、第105次東区SD306・307、同西区SD292、第111次北区のSX357などから出土した。全体として腐蝕・風食が著しく、腐蝕が比較的進んでいないものでも細片化しており、種を識別できるものが少ない。上述の第105次調査東区の包含層から出土した馬の臼歯2点(7・8)のほか、SD180から馬の左大腿骨1点が出土している。

馬歯と馬骨

- 1) 有本昭子「竹内遺跡採集のナイフ形石器」『旧石器考古学』59、旧石器文化談話会、2000年。
- 2) 清水真一・佐藤良二「奈良県桜井市阿部丘陵遺跡群出土のナイフ形石器」『旧石器考古学』37、旧石器文化談話会、1988年。
- 3) 吉村公男・深瀬早人・佐藤良二「馬見丘陵におけるナイフ形石器の一例ー奈良県河合町フジ山古墳付近採集ー」『旧石器考古学』39、旧石器文化談話会、1989年。
- 4) 島田政則・北村博義「天理市布留遺跡出土のナイフ形石器」『旧石器考古学』40、旧石器文化談話会、1990年。
- 5) 富永里菜「馬具の革金具」『銚子をめぐると諸問題』奈文研、2002年。
- 6) 上原真人編『木器集成図録 近畿原始篇』奈文研史料第36冊、1993年。